







宮崎八百吉著述

# 歸省

明治廿三年七月再版

東京民友社發兌

四部廿三平士民再選

# 魏 管

宣統元年十月廿三日

東京吳文振書局

## 目次

第一	歸思	一頁
第二	歸鄉	十七頁
第三	吾鄉	三十七頁
第四	吾家	五十一頁
第五	鄉黨	六十一頁
第六	戀人	七十九頁
第七	山中	九十四頁
第八	追懷	百十九頁
第九	離別	百三十六頁

本書に關する各新聞雜誌の批評

國民之友批評

語に曰く、雜鷓の聲は老鷓の聲よりも清しと、吾人は湖邊子の新著「歸省」を讀んで、此語の眞に吾を欺かざるを知る、此書や其著眼清し、其理想清し、其文章も亦朗々として清し、而して作者が年少にして無邪氣なる感情は、宛も幽崖深谷の水、未だ俗界一點の塵を着けざる者の如し、此書は分量よりすれば、二百頁に其四分の一を缺ける小冊子あり、その事柄よりすれば、作者が故郷に還りて其見聞感想を叙せる隨筆なり、未だ之を以て明治世界の妙著述と云ふ可からず、未だ之を以て文海萬壑の波瀾を捲起すものと云ふ可からず、未だ之を以て天下の耳目を聳動せしむる日星河嶽の大文章と云ふ可からず、然れども尙吾人をして一讀、再讀、三讀、已む能はざらしむるものは何ぞや、眞氣の人を動かすもの有ればなり、我邦詩道の振はざるや久し、漢詩和歌に論なく、格調の爲に壓迫せられ、偏固なる、鄙俚なる、浮靡なる、

輕佻なる思想に束縛せられ、遂に我邦民をして、空しく其の清白なる胸懷を洩すに所ふからしめんとするに至れり、此書の如きは精巧なる英文の調子を以て、縦横自在に和漢の文字を使役し、その眼に映じ、心に感じたるものを、水の石より落るか如く、雨の天より降るか如く、春風花枝を拂ふて落葉片々たるか如く、極めて眞實に寫し出したる者にして、乃ち之を名づけて一種の無韻詩と云ふも不可なきなり、然り詩若し理想を人間の生活に應用する者ならば、此小冊子は即ち詩なり、詩若し人間の生活を批評する者ならば、此小冊子は即ち詩なり、高妙の詩か、超逸の詩か、天使謠ひ、星文舞ふの詩か、吾人之を知らず、然れども其眞詩にして偽詩に非ざるは、吾人體に之を斷言し得るなり、詩の事たる、事物を其儘に寫すに非ず、自己の眼珠に反映せしめて其影射したる物をば寫すなり、而して詩人の妙は、其反映せしむる着眼の極めて眞なるこ、高きに在り、吾人は此書の着眼極めて高しと云ふを得ず、然れども其清く、温に、且眞なるは、吾人敢て之を許すを吝まざるなり、滔々たる文學の世界、宛もハジキ

天路歷程の虚榮城中に遊ひたる想あり、然るに今この小冊子に出遇ふ、吾人が之を嘆嘆し、之を欣賞し、且その多少の缺點あるも之を宥恕し、愛誦已む能はざる所以のもの又た宜ならずや、  
竊に世上を觀するに、浩大なる思想を有する者は、多くは懷疑者となり、宛かも天堂より墜ちたる天使が、暗黒混沌の翼に乗じて宇宙を漂ふが如く、その依る所を知らざる者あり、此の一關を踏破して、萬物皆空の解脫界に躡入する者あり、解脫の跡高からざるにあらず、然れどもその冷眼寒腸は、失望、落胆、窮愁の氷結したるものなるを知らざる可らず、然り彼の大悟者は、要するに是れ悲觀者の進化したる者に過ぎず、而して世或は此等の境界にすら一步を踏み込むも能はずして、たゞ眠り、食し、語り、笑ひ、働くを以て一生を了する者あり、又た他の眠り、食し、語り、笑ひ、働くを摸擬して、文學の能事と做す者あり、想ふに「歸省」の作者は、何れの領地に戸籍を有する乎、吾人の見る所を以てすれば、作者は別に一個の乾坤を有するが如し、何ぞ、基督教希望的の理想即是なり、

惟ふに此の小冊子には、悲哀の情横溢せり、開卷の首句「去年の秋吾最愛の父斯世を去りしより」既に一滴の涙を湛へたり、卷末の結句「車を停めて願望すれば、吾故郷も亦幻影となり、暫らく見えて亦消へぬ」一語黯然魂消せんを欲す、その中間又た無數の涙あり、而してその都會を以て村落と比較し、文明を以て天然と對照し、進取的生活を以て退守的生活と併觀し、常に彼を棄て、此を取るの傾向あるを見、彼是商量し來れば、或は吾人をして作者が悲觀者の一人なるかを思はしむるも雖も、万峰屏立の中、恒に一條の活路を發き、滿目幽闇の裡、恒に一片の天光を望み、恰も四十餘年アラビヤの沙漠に彷徨するも、尙ほ眼前鬚髯に迦南の樂土を忘却せざるが如きを見れば、吾人が作者を評して基督教希望的の理想界に呼吸するの人と云ふ亦大過なる可きか、然らば則吾人が此の小冊子を読んで、恰も空林の中、十年來の友人に邂逅したるの想あらしめたる豈に放なしとせんや、豈に放ふしとせんや、謂ふ勿れ、此の書摸擬する所、尋常一様の事なりと、知らずや古へ名工あり、神像を彫刻せんすと、天下の

珍木奇石を蒐集して、その鑿を試みたり、改作々々も意に適するものなし、懊惱悔交も至りて覺へず假寐す、夢に人あり諭けて曰く、汝が籠下に燃へ残りたる薪片を探り、汝が意の淨ふ儘に之を彫刻せよと、詩の材料何ぞ必らずしも、徐福が三神山の如く、稷王の西王母の如く、之を遠きに求むるを要せん、苟も詩眼を以て之を見れば、萬物身邊、悉く是詩料ならざるはふし、それ唯た身邊の事のみ、身邊の物のみ、故に人之を讀んで恰も自家の境遇を映出せられたるが如く、自家の胸中の秘密を發かれたるが如く、覺へず點頭するに到るあり、眼前の景、口頭の語、總て詩人無盡藏中の一物なり、吾人は作者が幽淡平雅の別界に、立脚の好版圖を占めたるを悦ぶ、  
作者の着眼は既に畧々評せり、其手腕に至りても、亦一言せざる可からざる者あり、作者は人の品性を描寫するに於て、多少の伎倆を現せり、例せば「吾家」と題する一章中には、その父、その母、その二人の兄、その二人の妹、その一人の弟の性質を參差として畫き、宛も眼前、史記合傳を讀むが如き想あり、之を拙手の

畫工が寫出せる肖像の如く、首より以上は百人も千人も皆同一人なるものに比し、三文小説家か、一篇の中或は女とし或は男とし、或は客とし、或は主人とするも詮する所異名同性質の人を寫出するも同目の論にあらず、是れ彼の寫す所は虚にして、此の寫す所は實物あるが故なりと云へ、又た作者が、平生目慣れ、心熟し、鏡を以て物を照すが如しと云へ、宛に角品性繪畫者として、作者決して拙技の名を受る人に非ず、  
風景を叙するに至りても亦見る可きものあり、その寫すや作者は毎に綠彩を用ひたり、又た毎に軟筆を用ひたり、又毎に濃抹を用ひたり、去れば滿幅の雲煙筆底に涌き、咄々として人に逼るが如きと無く、又た鮮麗赫奕目を眩するが如きもの無しと雖、穩秀圓妙その上乘なるものに就て之を見れば、宛も應舉の畫に發するが如きもの有り、蓋し一篇の中、その景色を寫出する妙は「山中」の章にあるべし、  
而して更に作者の勝場は、景と人と己とを打て一丸と成し、之を自家の眼中に映射したるものを寫出すに在り、想ふに作者此點に於て、既に其室に入れり、若そ

れ勉て止まずんば、他日堂に上るが如きと有らん、例せば「山中」に左の句あり、

微かに痴き唐確の響きに、吾軀は悠然として眠る同時に、靈魂は戸外に忍びぬ、天上の月を採らん爲に、地上の星を拾はん爲に、清き流を嘗めん爲に、圓かの夢を捉めん爲に、

是れ何等の好句ぞ、清想で、捉へ來りて水晶盤裡に盛るも、亦以て溢賞と云ふ可からず、

更に特筆すべき事あり、此巻の題目多しき雖、始終を貫くものは、亡き父と活る戀人なり、若し賓主の點より云はゞ、亡き父は主中の客にして、活る戀人は客中の主なり、亡き父に關する紀事の惻々として人の心牌に入るは、感、中に動けばなり、且人間誰か其父を受するを耻る者あらん、父を愛する者は孝子の名を獲るに非ずや、人誰か孝子たるを耻る者あらん、誰男女の愛情に至りては、絶世の才人妙士も、幾度か筆を把りて筆を抛つなり、適々之を述るも、或は物に托し、或は殊更に其文字を婉曲にし、毫も其深情を的燦として明珠の如く寫出す者あるを見ず、而して此篇は優に之を

寫出せり、「戀人」の章を一讀する者は、以て之を知らん、凡そ斯の如き事を寫す、他人に至りては驚心駭魄の事なり、而して作者は平々として、宛も小説家が他人の事を寫出すが如く、有りのまゝに、傍若無人に、大膽不敵に、自家胸臆の秘密を寫し、而して更に毫も隠き、穢はしき所を見ざるは、之を作者の妙腕と云はん乎、抑亦たその樂んで淫せざるは、所謂思邪なきが爲なりと云はん乎、

凡そ人の品性を視る者は、その明所を見、又その暗所を見る、今作者の品性を寫すを視るに、暗所を寫すは三にして、明所を寫すは七なり、而して適々他の暗所を寫すも、毎に其一方の活路を祈り開けり、その嫂を寫す、その伯兄を寫す、その叔兄を寫す、その酒屋の主婦を寫す、質屋の叔父を寫す、その山中の目に一丁字なき叔父を寫す、皆然り、是れ品性繪畫者として未だ悉さざる所あり、然れども詩人たるの資格として、恒に溫柔敦厚の資を具へざる可からざるの點より云へば、所謂その過を見て仁を知ると云ふの外なし、我邦の文學は、都會の文學なり、東京の文學なり、そ

の文學者が寫す所のもの、多くは東京人士の生活のみ、その解剖し批評する所、多くは東京人士の性質のみ、その小説に現れたる主人公は、某學士に非ざれば、某女學校の卒業生なり、官吏に非ざれば紳商なり、藝妓に非ざれば、新粧の佳人なり、下宿屋に非ざれば、温泉場なり、而して偶々田舎の事を記する者あるも、都人士の眼孔を以て觀察したる者にして、恰も彼の泰西人士が日本の風俗を觀、之を奇とし、之を怪とし、之を一個の笑柄として記述する者にして、其眞味を解したる者に非ず、而して所謂田舎人の眼を以て田舎の消息を寫出したるは、是亦た此書の特異の性質と云はざるを得ず、肥料場の櫓の瓦には、大なる南瓜顔がり落ち、雷の如く座はれるあり、山路に客と對話する老婆あり、響應の下物を取らんとして自ら薯蕷を掘るの叔父あり、愛郎を襲せんを欲して自ら後園の梨を落すの戀人あり、是豈に都人士が夢にも知る所ならんや、而して其死に垂とする老翁が、手巾の贈物を見て繪絹と斷信し、之に珍客の書を乞ひたるが如き、田舎の若者が桑苗商法に失敗したるが如き、若くは士族の農夫と成りた

るが如き、其舊家が追々財産を失ひ、投機に手を出し、更に失敗したるが如き、皆是れ今日田舎の實狀を描き出したる者にして、吾人は之を讀み來り、宛もゴルドスミスが荒村感懷の詩を讀するが如く覺ゆるなり、慨して云へば、此の小冊子は、幽溪小艇なり、奇峯千丈の峭を見る可らず、斷橋淺水なり、長風紫淵を捲くの壯を望む可らず、野蹊の秋花ふり、鬱々たる香水の偉を期す可らず、然れども近時の著作中、若し之を讀んで人の性情を涵養し、兼て人をして樂ましむる、健全無毒なる小品文學を濡めば、吾人は先づ指を此の小冊子に屈せざるを得ず、

吾人が觀察したる所のものは、多くは作者の長所なり、吾人その短所を看出さざるに非ず、然れども言ふに違あらざるなり、その好む所に阿れるの苦は、吾人甘して之を受けざる可らず、詩に曰く、鶴九皋に鳴て聲天に聞ゆさ、作者今妙齡、若それ蕙澤に棲遲する無くんば、其聲天に聞ふるの日も、未だ必ずしも期す可からざる空想に非ざるなり、

國民新聞批評 御作「歸省」流車中にて拜讀仕



り殆んど豫想外に敬服仕候折から全車中に老衰の病者  
乗合ひ看護婦に介抱され漸々に其腕に凭れ居りしが眼  
は窪み頬はやつれテラの上より貝殻骨の高きを露は  
したる様如何にも愕然にして月明に白張提灯の凄みを  
添ふる事よもや一ト月の外にあるまじき思はず涙ぐみ  
しが恰も開卷第一行日曜日の外に聖日を生じたりとあ  
りたりしを拜見して此境遇に落ちるもの一人二人違か  
らぬ中に殖ゑるふらんなど考へ申し尙ほ又瞑目徐ろに  
五歳の折分れし亡母の事思出し人知らぬ五月雨を袖に  
そいぎ申候

兼てよりアーピングを御愛讀の由承及候ひしが此一篇  
も何處もなくアーピングの調子有之様に思はれ候如何  
にもいみじき御手際にて筆幾升御殺しなされて斯る御  
腕前を得られしものか竊かに嫉ましく相成り候誠に  
小説にも紀行にもあらぬ一種のスケッチ様のものを宛  
角古典に拘執し源氏八犬傳以外に眼の届かざる現代の  
文學社會に出さるゝ事先づ御勇膽の恐ろしき相見へ申  
候夫ればかり詩論嘆がしき時節柄に和文家連中の譏  
をも御忌憚なく幾多の御作を擧げられしは御熱心のは

六  
ご誰しも敬服致すべしと存じ候但しアーピングの詩は  
一向に存じ不申候故兄の御作と比較して果して如何な  
るか知らず又散文までも較や疑ふ處有之候是等は追  
て兄が御教示を乞ふて感を晴し可申候

殊に御交際を辱ふしたる我身に取りて最も面白く思ひ  
しは一言一句の中に清容ありくを見ふる心地して讀  
りて左ながら兄と對座し口角沫を飛ばす御有様を眼  
前に現じ申候惣じて傑出の作(傑出ならざるも)には自  
然著者の現るゝは數の免がれざる處なれば珍らしげに  
兄の御作に就て申すにあらぬ最高著者は外物を借  
りて其理想を寓する様に思はれ候アーピングは米國に  
於てこそ第一流にもあれ英國産出の人に較すれば第二  
流寧ろ第三流に候得とも夫れすら其スケッチ若くはア  
レトスアリツデ、ホールを御覽あらば御發明に相成る  
べしと存じ候尤も是等は御承知の事なるべければ別に  
御卓説有るべしと推想仕候愚かしき胸臆をもて測度す  
るは甚だ恐縮に候得共百五十四頁通讀して折々に吃驚  
し又折々に嘆息致し候中にも第四篇に部部を御比較あ  
りし御論を拜讀せし折は初め憎くなり後可愛くなり又

淺ましくなり最後に巻を膝に閉せて車窓に嘯き申候何  
故なるかを我身自ら悟り不申候が兄能悟り給ふや如何  
晋子の句に「すびつさへすこきに夏の炭俵」があるは是  
れ兄が御論を評したるものと生が友某曾て申居りしが  
今度初めて心附き申候全じ人の吟なる「葦狩や鼻の先  
なる歌がらた」は最もよく兄が御文字を評し得たるも  
のさ考へ候殊に生平兄に親炙して聴く處を全評すれば  
「満月に不斷櫻を咏めばや」の十七文字にて蔽ふべしと  
存じ候是も全じ人の作に候

なほ拜眉の節はいろく御教示を蒙むるべき覺悟に候  
まづは不取敢拜讀致せしまゝ申上々萬々敬服

七月七日

不 知 庵

湖處子様硯北

東京新報批評 詩境の大小文情の高下、陶淵

明大なるか杜甫大なるかゴルドスミス高きかミルト  
ン高きか予嘗て友人と之を論ず予曰く陶淵明、白樂天、  
ゴルドスミス、アーウヰンク竊然たる和氣には不足  
なし斷岸千尺光燭萬丈の勢に至りては彼等夢にも知ら  
ず絶代の文人は矢張り杜甫ミルトンなるか友人曰く然

り併し彼のミルトン杜甫滿腹の不平憂愁天地を悲み宇  
宙を恨む是尙小なり低し、四子は憂愁の境を過ぎ不平  
の極に達し天地を小として微塵に物言ふも愚なりとし  
宇宙を低しとして汚物を争ふも面倒なりとし天地宇宙  
の外に於て別に一境を求むる其高大なる所以なり若し  
夫れ「バイブル」に「中庸」は別に一境を求めんさだに  
せざる聖人の深意を觀るに足れり是亦一説なり今此  
言に依りて今人の文を觀るに此頃發行の經濟雜誌に報  
償論と題し掲載せる敬字先生の論文はエマーソンの報  
償論に出でたれど趣意文辭ともに原文に勝りて「バイ  
ブル」「中庸」の境に近し次は則ち湖處子の此著にして  
湖處子の詩文がゴルドスミス、アーウヰンクに髣髴  
たるは二子の文章に得る所ありて然る者るか宛も角  
も淵明の風を慕ふは卷中各章の發端に掲載せる古句の  
大抵淵明の詩文中より出でしを以ても知らるる乍去詩境  
文情は次第に變遷する者には違ひなければ社甫一進せ  
ざれば淵明たる能はずと謂ふにあらす各人の天分に不  
平多きあり和氣多きあり緻密なる疎豪なるあり種々様  
々の異同あり此天分の範圍内に無數の段階ありて大家

と凡手の別生す湖處子は則ち和氣精慮の天分に富める者なれども未だ直に之を以て湖處子を大家視するを得ざるあり此著には淵明アウウヰンガの境に於て許容せざる詐偽と誇張の分子夥多なり和氣精慮は正直眞率と相待つて絶美の文章を現出する者なるに湖處子は多く偽言を吐けり六年以前に其時代には作られまじき新體詩を作れりとの等是なり又大く誇張の語を成せり故郷が目に見えたりとて「思はずも車を飛び下りて其土に接吻したり」といふの類是なり是蓋し處子が年尚ほ壯にして文未だ老ひず名譽を求むるに急あるより或は流行の法螺を吹き或は奇怪の語を吐き世人を瞞着せんとするなり處子若し此二病を去り古句を濫用して采色絢爛に過ぐるを避け正直眞率を後稱として和氣精慮の天分を利用して明治の文學界に淵明ゴルドスマスを觀るの望なきにあらす卷中の詩歌も趣向は勿論押韻にさへ餘程苦心せし者と見え悉皆二重韻を用ゐたるは敬服敬服我邦の詩歌に若し韻脚を用ゐるとすれば二重韻三重韻を用ゐざる可からざるは識者能く知る

女學雜誌

數年前、日本情交史を細評して著者

の才を賞揚したるは吾が女學雜誌記者のみ、今進化したる同著者の手に成れる散文の詩を讀み、淺からぬ緣故に因なみ、一層の贊辭を呈したきは山々なりの文體の一種異様にして宛から翻譯文を讀むが如く、嘖み切れぬ西洋料理を吞むが如きは面白からぬぞ、想像に豊かあると、聯感の細やかあるとは非凡と云ふべし此を以て、意至りて言はざる所なきのみならず、意至らざるも感の通ずる所尙ほ言ひ及ざるとなし、巖々として此のはふが如く、轉々として煙の環の連なるが如し長所此に存す、故に短所も亦た此にひそむ、屢ば此世に彼がいつくしむ 送ひ子におくちのふごり繪にも入りてや身にぞしむ 泣かむ斗りの目のくさり。

の如き措辭麗観あり、此れ抑そも歌と云ふを得べき乎。然し乍ら、其の歸郷、關門をいらんさするに近づき、

車夫は猶ほ食後の吹煙を取れり、而る後ち草鞋を代へ店主に辭して而る後ち拭きたる後の顔を拭き、其手巾を頭に結び、而る後ち轆を取れり、輪は旋り初め

の如き妙所も少なからず、兎に角此上一皮の尙ほむげざる、今ま一修練の未だ足らざるを憾むのみ、湖處子獨得の文藻は既に已に其の微光を發しつゝある也。

經濟雜誌批評

本書は曩に我社に「國民之友及び日本人」と云へる一篇の論文を寄せて能文家の名を博したる愛卿學人の作なり、十三日發兌の國民之友には蘇峯先生の精細周密なる論評を掲ぐと云へば、平素經濟の事を談して文學思想の涸乾せる余輩亦何なかに云べき、唯た聊か本書を讀みて感したる所を述べまくのみ、余輩は著者の基督敎信者あるを知るが故に折角の好文も其基督敎臭味の爲に俗殺せられんとを恐れしが、之を讀むに左る臭味なく、文の趣味多くして田野の樂を談する殆ど陶家の詩卷を讀むが如し、讀て第七章山中の一篇に至り益々文の妙なるに感服せり、佐田村は是れ宛然たる武陵桃源、明治の柴陳村、桑間犬吠鷄鳴の趣擲すべし、新家の家族より著者を招待して饗應する宴席に衆客集りたるも互に遠慮して、談未だ興に入らざる時の形狀を左の如く述べたり、

ぬ、

早や半時間餘立たるも、會話は唯た冒頭より冒頭に移り、一個の東京疑問は、他の東京疑問に打消されつゝ諸人の心全く解けず、何さか圭角ありと覺へられたり、我謂へらく、是れ我が田家人たるの足らざる故に渠等の心未だ開けずと、云々

村夫野人が東京歸りの著者に對して、面煩なる形狀躍然として紙上に顯はる、都人士の田舎に遊び村夫野人に接したるものは必ず此の文の妙なるを悟らん、然れども是れ叙事の妙なるなり、同章中左の文字あり、

我嘗て謂へり、エアンの生活は迦南の生活より平和に、無何有郷の民は神農虞夏の民より安穩に、無爲の世界は文明の世界より快樂なりと、今や吾叔父の境遇を觀るに及びて、亦竊に無識者の生活の智識者の生活よりも幸福なるを觀したり、孔子曰く「疏食を食ひ水を飲み、脛を曲げて之に枕するも樂亦其中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と、蘇東坡も亦曰く「人生字を知るは憂を知るの始め」と、蓋し世は字を學びて智識に入り、智識より空望に入り、空望より失望に入り、失望よ

り不平憂愁の門戸に迷ふ、吾人若し字を知らずは學者たるの望なく、字を解かざれば知者たるの然なるべし、吾人誤りて智慧を以て幸福の權衡とし、智慧を以て快樂の標準とせり、然れども我見る處を以てすれば、智慧知識の探究も、亦是れ金錢の穿鑿の如く、一個の俗情に過ぎざるなり、

右の文を讀むときは著者が有道の士たるを知るへし、白樂天の詩に曰く、我生禮義鄉。少小孤且貧。徒學辨是非。祇自取辛勤。世法貴名教。士人重冠婚。以此自桎梏。信爲大謬人。と著者の意蓋し此れに同し、著者既に此の本領を有す、宜なり其文章の妙なる、若し強て文章の短所を云はゞ文字の晦澁なるにあり、然れども其の餘韻、餘情を存するも亦其の晦澁なる所にあり、左れば文字の晦澁なるは、著者の短所にして亦其の長なり、著者必ずしも之を改めずして可なり、

報知新聞批評「歸省」に至りては又將に明治の文苑に一種の彩花を添へんとするもの全篇分ちて歸思、歸郷、吾家、戀郷、戀人、山中、追憶及び出立の九章となす皆な著者が嚮に歸省するときの始終を叙する所な

り著者が平生工夫して做出たせる一段の精緻細緻なる措辭法は此書に於て愈よ成熟の色を呈せり著者が思想に富みて觀念に豊かなるは國民之友と日本人の二雜誌を較論して遂に莫然たる一冊をなせるに由りても之を見る可し此書に至りて亦益す其妙を見る而して特に珍重するゆゑ人の者は著者の心地純白無垢にして小兒の如く耳目に接する所は内に感し内に感する所は筆墨に顯はる其間些しの巧機無く些しの邪運無し故に眼前の景口頭の語皆ふ通例人の想像に存するを得る所にして之を讀めば怡然として頤を解かざる莫し常に謂ふ最も正直に語る者は最も文を能くする者なりと昌黎の詩が樂天に輸する者此に在り「浮田末子の履歷」が世上幾多の祭詞に勝るもの此に在り此書が「たび公けにされん」さき作家隊裡別に載を抜くべきもの亦必ず此に在らずんばあらす姑らく一例を擧げん其の始めて叔母の許を訪ひ現時の令室當時の戀人を見るの條に言へるあり「今は接待の人なきに困りて直ちに奥なる客室に來りしに思ひきや吾戀人の此の條先に縫ひつゝあらん」とは實に戀人は美はしくも年長けて轉た可憐の兒と

ふ能はざる所を言ひ而かもアドなく可憐なるは以て其の純白無垢なるを證すへし

なりぬ不意の對面に紅花を散らし忍び得ざる喜悅の笑顔に坐を起ちぬ然り此の急遽の際にも渠は猶ほ容止を保ち極めて靜かに極めて優さしく往き消へつゝ間もなく見へて亦隠れ其母は出て來れり此時叔母は溢るばかりの満足を以て云ふ(云々)

叔母の談話げ娘の來に遮られたり渠は今手づから落せし梨子を冷水に浸して運ひ來り薄紅に光る顔もて庖丁操りて無言に皮剥き初めたり叔母は「日頃卿が愛たりし此梨子何時も好く買りしが、今は五年、然なり卿が上京せし後一秋も買らず漸く今年になりて枝の折る、程買りぬ」と云へば

「宛から卿を待ちしに似たり」と母の語尾より戀人始めて物云ひしが忽ちに心付てや耳熱して再び語を改めたり「去るにても此間の風にて三分一も落ちつらん」と云へり

我は心底に叫ひたり渠が胸の音を早や聞きたれば梨子幾個落つとも遺憾なしと  
文の佳處を求めは却て此外に甚た多し然れども其の他人に在りては大抵自ら己が心地の邪運に迷ふて敢て言

# 歸省

湖處子著

## 第一 歸思

少無<sup>ナシ</sup>滴<sup>ツ</sup>俗<sup>ソク</sup>韻<sup>リン</sup>、性本<sup>ト</sup>愛<sup>ス</sup>丘<sup>ノ</sup>山<sup>ヲ</sup>。  
 誤落<sup>テ</sup>塵<sup>ニ</sup>網<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、一去<sup>ニ</sup>三<sup>十</sup>一<sup>年</sup>、  
 羈鳥<sup>ト</sup>戀<sup>ヒ</sup>舊<sup>ノ</sup>林<sup>ヲ</sup>、池魚<sup>ト</sup>思<sup>フ</sup>故<sup>ノ</sup>淵<sup>ヲ</sup>。

……陶淵明歸田園居

去年の秋吾最愛の父斯世を去りしより、月の十七日は我が爲に安息日の外なる聖日と  
 あり。此日に於て我は事業を執る前に密室に籠り、楣間に挂<sup>か</sup>かれる吾父の肖像に對し  
 て、多時の黙思を経るを例とせり。此の二三年來は、過くる月日の偏へに急ぐと思はれ  
 しか、今は早や吾述懐に終身悲しかるへき秋立ち回り、淋しき一室も亦七月十七日とぞ  
 ありぬ。我は定例の如く未明に起きて<sup>くちて</sup>漱<sup>そく</sup>ぎ、朝餉<sup>あさけ</sup>を了<sup>ら</sup>へて端座しけるに、楣間より<sup>み</sup>瞰<sup>み</sup>下<sup>さ</sup>  
 す面影の、今日に限りて物言ふはかりに慈愛に觀えたり。徐ろに其額の波線を算へ、薄

らぎたる眉毛、萎みし眼、宛も開きなん其口を細視しつゝ、六年以前長くは別れじと誓ひて上京の首途かきでを取りし其一子を、未練なく旅立たせんと、快飲祖道せし當時の容貌と、今は知何許變りてあるや。而も此實まじしき容貌だに、最早世に見るなきこと、如何許いかばかり無爲あじきなきやを思ひし時に、無量の所思は哀歌に溢れぬ。

二

一 早や手の上のおもかげと

三 四年のうちに面影の、

父はなりけり、まのあたり

世にうつろひて見ゆるかな。

繪には聲なし、ものいへど

首途よこおくりしその夕の、

咽むせぶはあのが涙なり。

笑顔えがほにかへす術すべもかな。

二 額によする年なみに、

四 此世に彼がいつくしむ、

うけしなやみも數へなむ。

迷ひ子にあくそのあどり、

豊けき頬は世のうきに、

繪にも入りてや、身にぞしむ

堪へし力ぞこもるらむ。

泣かむばかりの目のくもり。

五 寫るは五十六の冬。

六 魂たまよ百千世ほろばすは、

明る秋にぞ消るある、

むかし汝が經し世のたひぢ、

もろき命は草の露、

あゆむ汝が子にぬかはくは、

つらぬき留むる由もある。

げてよ棘とげと花のみち。

我は屢之を聞きぬ、親の愛の十分の一を子に有たしめよ、彼能く孝子と稱せられんと。我が父に乞ひし暇は唯三年ありしも、我は六年間三度歸省の豫約をのみなして一度も歸省せざりし。父母は唯だ其病を之れ憂ふと云ふあるに。時には吾病を告げつゝも、其慰藉には唯癒へたる後の寫眞を贈りしのみありき。或は來書の短かきを父に咎めて、吾音信の少なるに注意せざりき。嗚呼父よ老ひては生命いのちを子に懸けぬるを、我は如何あれば無心に過ぎし。我は懺悔す吾父の晩からざる逝去は、半ばは吾不孝によることを。

是は唯近頃の事なるのみ、我は生れて乳母の家に養はれ、五歳にして吾家に歸り、八歳の暮祖母の逝くまで其膝に生ひ、十四にして郷塾に宿し、十六にして福岡中學にあ

三

り、十九にして自から好みて母の郷なる山中に入り、幾くもなく首府に來れり。斯く我は家にありて父を識ると他の諸子に劣れるも、父の吾を容れたるは「家關白」なる吾渾名あなぢにより、今尙ほ記念に覺へられたり。廿五年の吾生活は父の爲に豊かありしも、父は生前一日も我か爲に安からざりし。尙ほ且父老いて其病に侍らず、父死して其喪に走らざりしなり。今は唯父母の洪恩を知ると空しく他人に過くべきこと、喪の日に賤きし涙の兄弟に劣らざりしとのみ、せめてもの我が心遣りなりき。去れど是皆空にして、我か父の恩を知るは父の死後にありしなり。唯願くは悔恨の犠牲となりて、世間我ならざる人の戒とあらんのみ。去れど若し亡き父の爲に何か務むる事もかなど、亦往々空頼むそらたのこともありき。

此時童子は來りて去り、一封の書を机上に殘しぬ。是は吾家兄よりの音信にして、最初には兩地の氣候を叙し、次に相互の無事を祝し、最後に父の墓誌の執筆を頼み、子細なる墓碑の圖形を添へ、其規模と結構とを示したり。我は幾度か其信書を反復し、別けて其墓誌の文字と圖形を沈思しつゝ、嘗て根に歸らざりし憂も、猶ほ他の野に於て實を結ぶべき例たふしもありと喜びつゝ、是ぞ吾父に務むる最初の奉仕つとめにして最後の奉仕つとめありけるとて、久しく絶ちたる臨池てんちをぞ新ためぬ。

早や日の熱の熾初むる頃、童子は再び來りて告げぬ、門に子を負ひし婦人あり、主の同郷の人とて面會を求めたりと。我は其人を許したるに童子又來り告ぐ、渠は他所に要事あり主の門前を過くる序ついでかれは、一面を經れば足れりと云ふと。我出て會ひぬ。去れど我此婦人を全く他人と思ひき。渠は曰へり、妾は筑前咸宜村みたまの人と、筑前咸宜とは吾故郷なれども、我は吾郷に此婦人ありしや否を知らざりしなり。尙ほ吾記憶の惡しきやと思ひ、倩其人を觀たるも思ひ出ることなかりき。彼は今年齡三十に近くして緑髪久しく結ばず、形容も太と寂寞なりき。其被服は年を経て薄らき、帯は僻ある儘に皺に縮み、滴る顔の汗拭きし手巾てぬぐいも、舊色の尋ねがたなく色さめたりき。隣あはれの母よ、誰か娘にして又た誰が妻なるや、さても渠か負ひける子は、渠には如何許掌たかこの珠あるべきも、愛子めてこと察せらるゝ程不便のものと思はれたり。細りし骨身は渠を幼く觀へしむるも、渠は早四歳以上あるべく、其顔は菜色の爲に萎みたるも、纓子むすひことは觀へざり

六  
しなり。其瘦せ細きは生れて乳無かりし故か、其菜色は母に榮養の足らざる故か、兎にも角にも、太と愛たかるべき此年に、太と實しく育ちて見えたり。然して此母は果して吾故郷の誰なるや。圖らざりき「伊昔紅顏美少年」ありし吾隣村の舊家の愛娘あらんとは、渠が名のるに由りて知られぬ。實に幼かりし頃は、二三度嬉戲の友たる事もありしか、年長けては唯渠が牆を攢りて走りしとど、其家も一旦の災禍の爲に零落したるを聞きしのみ。是も亦久しく心底に沈まり。漸く其人を見て追懐るほど疎しくなりぬ。此首府に於ては歴々たる人物すらも、動もすれば道路に窮せんとするものを、况して天涯より迷落して此土に在り、良人の掌妻子に足らず助くべき故郷もあらずは、斯く落魄したるも理なり。背ある子は見知らぬ我を恐れて泣出でんとしたり。若し吾手より渠に得しむる一個の梨子なかりせば、渠は定めて叫び出でしをらん。恵みを謝する渠が顔は、昔愛たかりける娘に似ずして、今零落したる其母に似たるこそ、母にも嘆きの種ならめ。母は今其出京前の履歷を短く、出京後の日記を長く、尙も現時の非運を涙と共に語り盡しぬ。然り渠が口から白さずとも、此の熱き日に車にも乗らで

此處まで來りし其難澁、餘所の要事を口に籍りて吾門に時を移す其心中、賤しく變る母の顔、物乞ひ氣なる子の目許、さては親子の運命も、今吾一言に懸りてあるかと思はれければ、我は其日の許す限り吾力を與へしかば、歸りぬ渠は感謝の涙を残して。

余は再び黙思に沈み他の暗愁に襲はれぬ。我既に父の死を知れり。然れども其喪に會はざりし故に、晝の幻影夜半の夢、但しは端なき思出に、父は猶地上にありと思はれ、此日に來る墓誌の依頼、此日に來る布施の要請の如き、親族の帯に爲すべき務めの生ずる毎に、我は往々にして想へらく、父の靈まだ世を去らず空中猶亡魂あり、暗裡に我に指示するありと。今や其墓——此世に於ける父の遺筐——他界に於る父の名刺——なる墓の新に建てらるゝとを聞くは、宛も其第二の死を聞くか如く、最早父に縁る音信の、此世に絶ゆへき思ひに堪へず、宛然鬼界島に歸洛の舟を送る僧都の如く、歸思湧くばかりに動きたり。歸思一たび定まれば、坐ろに今昔の感に沈みぬ。

「昔我往矣、楊柳依依、今我歸矣、雨雪霏々」。幼なき時此詩を讀む毎に謂へらく、遊子春出で、冬歸る、宜しく斯の如くなるべしと。既にして韓退之の揚子が歸省を送る序

八  
を讀み、「揚侯始冠擧於其鄉、歌鹿鳴而來也。今之歸、指其樹曰、某樹吾先人之所種也。某水某丘吾童子時所釣遊也。鄉人莫不加敬戒、子孫以揚侯不去其鄉爲法。といふに至りて謂へらく、我も亦揚子の如くして故郷を出て、揚子の如くして故郷に歸るべしと、霞雞ひく春半なる故郷の首途に、我左の如く歌ひて立ちぬ。

一 さてもめでたきさかひ、 三 竹の林に風ふけば、

いかに月日ののどかある。

絃なき琴の音もひびき、

小川に嫗は衣あらひ、

森の小枝に春來れば、

野邊に翁は秣かる。

書くにまさる花にしき。

二 圍む高峯はまへうしろ、

四 百代傳ふる此里に、

流るゝ水もみきひだり。

安く老いぬる親ふたり、

浮世へたてし村のいろ、

此處にぞ幸はあるべきに、

今も昔の世に似たり。

われは都にのぼるなり。

五 首途ゆかしき春げしき、

見ゆる形は消ゆれども、

にほふ櫻や桃のはな、

親は立つらむ猶ほしはし。

わが行く方にかぐはしき、

八 今一度とふりむけば、

馨は今日のなごりかき。

うつゝに消あむばかりある、

六 「駒のあゆみのなごそき、

我ふるさとの面影は、

すゝめ。」と鞭をあぐれども、

かすみの根にぞ沈むなる。

橋の柳に風そよぎ、

九 このうるはしき天地に、

枝にひかるゝ旅ごころも。

父よ安かれ母も待て、

七 遙に村を過ぐれども、

學びの業の成る時に、

わが父母はまだ去らじ、

錦かざりて歸るまで。

斯て旅なれぬ孤身を以て、河を渡り、山を踰へ、行くと一日程にして大海に出でたり。我は波に漂ふ浮萍の如く、船に數日の命を寄せて、鳥飛び斷たる立界灘に乗り、三十



六灘の門戸なる一目千帆の馬關を過ぎ、平家の沈みし壇浦の烟波を吊ひ、四國の陸地を故郷の如くに慕ひ、淡路島の山影を影見えぬまで回顧して神戸に上り、神戸より下り、紀州灘を経て、遠洲灘を過ぎ、名にのみ聞きし富士の高峯を、天の原に仰ぎつゝ、首府にぞ入りぬ。

波上に浮ぶ間、我は宛から大海の一粟にして、首府に來れば濱の砂子の一粒なりき。去れば我最初の一月間は熱鬧なる神田の一隅に、遑々たる行人、雑々たる巷街の聲、炎々たる烟塵の中に蒸されて、忙然として立迷ひしなり。既にして首府の郊下戸塚村の閑居に來り、時候の既に晚きにも拘はらず、猶ほ落花啼鳥の時に遇ふことを得て、始めて我に歸りし時、阿部仲實が三笠山の月を詠せし客土の遊魂、加藤肥州がオランダに遠山を認むる故郷の幻影、活如として情相照しぬ。

蓋し人烟蕭條たる此里は、所謂ゆる舊時の武藏野なり、我來りて此地理を察せしに、其小高き丘岡、疎遠なる村落低迷せし林樹、水の流るゝ、橋の臥する、野圃の開けて遙かに舒びたる、如何許吾故郷の景色あるかも。讀書に倦みたる日の夕、寓居の後の橋より眺めつゝ、吾記憶と相照せば、晚雲岫に歸れる丘は、家兄と共に樵りし山路、青草煙を蒸しぬる邊は、弟妹と蓮華草を摘みし野原、楊柳水を繞れる塘は、吾釣遊びたる翡翠の褥、其渡頭には父船を繫ぎ、此岸邊には母衣を洗ひぬ。父母は今見るべからされど、父母の朝夕せし處を見るは、宛然父母を見るなりき。

既にして漸く首府の習慣に嫻れ、初には京語を語り、次には京衣を着け、次には京情を解くに及びて、或は顔色を修めて兒女の憐を求め、或は擧止を軟けて父老の好意を博せんとし。前二三年の間、未だ京人たるべき修業ほど、記憶に耻づべき愚痴働きし時期はなかりき。嚮に我之を懺悔して曰く。

「今年の春花滿城の折からに、我は宛も故郷なる小文を書きつゝ、故郷の追念に耽りて居しが、不圖新聞紙上に見えたる花信を讀みて、自から過去の春遊を思出で、一驚しぬ、愚にも我は是迄唯雜踏と酔狂とに苦みしなり。俗物の中に雜りて詩なき歌なき畫なき行樂を爲せしなり。憐れなる櫻の花は、花見とて來りし人の、唯花見る人を見つゝ、過ぎ往く間に、塵に吹かれ酒氣に蒸され無頓着に眺められて、咲きて空しく落

ちしなり。首府の花見は、帽子の花見、棒杖の花見、白粉の花見、徳利、瓢箪、野郎の花見にてありしなり。我は痛く此の悪しき記憶に咎められて此の春を疎々しく過ぎぬ」と。

既にして三年の學期了る頃吾思想は再變したり。前年の夏暑を避けて東海道を過ぎ、小田原の舊影有耶無耶の間を過ぎ、人間の榮枯を嘆し、海に沿ふて石橋山なる源平戰場の地を尋ね、猶ほ行て熱海に遊び白雲青山蒼灣烟波の間に放浪して、漸く物外に脱するの心ありき。當年の夏日光に遊び、天の成せる自然の美、男躰山の高くして晴朝なる、中禪寺湖の遠くして空明なる、華嚴瀑布の雄宕なる、裏見、霧降諸瀑布の幽絶なる、大谷川の清くして綠光ある、殆んど凡骨を仙化せしむる間に彷徨し、轉た山中を愛するの念に撃たれぬ。我は歸りて再び去り、下總の野に遁れしが、家は寺院に隣りければ、看經の聲、木魚の音、青墓の觀、寂寞の意、落花啼鳥亦忽焉として人世の無常を感じき。

是は吾生活中最も涙多き日の一にして、唯默思と暗涙のみ、日毎の糧にてありしなり。

當時の自記する所を觀るに曰く、

「春霞朝に立ちて夕に消へ、氷は夜半に結んで日中に融け、雪は昨日積て今日解くれは迹もなし花は朔日に咲き、十五日にて萎み、二十日に散り、三十日にして青葉と代る。三月の春十二月の一年、宛も蜉蝣の須臾なるに髣髴たるぞ、實に人世の無常の様なる。神のハモッセは曰く、渠等は一夜の夢の如く、朝に生出づる青草の如し、朝に生出で、夕には刈れて枯るなりと。預言者イサヤは曰く人は皆艸、其榮華は凡て野の花の如し、草は枯れ花は萎むと、使徒ヤコブは曰く、汝等の生命は何ぞ、暫く顯れて忽ち消ゆる霧なりと。親鸞上人の歌に曰く、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐は吹かぬものかは。小野小町も亦歎きぬ、花の色は移りにけりないたづらに、我身世にふるなかもせしまに。伊勢物語にも又行水と、過る齡と、散る花と、孰れ待ててう言を聞かましと詠して、世の無爲を啣てるなり。誰か人生を長しと云ふ、誰か百歳を遅々たりと云ふ。我が鼓膜さへ死出の旅路を噪せるものを」と。

是等の事の終は何ぞ、其年の秋隱氣なる或日の暮に、父の訃音と寫眞は故郷の兄より

來り、我は絲絶へたる紙鳶の如く、天涯迷魂の孤兒となりぬ。猶ほ此地にすら根蒂絶へ、暗黒なる前途の闇に涙を揮ひて首府に歸りしは、去年の冬の晩なりしか、神我を棄つるとなく、吾所備へあり、吾筆の産物を嘉する耳目を與へしは、如何許吾幸なりしよ。斯くて吾枯骨は肉着き、妄念は漸く失せ、苦想憂愁消滅し、生活の道漸く開くるに及んで、故郷の幻影油然として復活し來れり。今春四月誘ふ友ありて一日の郊遊をなし、小金井堤の櫻より、國分寺の舊跡を訪ひ、有名なる多摩川を過ぎて、武藏の勝地百草園なる崇邱に上り、且俯し且仰ぎ、半里四方に布き延ばされし村落の形影、烟家の景色、平野、高原、森樹、江湖等、縦横參差せる活地圖、別ても邱を繞れる蔬菜の黃花、豆麥の綠葉、蓮華草の紅原等、書き成したる鄙の錦の活畫幅は、宛も故郷の春の幻姿あるを見て、遂に又左の如く記しぬ。

「夫れヴェストフッリヤの城郭を逐はれしカンヂッドは、畢生ヴェストフッリヤの城郭を追懷し、アムハラAmharaの離宮より山を出て、幸福なる生活を尋ね歩きしラセラスも、得る所なくしてアムハラAmharaの離宮に歸りたるを思はば、故郷の快樂を幾度説くも、我は自から咎めざるなり。我か所謂ゆる故郷には、村落の連觀を含めるなり。故郷には我慰藉を思ひ、村落には我平和を期せり。慈愛、友誼、恩惠、親切、歡情等、人間の美德と稱するものは、村落の外何處に求むる。帝堯の前に擊壤を歌ひし父老よ。帝堯の天下を辭みし許由よ。我は爾に與するなり。博士ジョンソンJohnsonも亦曰へり、「朝廷は内國の軋轢に騒ぎ、使臣は外國にありて論ずる時にも、鍛冶匠は其鐵砧を敲き、農夫は其田畑を耨き、生活需用の品は求むれば茲に得られ、四季順次の職業は、常例循環して止まざるなり」ど。此安穩の生活は、村落の外何處に求むる。斯る世界に其身を終ふるものは。兄弟も、姉妹も、夫婦も、朋友も、共に生れて共に育ち、老ゆるも死ぬも相共なり。敵少く味方少なく。嫉妬少く憤怒少く。唯一村無邪氣の民なり。我は今斯樂園より出て迷へり。是は生涯迷ふの迷ひなる乎、抑も復らん爲の迷なる乎。我が嚮に他郷に得たる故郷の快樂と、今又他郷に得たる故郷の景色は我が立出でし樂園の果敢なき筐かたみ乎。但し又立還るべき樂園の美はしき前影まへかげなる乎。是ぞ未來の疑問なりける」。

我が六年の間故郷に別れし吾經歷は斯の如し。今や故郷の變遷は如何。家も亦小き王

國なり、王者の代謝が王國の事情を一變するか如く、主人の更迭は一家に於て非常の變更を來さざるを得ず。今吾母は寡婦となり、吾兄は小王國の皇帝、嫂は女王となり、二弟二妹は相顧みて孤兒となれり。吾兄は畢生郷黨に於ける慈善家、家族に於ける仁君なるべし。去りながら能く其妻の悍き氣焰を和らげ得るや。吾長弟は既に家を分ちて主人たるの日近づけるが、渠を睥むる皆はなきや、長妹の年頃なるべき柔和の目に、折々上ほる暗涙はなきや。思ふに幼妹は漸く女兒の齡に上ほる頃、幼弟は今猶ほ母なき能はざる童兒なれば、恙なく成長してよと思ふのみ、今果して如何にあるや。一家の柁なる嫂は父の生前能く柔和なりしが、渠を墓場に置きたる後、心質に變化はなきや。我が在りし時彼には唯慧き一幼女あるのみなりしが、其後は幾度の誕生をか經つる。彼の子宮を假り來れる吾王國の繼嗣は抑も如何ある寧馨兒あるや。時代異れる吾家に對する郷黨の感情も亦如何に、吾家を繞る村落の變遷は如何に、吾家に屬する花園の消長、田野の張縮、婢僕之多寡果して如何、凡ての故郷に關せる如何の一語は、多様の音色、汎種の形影に旋轉して、遂に其夜の夢にも入りぬ。

### 第二 歸郷

舟搖々以輕颺、風飄々而吹衣。

問征夫以前路、恨晨光之熹微。

乃騰衝宇、載欣載奔。

僮僕歡迎、稚子候門。

……陶淵明歸去來辭

我が歸省の旨を故郷に報せしより、早や多少の時間を經たれば、今は三週間の往復を期して、八月三日より旅立つ事となりぬ。我は速かに其日を待ちし際に、遽然として筑後川洪水の電信走り、熊本地震の急報馳せ、首府の人行車馬一入物騒しく聞へ、別て吾郷は洪水に近くして震脈に當りければ、心坐るに安からで、故も亦き起居に忙はしかりき。若し故郷無事の報道來らざりしあらば、我は恐らく幸福の歸省を得ざりしならん。さても首途の日とあれり。上京の後始めて歸省すればとて、我より暇を告げしのみ、祖道する友も亦く、宛も錦を衣て夜歸るが如く、徘徊願望して孤影を憐み、瀛車に乗りて首府を出でぬ。

此頃はいと續きたる晴日なりき。此日の正午我は涼船に横濱に乗り、淡墨富士を天邊に見、海球の落日を相撞灘に送り、波上の晴月を遠州灘に迎へ、煙江の中に夜半の明笛を吹き渡り、遠州灘に眠りて紀州灘に覺め、諾曼東號ノルマントンの覆跡を吊ひ、颯然として神戶に看きたり。是時までは唯尋常一様ありし旅情も、此の夕博多行の船に乗り、僅かに方角を異へてより、兵庫の巷焰、和田岬の燈明、一ノ谷の明滅しぬる夜影、隱約なる須磨の烟波を眺めては、轉た懷舊吊古の詩情を起し、明石、舞子、高砂等の名所を遠望して幾多の巧畫圖、此淡月の光の奥に隠れあるを思ひては、亦探勝漫遊の心腸を扇き、西海の波脈々として九州に向ひ、北斗の一星遙かに光芒を船首に指すを見ては、正に望郷想の高潮に上りたりき。船は今播磨灘を過ぎ、翌朝讃州の多度津に着き、復去りて四國の山脚を摩せり。此は皆響に一面を経たる景色あるも、往くと返ると、昔と今と、我には變る海とはありぬ。周防灘の廣みに出て、半日馳せて馬關に着きたり。昔頼山陽が「天邊初見鎮西山」と吟ぜしは定めて知る此邊にして、渠は此を以て遊跡の天涯に及べるを想ひしか。今は我此詩句を籍りて、故郷の近きを喜ひしなり。

我は此處にて圖らず馬關より歸る故郷の浪子、而も吾疎族ある一少年に遇へり。不時の邂逅なりければ、暫時は互に言なかりしか、我吾郷は浮世に離れし隱處にして、其村民は太古より生活いのちの爲に漂泊するもの無きを追思して、渠か馬關に來れる所以を怪みたり。我か此疑問をなせし時、渠は少しく顔色を落して見えしが、渠は唯云へり、面目なしと。渠は我に對し好みて故郷の變遷及び吾家の消長を、語り出でんと嘗みたるも、我は吾眼光を以て之を觀る迄は、他の先入を容るまじと決心して、渠が話頭を打消しつゝ、只管渠自身の日記を質問しければ、さては渠も包むに由なく、幾回か嗟嘆したる後左の如く白狀したり。

一昨年一昨年の飢饉は痛くも吾故郷の繁榮を奪ひぬ。旬日にして流離の生命數百に上り、乞食、兇徒、放火者の數著しく加はり、吾同年の友も多くは絀繼の徒となりき。君在京の頃より萌芽しつゝありし養蠶事業の漸く永久の基礎を固めたるより、過半の村戸は茲に活路を求めたり。我は其以前より桑苗販賣を以て世を渡りしが。好運一時に開け來り、買へば騰り買へば騰り、食頃にして價值倍し、月を出でずして幾百金の富を擧

けたり。猶ほ規模を擴めんと活路なき丁壯を多く使ひしかば、我は村の恩人とし呼ばれ、一時に尊敬を受くる身とはなりぬ。忽ちにして數多の競争者起りて我が利益を分たんとし、桑苗販賣は他の事業を奪はずして到る處に利益を得、被雇者は子の如く來り、一村の少年は唯君が一家と菊屋の外は、皆此の業に沈みしかり。

是等の連中に先づ來れる變化は、衣裝、風俗、飲食の上にありき。一月の後村中には手巾の代りに鼻拭はなぬぐひ翻り、襪はき襪はき棄りて絹布輝き、笠は帽子に草鞋は皮靴に、田舎語は博多語に、泥痕は石鹼の香に代れり。幾くもなく美味に喝せし舌は、和酒と菜根を甘とせずして、ビール以上牛肉以上を貪り。世の中陽氣の歌は行り、絃鼓は彼等の坐に鳴り、田舎娘は競ふて手を渠等に投げ、良家の諸嬢も亦往々にして心を暴富の奴、塗抹の美に與へ、犬吠馬行の墟巷は看る看る浮華の都會とあらんとせしかり。

悲しき哉消ゆる燈は一たび明かに、靡るゝ女は先づ花さくとは、吾等の行末ありしなり。渠等の所得の勞力に倍せし如く、其浪費も亦所得に倍したりしかば、頓て蠶の成熟せし頃は、宛ら暴風後の樹木の如く、以前に倍して貧しくなりき。獨り無謀の輩然る

のみみならず、遙かに先見あり鴻圖ありと思ひたる吾等さへ亦零落を免れて、百歳夢みぬ榮華の夢も、烟の如く消え果てぬ、君よ此世は確かに惡しく往くなり。

看よ吾等は地を拂ふ風より高き喬木の如く、一時の浪費と快樂を取らて、尙ほ其所有を十倍百倍せん爲に、一刻千金を得ると云ふなる博多米商會所に名刺を出しぬ。會所の仲間等は頻りに吾等の足下に伏し、其言ふ所皆吾等に利にして、黄金の湧く其口沫の如くなりければ、吾等は勝運を彼等に委ねて、他の田舎娘とは人種異なる、而も吾等の下流者の夢にも知らざる、狹斜巷の遊君を訪ひつゝ、豪奢強飲畢生を傾くる其刻々、凱旋の福音を待ちしなり。翌朝未明より夢覺めて田舎の少年を以て百戰場を経過せし老都人と戦ふとの、太と淺ましきと悟りて、心底より震慄し、吾友を呼びて謀る所あらんとせしも、時早や後れて、正午全敗の報知を得て、殆んど死せんと欲せしなり。別けて痛ましかりけるは、他の友等は然らざりしも、我は吾財産の倍を賭けし故に、賠償の爲めに足を繫かれたれば、身を以て逃るゝこだに能はざりき。今は只郷黨の慈悲に頼る外、牢獄を避くる能はざりしかば、我は強顔にも君か兄氏を初め、

我か知る限りの名前に宛て、哀を乞ひて救はれ、死人の如くして歸郷せしかり。

村落は今我を棄て、冷笑と苦顔は吾耳目を潜りて往き、嚮きに我を恩人とせし父老も、其子弟の放心を歸し我を咎めたり。我尙ほ之に堪へたるも、我を憐れむ二三の友が、悔恨、慰藉、希望とを以て訪ひ來る毎に、殆んど骨の解くべき苦痛を感じしなり。一月餘を経て、心膽漸く回復せしを覺へければ、我は將來の生活を默思したるも、前途負債の餓鬼たるの明了なるのみ、他は皆暗黒の世界なりき。農業には我素養亦く商業には我資本なし。桑苗販賣は父老既に愛憎を盡くし、吾身は浮萍の如くなれり。自ら謂へらく、如かず吾故郷を去りて、到る所に根底を求めんには、人世百歳空中の樓閣豈に盡き難からんや、重負の借金豈に返す時なからん哉と。我は此決心を以て竊に我を棄てざる二三の友に告げ、彼等より他の債主に語らしめたり。渠等は既に我より望む所なく、其去就を自由に任すべきとを許しければ、頓て最と親しき友に夜中に別を叙て、さて馬關に着せしは、一昨年の暮なりしかり。

當地に於て我は辛ふじて一個の銀主を看出て、種々渠が爲めに盡力し、漸く此處に立脚の地を得たり。さて半年許りを過ぬる裡に、主人の愛女に戀はれて、今は其家の養子となれり。然れ共此家の殖利業は、宛も地を這ふ蚯蚓の如く、風雲に龍驤せんと思ふ心に適せざれば、我は鬱々として日を送れる後、或機會によりて神戸の輸出商と相識り、遂に彼と特約して竹籬取次とあり、大困却を以て三百金を養父に借り、大に竹籬を購求し、漸く其數に充て輸送せしに、彼は理由もなく否ハッを唱へたり。我は一たび驚き、二たび悲しみ、三たび怒りて、唯今其勸解中なるか、恐らく示談に付せらるべし。前夜故郷の友は他の好き商法あるべきを報じて、我か歸省を促したれば、今日此船に乗る事となりぬ。思ふに彼勸解の結局に於て、多小養父に損失を歸すべし、固より我は長く養家に留まるの覺悟なければ、遠からず神戸を蹂躪して東京に踏み出づるの決心なり。君よ我若し都に上らば、多小の聲援を與へられんことを、今より豫め頼み置くなりと。

我は沈黙して渠に聞き、慰藉を期する吾故郷の既に荒破村たるを悲しみ、渠が流民たり自棄者たるを憐み、竊に渠が爲めに落涙せしが。最後の數言は殆んど我を震慄せし

めたり。我は渠が嘗て將基と圍碁に、殆んど大人と對するの技量あるを見て、當時既に斯る賭博生活を踏むべき事を察したりしが、今や渠が氣焔は豫想の外に出でしなり。謂ゆる渠が桑苗競争者とは、渠が圍碁の友にして、皆彼より技量の劣りしものなり。我は將基圍碁が、渠等の心を放ちしを斷言する能はざるも、其巧者は益其の通路を作り、劣者は一敗して真正の活路に回りしを見るなり。我は渠が今轉た絶望の途に向へるを嘆じ、且つ故郷に残れる病める老父と、嫁し得ざる姉妹の、如何許渠が爲に憂苦し居るやを思ひて、坐るに悲哀の念に堪へざりし。我亦竊かに渠が放心を復さんどて、渠の如き人物の經過すべき荊路を説きて、其道を回すべく勸めたり。然れども渠は唯答へり、辱ぢき君の忠告を謝す、然れども破れし膽は又た縫ふべからずと。我は又其父の起居如何を問ひしに、渠は左程に痛む色もなく、然り父の病も久しきものあるが、我は其を姉と妹の手に渡し置きたり。此度は急く旅なれど、一夜は父が側に寢食すべしと答へしのみ。

我は最早問ふと能はざりき、思ふに渠が良心の破綻は、針の力に餘しなり。渠は反哺の孝を知ると烏より勝りながら、遂に斯る語をなすものは、此語の外に詮術なく、其道の外に一活路もなければなるへし。然れども渠も猶ほ未だ人情を失はざればこそ、女性に愛せられしものならば、若し好運渠に回り來りて、渠を凡ての義務より解かん日には、渠も舊路に還るべし。去れば我も亦渠に對する杞憂を棄て、故郷の友とし相語り。名に負ふ立界灘の怒濤、船の動揺するにも拘らず、我は東京なる問題の下に、我か經過したる東京生活の物語りを以て彼の好奇心に響應しつ、我が向く方に落日を送り、日暮て博多港に着きたり。

今宵は吾歸旅第四夕の月夜にして、其の弦形は吾快心のごとく夜毎に盈ちて見えしなり。波遙かなる海城の眺めは、宛まかから神戸の夜に似たるも、我は多年福岡、博多の間に流寓せし故に、遊跡も亦甚た多く、見ゆる凡ては舊知己の看をなしたりき。其正面に遠く横よこふ寶滿山は、故郷と福岡との通路にして、我は屢其谷を迂回したりき、明日も亦經ぬべくあるあり。其右に立つ油山、尙ほ其右ある愛宕山は、嘗て吾黨の放浪せし處、遙か左方の立花山は、小早川隆景の城趾にして、我屢此處に遠足し、東公園ある函崎



松原、西公園ある荒戸の小丘にも、我は日夕行吟したりし。波に走れる月影には、脈々たる水鱗も顯はれ、靜かに聞ゆる柔櫓には、軌々として解來りぬ。乗客三分の二は此處にて下り吐かるゝ如く解に移れり。船子と乗客の會釋を聞けば、早久しく忘れし博多語あり。船は颯々として軽く擧り、風飄々として衣を吹く。歸去來ぬれば斯ばかりゆかしき波止塲なるを、怨むらくは旬日の後、再び上京の船の漕がるべきとを、折角の歸省に今少し滞在の時間もがな。船岸に着きて客は各其行處に四散しぬ、回顧すれば我が來し方は、渺茫たる煙波万頃天朗かに風涼しきぞ、正しく晴るゝ明日の天氣の豫報なりける。

吾等か着きし宿は我が好みに従ひ、上京の折に一夜を寄せたる其瀛船問屋なりき、此宿の主人は早や我を忘れ、僕婢等は幾度か新たまり、唯吾等の室のみ古びたる吾室にして、宮野なる吾少兄は、故郷より此處まで我を送り、今吾友とある如く、此室に寐しなり。想ひ起せば當時未だ見ぬ東京に懸くるに、未來の空念と大望を以てし、我來り我見我勝つ爲めに往くものゝ如く、吾生活を畫きつゝ、頓て吾妻なる疑問に落ちし時、

我は都に女帝の如き婦人を吾前に跪かしめんとを期しければ、吾妹を取れと云ふ兄の語に寒たく答へて、唯其人の眼病の速に愈へんとを祈るのみと云ひ置きたり。今や天旋り地轉して、首府の獨居、春花秋月、折々懐かしく思出るものは、此の寒たく答へし少女の容貌ありしあり。今宵此懷舊の處に來り、故郷も亦明半日に到るべき時に當り、眠らぬ眼に樂しく見ゆるは、此寒たく答へし少女の容貌なりしあり。我は何氣なきが如く、吾友に宮野の妹の如何を問ひしに、渠は云へり、我は久しく故郷に在らねば、今其人の如何を知らねども、彼家にては只管君の歸省を待ちたるが如く、君の親戚及び吾父の意も、亦竊かに彼人を君に當てたるものゝ如しと。我は唯左右の間に語を置きて、方寸を藏したるも、渠か此機に乗して語り出てたる、吾戀人と其家に關する長々しき冗談をも、喜び聞かざる能はざりき。

第五日の朝未明、吾等は北方故郷に車を駆せたり。十里の煙火、長亭短驛、白雲青山、平野長流、皆是れ舊時の觀を以て、我等を迎へて又送れり。

さて吾村に唯一里なる甘木の村に着きし時、日は漸く正午ありき。吾情の急くほど輪

の旋は弛みて覺へぬ。吾友は言へり、突然たる君が歸省の驚かれんより、君は暫らく此處に午餉し、其暇に我を君か歸省に先たしめよと。我は此工夫の甚だ愚痴且つ無用なるを思ひたるも、渠は我に勝される故郷學者なりければ、我は曲けて渠に聽き、一茶店に休む間に、渠は意の如く我を殘しぬ。

此處に費せし時刻は、宛も我生命の縮まるが如く、拾ひ數へて三十分を過ぎたり。斯て我は車に上れり。車夫は猶食後の吹煙を取れり、而る後芒鞋を代へ店主に辭して、而る後拭きたる後の顔を拭き、其手巾を頭に結び、而る後轆を取れり、輪は旋り初めぬ。帆扇骨の拳擥は一種の電氣の如く吾心に響き、花婿の室に入る花嫁の如く、血の環は太と忙はしく、胸はそいろに熱病の脈の如く騒ぎたり。過去も未來も現在に合ひ、遠くも近くも目前に浮ひ、故郷に於る死者と生者、幼敵と舊友、危難と幸福等の追念及び豫定は、一大連鎖の上に觀せられたり。實に吾心は千万事を思ひたるも一事をも覺へざりしなり。

ア、嬉し、今よ故郷は吾目に見へぬ。車輪村の端に上ぼりし時は、我思はずも車を飛

ひ下りて其土に接吻したり。實や此處に我は故郷の我たりき。其一杯の土も我爲に尼丘、錫倫、ベッレヘムとも思はれて、是より相遇ふべき顔は皆な我と言語同じかりし故人なり。懐かしき地よ、床しき友よ。我は寧ろ錦を衣て夜歸らんも、敢て車上より故郷と故人に對するに忍ひざりき。我の願は東京の客にも都人にもあらで、故郷の我として歸省し、唯々年長けたる我として接待せられんとありき。我は今始めて極樂に入るものごとく、唯滿悦と熱情と輕快なる恐怖、及び縮め得ざる笑顔を抱きて往きつゝ、遙かに十人許の一群の我前路に立ち向ひ、中央なる大人より左右に開きて小兒あるを認めたり。我は何故と胸に問ひつゝ、屢々回顧したるも、我より外に来る人見えざりければ、我は早くも彼等を歡迎者なりと思ひたり。其群の加はるほどに、吾笑顔も亦滿ちたり。尙ほ近く歩む程に、渠等は我方を諦視しつゝ、忽ち一大喝采を揚げ、我も亦自から忘れて飛び立ちたり。渠等は今互に私語し初め、前後に動き、忽ち又喝采を揚げたり。此時我は彼等の視線少しく我に反けしを認めぬ。果せる哉路傍の圃に取亂したる馬蹄の音聞へ、馬上の影も見えたり。然り渠等の諦視も喝采も、私語も回

顧も、我が爲ならず、農僮午餉後の競馬にありしなり。去れども我は失望する所なかりき。我は聞きぬ、アメリカ探鑿の船も亦陸を見る迄は雲のみ見たりと。

村の門は太ど快よく我を迎へぬ。其は路の兩端より老ひ立ちたる榆樹にして、茂れる枝は双方より我頭上に結ほりぬ。邊を青めし其綠色は、直下の樹陰の涼味を加へ、其眞上に當りて密樹の間より窺く日影は、宛も散れる落葉の如く、片々地上に黃布しつゝ、唯遮り浮べる塵のみ其射線を顯したり。其根は擴がりて章魚の足の如く、而も上なる枝より大なるものありき。其盤根は昔より村兒の椅子、老人の曲祿、旅客の坐床なりしが爲め、孰れも皮なくありて老いしか、今も尙ほ變るとあらず。回視すれば、吾父も朝夕是に行み、歸る其子を待ちたりしならん。嗚呼天は吾父を速めたり、然らずんば我を後れしめたり。然れ共天は猶我に此天然の凱旋門を残し、我をして滿腔の意氣を以て此處を過ぎしめたり。

抑も吾村に於ける暑期の日中は、宛から中夜の靜肅あるが如きものありき。直射する日影は蔭を容れず、風は樹間に死して枝葉萎み、蟬は其音を休み、墟巷の聲は止み、吾村民なる農夫は午餉の後假睡に沈むことなるか、今日も亦其一日なりき。然れども此時偶々外出せんとして、端々くも我を見、其顔變へて挨拶するものあり。遽に潜み隠るゝものあり、我を目迎ひて目送るもの、我を忘れて頻りに追念して見ゆるものもありしあり。門より五十歩街の曲所に當る酒店を見よ。吾舊友たる農夫、職工、猶ほ馬丁すらも、皆洗濯衣を装ひつゝ、先に歸りし吾友と共に吾前に喝采を擧げたり。我は凱旋歌に浮かされて、一巨人の如く濶歩しつゝ、舊友に接したり。渠等は宛も後るれば罪あるものゝ如く、一個一個に強ひ違へたる挨拶を以て。前後より吾答禮を圍みしなり。我は此多數の衛星に従はれて吾家に入りぬ。戸前には居合せたる家族近處の老幼も立列ひて吾を迎へ、吾最愛ある母すら、堂を下りて相待ちしあり。我は先づ吾母の前に跪きつゝ、

「母上よ只今」とて、目を拭き顔を揚げたる時、母の笑顔にも涙ありき。母は猶ほ瞬きつゝ、「ナ、卿が歸りの遅ければ、如何にやと案して居りし」と云ひし其顔も聲も、早や太ど老いて見えぬ。ア、我は殆んど晝夜兼程してこの上もなき急旅と思ひたるも、猶ほ

母の胸の急きに後れぬ。悔ゆるは斯ばかり我を喜び遅つ母のあるに、何故久しく歸省せざりし乎、何故屢々歸省せざりし乎。

吾母は他の涙を以て言へり、卿は今見識らぬ程に疲せたり。東京とは斯ばかり苦しき所なるか、「決して左様に候はず」と、我が膨れし胸に斯く答へしのみ、後は言葉もあかりとなり。一同は玄關より奥に入りて座に直れり、見れば平生夢みし郷黨よりも、忘れ居りし故人こそ多かりけれ。

「兄上よ漸く只今歸參致しぬ」。

「ナ、善く歸りし。日中の旅、疲れてあるべし、先づ何を後にも後に回して休息すべし」と。神に謝す、此慈愛ある吾兄を見るは、猶ほ吾父を見るが如くなり。實に此人あればこそ、我も吾家に心安かれ。

「兄嫂よ如何許世話を懸けぬ」

「否何事も行届かぬ儘。卿こそ彼處にありて何角に不自由に在せしからん」。

「弟よ久し振にて」

健くは歸られしよ。何時も歸省の手紙のみあれば、今回も亦手紙ばかりと思ひしに」。

「平助よ今年も吾家の爲に骨折らるゝにや」。

「老いて役には立たぬども、頼むは兄君の情あり。郎君に別れて早や五年——然り今年は早や六年目。思へば眠る一夜の如し」。

此時兩妹は吾浴湯を取り、今吾前に低頭して辭を揃へ、

「兄上歸りませしよ」と、挨拶したり。過ぎゆくものは月日ぞとは、兩妹の顔見て知れぬ。長妹は今好き花嫁の頃とあり、少妹も早や乙女の數に上ぼりしあり。

我は今吾幼弟が他の室より耻かし氣に我を眺めつゝ、又吾眼線を避くるを認めたり。嚮に吾家に入りし時、吾後に従ひたる多くの童子ありしが、今其三個は吾母の膝に纏はるを見て、吾家の孫兒あるを知り、且つ其幼弟が隠れし室にも、他の稚兒あるを認めし時に。我は驚きて吾兄の果實に富めるを祝ひたり。農家豊年の收穫は堂上にも登るものあるや。祖母の傍に座しつゝ終始優しく笑みける長姪を、我は殆んど忘れてありし。其懷に抱かれて汗あき乳房を含みつゝ、時々我を眺むる幼姪は、始めて我と相

識るものにて、其餘れる膝に顔を伏しつゝ、寄り纏ひしは、吾前途の時に胎内にありける吾家未來の幼主人ありき。吾母は頻りに笑みて渠を揺り起せり。

「起きよ起きよ、起きて見よ。兒は毎日東京の叔父……と待ちしあらずや、起きよ、東京の叔父歸りぬ。イザ起きて善く來ませしと挨拶せよ、イザ、イザ……」  
渠は唯嘻々と笑聲を發しつゝ、益固く祖母の膝を抱きて頭振れり。我はその頑是あきを愛で、取あへず馬關にて求めし頭大の夏蜜柑を取り出で、優しく渠を呼びたるに、渠は漸くに起きて之を受け、再び感謝の頭を疊に付けて得も揚げず。猶ほ嘻々と叫びたる其素振の愛らしかりしとよ。

斯て幼妹は湯の冷へぬ間に浴すべきを告げ、我は直ちに立ち出てぬ。此の間に吾歸省の新聞は流布せられ、吾家に誘ひ來る足音と、呵々たる口上は、掌に取る如く浴室に聞へたり。我が忘れ盡せし郷語は、今や耳新しき天上の音樂に似て、故舊の知音は天使の言葉の如くありき。我は雜出する挨拶にて、先づ其人を想定せしかり。更衣の室より偷視すれば、早や來客は玄關に充てり。評判の落語家も、隠れなき茶飲者も、今一休と

稱する頓智家も、市場の關取も、武骨ある無藝者も、我が入來に改まるたけ容を改め、最も嚴格ある訛音を以て、鄭重に祝辭を叙へたり。打ち解けたる吾語尾によりて、先づ落語家、頓智家は一語一語に真相を呈し、茶飲家は時々藥罐の吹く厨の方に向ひ、關取と無藝者は我等の會話の句讀として、渠等が交際の唯一の秘訣ある、頓笑を投げつゝ、樂曲中の太鼓若くは拍子木の如く調子合せぬ。此等の來賓か新陳代謝する間に、吾村の聖彼得寺院ある清岩寺の、絶へて久しき入相の鐘聞えたり。

應接の間、吾母の視線は始終吾顔に向き、我か憂むどきに憂み、我か笑ふ時に笑ひつゝ。凡ての聽者の裡、吾母こそ最も忠實ある聽者ありき。母は我が疲勞を想ひ、小休みなき訪門より我を救はんとて、晚餐後直ちに設けある臥床を告げたり。動くは命の我が爲には、車上の半日と坐上の半日は、痛く我が生氣を弛めければ、明朝こそと思へる宅後の野歩を、一時も猶豫する能はざりき。今宵は陰曆の十三夜、早や望月近き頃されば、夕刻よりの一輪は、三竿まで立ち昇り、微茫たる青野に燈れぬ。此淡遠ある景色に對しては、嚮に海上の月夜に、笛吹き過ぎし遠州灘の、髣髴たる活畫を追懷せざる

能はざりき。既に又家に歸り、此靜着ある臥戸に入りて、我は熟々獨語したり。「首府に醒めて孤村に眠る、吾身は如何に螢に似たる。三百の路五日に歸る。吾旅如何に飛鳥に似たる」と。又曰く「東京には磯の眞砂、故郷には家の基礎、時の間に張る吾名こそ、宛がら預言者ヨナの瓢」と。

第二 吾郷

野外 <small>ハレノサタ</small> 罕 <small>レナリ</small> 人事 <small>ニシ</small>	窮巷 <small>ハシ</small> 寡輪 <small>ニシ</small> 鞅 <small>ハ</small>
白日 <small>ニシ</small> 掩柴扉 <small>ニシ</small>	虛室 <small>ニシ</small> 絕塵 <small>ニシ</small> 想 <small>ハ</small>
時復 <small>ニシ</small> 墟曲 <small>ニシ</small> 中 <small>ニシ</small>	披艸 <small>ニシ</small> 共來 <small>ニシ</small> 往 <small>ハ</small>
相見 <small>ニシ</small> 無雜言 <small>ニシ</small>	只道 <small>ニシ</small> 桑麻 <small>ニシ</small> 長 <small>ハ</small>
桑麻 <small>ニシ</small> 日既長 <small>ニシ</small>	我土 <small>ニシ</small> 日既廣 <small>ニシ</small>
常恐 <small>ニシ</small> 雪霰 <small>ニシ</small> 至 <small>ハ</small>	漂落 <small>ニシ</small> 同艸 <small>ニシ</small> 葶 <small>ハ</small>

陶淵明歸田園居

斯くて翌朝疾く起きて前夜の路に馳せ出づれば、弦月形に吾村を懐きし大佛、鬼城、片峯、小隈等、北の方ある一百峯、依然たる舊容は、猶ほ朝日の影白光の幕に眠り、暖々たる清岩寺は曉鐘を打ち初めたり。今は唯其太陽直下の顛にのみ、眼の華に似たる空焰残りき。諸山の曉色に夜は明けて、一百峯は磨くが如く屏顔を顯し、炊烟深處に認むる山村、野水、縦横したる曲處に見ゆる水郭、長堤、之を聯ぬる曉の露、平野に溢る、秋色は、滿眼故郷の幻姿なりけり。

南の方に屏風張りける屏風山は、他の支脈もあらず、他の支脈にもあらず、唯平野と天末の中間なる一幅の堆雲なり。其距離と眺望の適當あるとは、能く天氣の變化を山色に示し、凡て此小世界に空の革命ある毎に、先づ若干の異狀を其遠觀に視しぬ、されば渠は太古より此村の天氣豫報の名あり。今猶ほ村婦の爲に好晴雨計とし眺められぬ。渠は時に岩の如き玄雲を載せて近づく夕立を告げ、晴天にも一抹の暗粉を帯びて、後刻の曇りを豫言せり。秋の薄暮に夕紅を投ぐるか、若くは乾ける積翠、蒸されし紫嵐を浮むる時は、其明日は常に晴たり。若し其屏風の一方に異狀なくして、他の一方急に暗くなる時は、鳥は遠近の野に足踏を速め、刈者は鎌を磨くの暇なく、結者は束を投げつゝ、各四散し去りし後に、油然として急雨降り。今朝も亦前夜の闇全く去らざる峯頭に、其蒼白き曉色を以て、一日間の快晴を告げしなり。

曾て山を愛する唐人は詠せり、「相看雨不厭、只有敬亭山」と、實に我が屏風山の友たる事も久しかりき。我は此茫々たる野色の暮に、陶淵明の徒の如く、「山氣日夕佳」ある時に、「悠然望南山」の客たりしは、一春秋にあらざりき、朝には渠我より先に興き、夜には渠

我より後に眠り、暗に吾息容をも責めたり。

今秋の田は稻生ふる頃にして、見ゆる限りは青穂なりき。昇る日影に蒸されつゝ、一重の白烟、村南村北に立ち騰ぼれり。縦横したる畔路は、宛も交叉したる都衢の如く、迷室の螺線の道を爲したり。吾身を圍める隴畝は、今日猶ほ朝の世、露の國にして、未だ枯れやらぬ秋草の穂末、徑に傍へる青芋の葉心、及び茄子實の瑠璃底に垂る、天の靈液は、ユム天姫の涙の如く、美人の魂の如く光りつゝ、此二三日來吹初めける秋風に生命を與へて、斷えたる樹珠の如く轉びぬ。風は吹きて止みぬ。去れど扇を初めたる芋葉は、絶へず空を扇ぎて髣髴たる鳥の羽翼なり。

我は衣を掲げて野路を遶り、小き流の側に出でたり。田より田に入る小川あれば今、頃は濁れり、去れど其涓々たる水聲の淀まざるこそ、嘗て清かりし兆にして、其の春流、秋流、寒流たる時如何に明き夕陽を留めしよ。兩岸の白楊は猶ほ散り残れる枯葉を留めて、風吹くごとに旅人を招けり。我は嘗て此處に行吟して曰く。

晚渡無人月滿波、  
前村家遠待舟遲、

我は猶ほ此流の或は廣く或は狭く、或は往き或は回る堤上を歩しつゝ、漸く日光の熱きを覺ゆる頃、前代の一里塚、現時の休息樹陰の石上に憩へり。

吾前に横たはれる白壁處々、茅屋斜々、斷郭稜々、其を綴る緑竹青樹南北長く亘れるものは、愛らしき吾故郷なり。村を圍める竹樹の垣より洩れ出て、日影の裡に參差たる四壁の素屋は、一言に林外と呼ばれて、村中最貧者の世界なり。村の兩端青容最も深く且つ廣く、寥々烟火を隔てるものは士族の舊城郭なり。維新世界の變潮は、何處の士族にも零落の波を打ちしが、我郷の如きは其甚しきものありき。尤も渠等の二三は、吾郷の一殖産たる養蠶事業を起し、此村地圖五分の一を桑田に有ち、交際場の好地位を維持したるも、其十中八九は看る／＼流潮に推し流されて、今は農戸に編まれぬ。去れば相傳の寶刀を賣りて、由來もあき鎌を買ひ、戰場敵を誦る勇氣を以て、徒らに秋の田の稻刈かりに施こすのみ。乗り馴なしたる駿馬は辛して田圃の役に堪へ、彼等の學問は農曆に無用ありき、唯々渠等か轉業に於ける唯一の便利は、擊劔と柔術に由りて、躰軀の健康ある

にありしのみ。然れ共渠等が忍耐して稜角を殺ぎ、下等の小作人と伍し得たるは、世にある限りの幸福なりし。當時の詩人歌ふて曰く、「唯落ちしものとは見へす鹿の角」  
と。渠等が武士より農民に化せし迄、無量の涕涙と無念とありき。

蓋し吾郷に起りし士族と平民の沈昂は、我が曾て見たる最も興味ある記事なりき。實に渠等は士族と呼ばれて、懐く茂れる竹林の裡に平民より聖別せられ、其林下の道は日中にも、平民の子には一種の幽靈場なりき。其處に吹く所の風は、物怖おそろしき腥氣と、陰に籠れる音を以て過客を襲へり。我猶ほ記憶す、幼き頃は吾影を認めて虎嘯する獵犬と、鉛刀を抜き追ひ來る武士の子を怖れて、絶叫せしと屢なりしを。吾家を訪ぶ武士の横柄、吾父に對する電火の如き巨眼と刀室の暗光は、屢々吾等の快樂なる遊戯を壓へぬ、然れ共渠等が會津戰爭より歸りて顔色甚だ高く、首を斬ること艸を拂ふが如く、敵を追ふと兎を追ふが如き得意の物語を聞きし時に、我も亦何故に武家に生れざりしをと憾みしなり。

當時我は才童と呼ばれて肉食を嫌ひしより、吾家に高僧ありとは父の戯言なりしが、



其後父は我に告ぐるに、今は維新の時世とて、高位大官智慧を以て取るべきとを以てせし時、心より恐れて曰へり、農家の子如何にして切腹を學ぶやと、既にして「之丞」「之進」の如き雄々しき名前は漸く減し、吾父も袴を着けて村廳に出て、我等も寺子屋より小學校に移りて袴を着くるに至れり、吾名刺と座席とは常に武士の子の上に掲げられし如く、吾尊敬も亦渠等に倍し、渠等も往々吾前に揖禮して書物の不審を齎したり。此時に當りて、吾家の支關には士族の頭漸く低く漸く圓く、嘗て長かりし刀も羽織も納まり、彼の恐ろしかりし目も軟らぎにき。渠等は前日其對手をざりし吾母に向ひてすら、往々我が學校試験の成績を賞するに至れり。我が父祖の書庫に絶へて認めざりし漢書を携へて村塾に通學したる頃は、其林下の徑も早や和らぎて、其住家の多くは空屋とあり、竹林も亦往々拓かれて圃とあり、獵犬は消へ、武士の童は吾友とあり、農家の僮となりつゝ、見よ嘗て林中に驕りし武士も、今は林外に憐みを惹きぬ。斯くて二十年前士族と平民の二級を以て組織せられし吾郷も、今は全く農家の村となり。我も亦福岡よりの歸省と上京の間の月日は農夫なりき。我は猶ほ記す、暑中に

於ける粟草取、及び寒中に於ける芥子植の二事は、實に我が堪ゆる所に非ざりき。殊に後者は幾分か稼穡上の智識と熟練とを要するものなるか故に、我か如き學生農夫は、只積雪、沍寒、疲勞、及び他の婢僕の指笑に苦みたるのみにして、少しも事業に附與する所なかりき。勿論我は一日に千本の苗を抜き、又數百行の莖を植えたり、猶ほ犁取りて畦の土すら被せたり。然れども渠等は曰へり、我か抜きし苗は折れ且傷み、我植へたる莖は植しにあらざ棄てしにて、我か被せたる土は散亂して青菜の衣とならずと、我は又熱心に肥料を撒き、渠等より可なりの稱賛を博せんとせしも、渠等は唯我が不憫なる素振と、疲れて青さめし顔を談笑の種とせしのみなれば、以後我は唯童より少しく長け且貴き、命令せざる主人、服従せざる従者として、散歩と野餉と陶家の詩卷を樂しみつゝ、日を過きたり。

今や生活の大迷宮、人世の中心なる都會に出て、歩み難き行路の難に陥り、吾才の我を活すに足らざるを悟り、吾勞力の空なるを嘆じ、翻然として前日の非を悔ひ、謂へらく、大望は臟腑に置かれし酒精の如く、飲むに従ひて心思を銷す、功名富貴は波上の花

に似て、追ふに従ふて益々遁ると。歸り來りて故人に對すれば、吾煩惱も一時に絶えぬ。見よ渠等の眼は妄念の花に曇らす、其呼吸は都人の銅臭なく、其言語は名譽の氣息を吹かず、嫉妬も怨恨も其胸中を侵さず、渠等の皴は好笑の爲に嵩まり、其髪も雨雪の爲めにこそ白けれ、兒女の生育の外に憂苦なく、一杯の夜酒の外に希望なきを。實に渠等は兒女を残して斯世を去り、墓碣を得て斯世に残る。其生活は安き一場の夢の如く、渠等の生命は平和の日と平和の夜との長連鎖なるを。

今又我は人巧まねなる處には、轉た神意の顯はるゝとを認めぬ。ヘテリツ希白流の詩人嘗て歌へり、「天はエホバの天なれど、地は人の子に與へ玉へり」と。夫れ人の子の裡、最も地より養ふものは農夫なり。渠等は其種を地に置き、其牛馬を地に曳き、其犁鋤を地に立て、其の兩足を地に着けぬ、繩を緬ひ鎌を磨くは、其最と微ちひき業なれども、渠等の事は曾て地より離るゝとなし。神の力地に住めり、渠等の爲す所は唯耕たが焉、種うゑ焉あるのみ。渠等は耕して種き其以後を至上者いとたかきに任じ、安堵して其成長と果熟とを待てり。頓てエホバの息吹けば、朝は夕に代り、夜は晝に轉じ、春回り夏は來り、秋立ち冬も亦暮

る、温風、熱氣、冷吹、寒息、順次にして更迭する間に、其果穀は三月にして生るあり、半年にして熟るあり、一年にして登るあり、亦各其時に従へり。斯くて渠等は唯刈りて紛こまし、其美産を炊きて食ふのみ、亦何の積不平かある。

神は水を岩中に出し、泉を溪間に流し、河を郊野に溢らしむ。野の獸は搦し空の鳥は飲み、江の魚、地の虫之れに養はるゝも、其水は灌溉の料に餘れり、青草は流水と潤氣を追ひて生へ、茅葦は河塘に戦ぎ、蘆荻は渚しづに蕃へ、浮萍は波間に游へり。野の獸食ひ、空の鳥啄み、江の魚、地の虫之に養はるゝも、其草は牛馬の食に足れり。「吾恵汝に足れり」と、是れ實に神の語あり。

渠等は蜀江の錦にしんあきを耻ぢざるか故に、神は所有もちゆる美色を、野に、陳ねて其眼を饜せり。桃の花は眞紅しんくに匂におひ、櫻の花は淡紅たんくに咲けり、梅の花は淨白にして、李の花は妖白なり。圃に黄なるは菜種ななの花、紫なるは豆の花。流れに倚りて楊柳みどり緑り、山の端には紅葉ぞ照りぬ。七艸は春秋兩度に野を裝ひ、春霞はるのかすみは連山を粗織あらおこの蚊帳あぶらに變じ、秋氣あきのかぜは諸峰を密畫の屏風に列へり。曉來に玉散る明露は、宛も宵星天より落ち地に蘇よみがへる如く、遠林の

白雪は黃落の後の華に似たり。渠等は邯鄲の音樂なきを耻ぢざるか故に、神は所有ゆる聲を以て其耳に飽かしめたり。雲井の雲雀は天上の福音を傳ふる天女の如く、囀り上りて囀り下れり、谷間の花に黃鸝歌ひ、山路の日暮には子規啼けり。軒を繞る雨滴は、時に絃歌よりも長夜の友となり。晝の鷄鳴は戦場の喇叭よりも寢覺の心地ぞ好き。風聲鶴淚皆此里の大平無事なる音調あり、且つや樵子は角笛を吹き、牧兒は牧笛を鳴す、昔より斯の如く、後亦今の如くならんのみ。

蓋し人間の手若し頼むべくんば、バベルの塔も天國に達せしなるべく、金字塔は永世其角を殺がさるべく、三世に亡びし王家も、万世皇帝たりしなるべく、万里の長城も老ざりしあらん。君看すやエルサレムの光輝失せ、天竺の伽藍空しく残り、聖彼帝堡起りてモスコイ消へ、英國の花は米國に通れて新まり、羅馬の法王は風後の果の如く孤懸せるを。又看すや南京は北京に移り、六波羅は鎌倉に、鎌倉は室町に、大坂に又江戸に、遂に西京より東京に移りたるを。其れ斯の如くにして、六年前に早や絶なんと眺めし素屋の、六年後に依然として立つを見ば、唯吾等の主のみ我を欺かざるを知る。其

慈愛の語に曰く「又何故に衣の事を思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして長かと思へ、勞せず紡がざるあり。我爾等に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝此花の一にしかさりし。神は今日野に在て、明日爐に投入らる、草をも、斯く裝はせ給へば、况て爾等をや、嗚呼信仰薄き者よ」と。實に花嫁の衣裳も野の花より摘まれ、生兒の産衣も圃の穂より購はれ、祖先の墓碣、其子の筆墨、乙女の化粧料も、此の單純なる生活に於て欠くべからざるもの、皆一頃の田より生して足らば、今生よりの極樂にして、亦何の不足に嘆つとかあらん。

去れば渠等は、國民としては最も無識の國民なるも、人間としては最も有道の人間なり。抑も此里にある諺と云へば、唯曰く、「誠の道に幸歩く」、曰く「善樹は善果を結ぶ、曰く「蒔かぬ種は生へぬ」云々是の如きのみ、渠等は此單語(最も低き套語)を、食物の如く日常の業に携へ、傘の如く凡ての版圖に廣げたり。學ばされば忘れもせぬ、生れながらの性あれば、宛から無心の小兒の如く、喜ぶ時に笑ひ、悲しき時に泣き、他人の憂苦と快樂とに於て、自家の事故の如く落涙もし、歡喜もするなり。野歌の外に詩を識らざるも、

渠等は其身を自然の詩句とし、繪馬の外に繪を解せざるも、渠等の足は自然の畫圖を歩けるなり。又敢て世に求めざるも、却て世よりは求らる、道を失ひし旅人、浮世を嘆つ世棄人、智識の駢場、名譽の戰場の落武者等が來りて安息を求むる毎に、渠等は常に武士を憐みたる其手を投げたり。君見ずや、天使を衣て惡魔を行ひし法王あり、凡ての智識を極めて一善なかりし哲學者ある此浮世に、眞神の前、彌陀の目に喜はるゝもの果して誰ぞや、大あるものは果して誰ぞや、王位乎、智慧乎、金錢乎、各譽乎、空を拂ふ將軍の髯乎。唯吾等の主は曰く、「爾等謙りて此小子の如ならずば、天國に入るを得ず」と。我は嘗て謂らく「老子の玄々を談するは、遙に埃田の生活を夢みしなり。孔子が明教を説くは、是れ涙の谷を和くるなり。涙の谷或は和くべきも、埃田には歸るべからず」と。然れども夫の淳樸なる風俗を以て、單簡ある生活をや行ると吾郷の如き村落は、實に帝郷を去る遠からず、樂園の模型も尋ね難きたあらざるが如し。孔子若し起すべくんば、責むる所多かるべきも、老子歸り來るとあらば笑みなん。帝國憲法は發布せられぬ、然れども渠等は明年の代議院が、此の不如意の世界を如意の時世に變らしむ

ことを想はざるなり。新町村制の爲に村長の競争は激しかりき、然れ共無事の日多き此里に、彼等は長君の誰彼を問はざりしあり。外務大臣は諸外國と條約改正の談判を開き、各個の政黨は朝野に抗争しつゝあるも、渠等は相變らず明日の天氣を卜へり。渠等は毎朝四散し去れども、如何なる夕も其家にあらざるなく、牛馬も亦日に野を行くも、未だ嘗て此郷を出てざるなり。天長けれども天老いず、地久しけれども地は古びず。春花、夏雲、秋月、冬雪、百世も亦知るべきあり。斯かゝる平和の郷の外、山靜如「太古」とは何れの國ぞ、如何なれば我此郷を出て、再ひ歸る能はざる乎。吾舟は如何なれば逆櫓なる乎。悲しき哉我既に智慧の果を食ひぬ。今は唯此郷の、埃田ならで埃田に近きが如く、我も亦屢故郷に遊ひて、幼なき我そ追懷せんのみ。

## 第四 吾家

方宅十餘畝、草屋八九間。

榆柳蔭後園、桃李羅堂前。

犬吠深巷中、鷄鳴草樹巔。

戶庭無塵雜、虛室有餘閑。

陶淵明歸田園居

咸來ある墟巷の片側に、清岩寺の岩間より湧き來れる一條の清泉濺けり。是れ咸來の流とて吾地方に隠れなく、水が有てる過半の便利を村民に備へたり。朝には其澄む色吾等の顔を洗ひ、日中には其青き流巷を清め、風の時には巷に撒れて塵芥を捉へ、夕には米礪ぐ水となり、夜半の緩き音は百家の眠を促せり。猶且つ流を泉池に分ち、或は水車を推したる後、末流は田野に灌けり。故に巷の一方の家は皆橋を架て巷に通ぜざるあり。』吾家も亦其側の一にして、橋より來れば右方には僕室厨房と脊を合せ、左には玄關と廣間と列なれり。前流と直角に折れて、化粧室、禮拜堂、客堂の三間は列べり。客室に向ひて一畝の庭あり。挺々たる蘇鐵は以前に勝りて丈高く、放開したる櫛の葉は、垣

の外に睥め出てぬ。臥龍の老梅は相變らず皮剝けながら青葉ありき。躑躅、木楊、眼より遁るゝ青蘭は、依然として古色を帯び、苔を衣たける大石と、角滑らかなる飛石は、今も尙一個も減せざりき。垣根の一隅より起れる喬松は、宛も此小園の君主の如く瞰俯し、空の梯子の如く枝を蓋しつ、滿庭の綠蔭舊に仍りて涼しかりき。往に構園の流行せし時、吾父も此庭を改めんとて園師を呼びたるに、渠は其假山、假谷の位地、石樹の布置の巧妙なるに驚きて、凡手の改むる所に非るとを告げたりしぞとよ。

客室と禮拜堂を聯ねる廊下の側にも、太と狭き庭ありて池を穿てり。我は幼時日曜日毎に此水を変更へて、廊下に來る吾父の満足を得るを樂しき勞力となせしなり。今は此散園に關する凡ての責任は、吾幼弟に移ると聞しも、早や其を樂む父はあらで、掃除も亦太と怠れると見えぬ。

厨房の外には前流より曳きたる小池あり、是は吾父の採蓮場なりしが、其水こそ澄みけれ、底は年經りて泥深かりき。然れ共此處を飾る凡ての秋花は、能く此一塲を清麗ならしめければ、我は前園の謹嚴なるに飽く毎に、此園の優しきを愛でしなり。嘗て窃

に謂へらく、秋の花は寺院の華麗若しくは愁婦の媚妍なるが如く、陰氣の色を以て勝れり。合掌したる蓮華、低頭せる桔梗花、物思はしき牽牛花等、自から慕むに急くの觀あり。綠意了れる楊柳も、空枝を鳴らして、池邊の景色に寥味を添へたり。吾宅の直角なるに對し、穀倉、廐舎の位置も亦直角に立てり、其中間なる廣庭は農家の爲めに肝要なる打場なり。廐と穀倉を聯ぬる小扉を出れば、前には小き菜園ありて縁芋蕃中、横には肥料場ありて其瓦の軒には、大なる南瓜轉がり落ちたる雷の如く坐りぬ、凡て是等の背後を疊みつゝ、十畝許の竹林は戛然として風に鳴れり。林下の徑に柴門ありて、日暮れば鳥雀歸れり、街の流の一支は、今も此盤根錯節を底として、竹樹の綠を過ぎ往けり。柴門の外清流の向ひは、我前日逍遙したる野ありけり。

吾家の系圖は十年前舊里正の一家が他に越せしより、吾郷に在て最舊家の一に數へられたり。然して前數代の名は系圖と墓碣に存するの外知る由なかりしも、最近の祖の多くの女姓を出せしことは明白あり。是等の諸母は適く所に所天を亡ひ、其子を連れて我家に大歸したりければ、稚心にも我は叔母の多きを力強きとに思ひ、近所の童子と

家産の多寡を争ふ時にも、他の點に於ては負ることあるも、叔母の多きには例も勝ちたり。我は猶ほ記す、事の判斷に苦む時は智慧ある織部多の叔母に質し、母の顔を失ひたる時には、慈愛深き古毛の叔母に往き、秋の長夜には物語に富む秋月の叔母に侍し、散歩の折には健足なる山下の叔母を伴ひたりしを。然して諸母の伴子も亦皆家庭に於ける吾友、戶外に於ける吾僕なりき、斯ばかり吾家を賑かにせし寄食者も、吾祖母の身後に再び散りて或は近所の鰥夫に嫁し、或は其子の反哺に食み、殘るは織部多の叔母のみあるも、是も亦他の縁家に月日を寓せたり。

嗚呼懐かしき吾祖母よ、兄弟多き中に狭まりて、吾母の手諸子の頭に足らざりし時に、我は祖母の懷に生ひしとよ。彼は我また死を知らざる時に死に、而も半日の病に死にたり。此時吾は古毛の叔母に祖母唯眠ると聞き、疑ふとなく信ぜし故に、其夕哭して食はざりし吾兄を笑ひて寐ねしが、其次の日柩に藏まる祖母を見るに及びて、泣いて一夜を明せしなり。祖母は今此世になし、其墓の樹十八度の木枯風を過ぎし。渠に係る昔時の口碑も漸く消へゆきぬ。然れども吾兄弟の裡祖母の容貌を繼ぎしものは、唯我

一人なる由、諸母の語るを聞く毎に、祖母の恩吾顔に上る程厚かりしを追懐してやます。諸母は傳へり我父も亦祖母の手に人となりしと、近處の父老も亦母の手より斯かる謹嚴家の出でしに服したり。吾父は一たび落ちたる祖先の世より、一代に富を擧げ、吾郷に於る上流の地主、吾系圖の中興の君主、五男二女ある大家族の祖となりしあり。渠は此等の大業を遂げて疲れ、幸運なる世の變遷より博取すべき名譽、尊稱、特權、職業、凡て其子に譲りて老いたり。其妻ある吾母の苦勞も亦確かに父に譲らざりき。蓋し父は自家の勤勉を以て僮僕を率ひ、命令、指揮、意の如くならざれば自ら取り代るの風ありし故に、普通の僮僕は吾家に堪難かりしにも拘らず、一たび吾家に仕へしものは或は年を隔て、來り或は年を重ねて來る。今の老僕平助の如き、殆ど仕へて二世に至れるものは他あり、母の恩情渠の心底に活きたればあり。諸子女の舊衣を改むる爲め、秋の夜深く衣を擣ち、一人の子に春衣を欠かざらしめんとて、冬の晩には通夜に縫ひたり。渠が務は澁難ある交誼を調和し、疲勞せる僮僕を慰め、數多き兒子を生みて、其を不由かく育つる事にありき。宜なる哉祖母の死後三年間の久病を成して、一たび祖母の跡を追はんとせしと。

我が上には二人の兄あり、伯は今吾家の主人にして、叔は隣郡宮野村なる吾父の友に養はれたり、兄は其容貌より氣質より、全く母系に遺傳して父に反せり。渠は生れて善人にして、少くなく學びて多くを知り、淺く言ひて深く思ひ、多く與へて少く取れり。吾家に更迭したる此二代の氣風の相違は、喜ぶべくして憂ふべからず。昔し我が寓りし下總の家も、其父子の相違酷だ吾家に似てありき。史に曰はずや、趙衰如冬日、趙盾如夏日、冬日可愛、夏日可畏。と蓋し嚴寛若くは剛柔相配すると、吾父と母の如く、若しくは相繼ぐと吾父と兄の如きは、其家運長久の道なりとは、我が久しき持論なりき。過嚴なる徳川第一世に積まれし怨は、第二世の温愛に由りて消され、傲れる高祖の後に、優しき文帝漢室を其民に近づけたり。一代に一家を起すもの、固より常經に由るべからざるものあらん。然れども天下既に興らば創業者と其主義は、守成者と其手段に代はらざるべからず、我が嘗て下總の家の配合を祝せし此理由は、亦以て吾家を祝する所以なりき。

少兄の人となりは亦一個の面目を開けるが如く、吾家の血性に其類あらず。渠は輕快にして愁氣なく、其の巧諛は能く他の慣氣を和らげ、兒啼を笑はしめ、陰沈なる老人をして、遂に心底よりの絶倒に落ちしむ。渠は其の言葉の明白なる如く、舉動も亦活潑なり。又常に他人ならば秘すべき空大なる計畫を、容易に語り出て人を驚かすも、未だ嘗て實行せしとあらず。曰く吾龍變すべきは養父の死後に在りと、渠が前途は豫知すべからず、然れども彼が其電火の尾端を顯しつゝ、猶ほ能く忍んで堅固なる養家の家風に遵ふを見れば、亦凡人には非ざるべし。

吾長弟の言行は、恰も外に見へざる秘密を操れるものゝ如く、踰ゆべからざる規矩を歩めり。渠は幾分か剛情の風あるも、亦極めて質樸に極めて易直なり。渠が好く他を批評し他に直言しつゝも、却て能く他より愛せらるゝものは、其心質の腹藏をくして其言語、愛嬌あるに由れるなり。且つ渠は吾兄弟の裡に最も好顔の少年なれば、甚だ青女の心を得たるも、渠の行跡は甚だ白く、起臥の間亂緒を容れしめず。

吾家の光、兄弟の花として吾長妹は輝けり。渠は久しく女子を望める吾父母の渴望を充さん爲め、四男子の後に生れたれば、殆んど四兄の寵愛を一身に負ふほど一家の喜びに入り。近處も亦吾家に恵まれたる明珠の成長と幸運を祝福せしなり。吾家に恩を得んと欲する近處の妻女等の、如何許渠を吾父母に譽めしよ。渠は決して近代小説上の束髮の佳人、男性的の令嬢に似ざるも、其優しき愛らしき縹致に於ては、我思ふ、新聞紙上の畫に勝れり。渠の可憐質は愛嬌の媚るにあらで、貞淑の懐かしむるに在る如く、其顔にも<sup>そは</sup>磨よきも多く涙を藏めり。渠は今歳十九にして縁の糸疾く渠の身に纏はりたるも、其父は猶ほ最良の縁を待ちつゝ、遂に其花嫁たるを見ずして逝きしは、無量の遺憾なりしなり。

今年十五なる少妹は、寧ろ其姉に勝れる美術上の模型ある歟。渠が生れし時織部多の叔母は低語せり、姉嬢よりも美はしと、渠は生れしまゝ保母の手に長じたれば、父母の寵愛近處の祝福も、半ばは姉に掩はれしなり。渠の乳母は吾家に來る毎に、其母の姉に對する依估の爲め、二三言を終へざれば去らざりき。其の織られ縫はるゝ新衣を看出つる時には、其流行の好否を評する前に、先づ其二女の孰れのなるやと問ひ、其



主定まりて後或は一二言にして黙し、或は其満足なる賛辭を重ねて、布衣をも綾羅に褒めなせしなり。然れども少妹自身には一種の氣韻あり、超然として父母の愛、衣髪の装の外に心を置きしは幸ありき。渠は溫柔あれども女性の靡從なく、活潑なれども男性の剛情に及ばず。唯好笑と愉快に耽りて愁氣なく、大人の憤怒にも、小兒の叫びにも、朋友の怨みにも、渠は唯一様なる笑顔を向けつゝ、何物をも其心潭に着けしめざるなり。我謂へり長妹は長兄に似て、少妹は長弟に似たりと。

我が幼弟を視るは宛も長妹を視るが如く、渠を愛するよりも寧ろ憐れむなり。渠は今年高等小學の初級にあるも猶ほ十一歳の童子にして、父母の依怙、兄弟の競争、及び他人の愛憎の其身に及ぼす影響には、また何心も忝かりしなり。渠は知らざる人を避けて親しき顔に就き、好むまゝに求めて、與へらるゝまゝに満足し、命せらるゝまゝに行ひき。渠は實に我家に於ける季子の故に、長兄の如く父に愛せられたり。初めて學校に上りし日も父は渠が伴とあり、父が田園を巡視せし時も、渠は亦其杖の如く従ひしなり。斯く渠に大師大保たるをもて、晩年の快樂としたる其父も今失せぬ。我も

慈悲ある祖母を失ひて歎きたれば、今渠が愛せられし其父に別れし悲哀を思ふ。渠は生れて氣弱ばかりしが、遂に臆病に育ちたるは、一家の變遷渠が爲めに不利ありし乎。我は渠が繪畫を好めるを、首府なる渠が教師に聞きし故に、多く鐵筆の粉本を齎し歸りて渠に與へたるに、渠は我を他人の如く思ひ做してや、唯耻かしげに背面し、而る後竊かに執りて己が室に退きし時に、我は見送りて落涙したり、渠は舊に仍りて母に叫ぶ父の如く兄に願へり、然れども母の愛は孫の方に牽かれて見へ兄の掌も亦弟よりも其子を蓋へり、唯我實に吾少弟を憐む。渠が他人の本なる多き兄弟の間に孤あるは、宛も我か愛憎あき府民の裡に迷ふ如くはあらざるや。我は能く吾憂を知るも、渠は猶ほ無心あり。渠が唯翮々として遊ぶ様は。吾眼には家の隅なる暗雲ありき。凡そ是れ吾父が此世に残せし同胞あり。家内に於て或は恩の厚薄あるも、唯其は久しく外に在らざりし我に然か見ゆるのみ、家内には何の不和不足も見えざりき。斯る多數の家族に於て迷ふ枝なきと、吾同胞の如きは少なる由にて、吾家の和合は實に近在に隠れなき標準ありと云へり。是も皆辭せず受くべき吾母の名譽たるあり。

吾家の支族三家ありて、其最も古きは馬關の友の生家なる對家あり、此家の家族は嚮に貧しくして林外に退きしが、今は舊時の住家に復れり。次に古きは我より一家を隔てし質屋にして、最も新らしきは質屋の對家ある酒店なり。最後の家は、吾上京の後其主婦の失策に由りて、洗ふが如く貧しくかりぬ。吾兄の妻は實に此の家の女にして、嫂は昔し吾家の黒天使ありければ、其氣焔を銷し盡すは、何より憂き吾母の心配ありしが、我は之を隣人に聞けり、吾母が渠の怒を宥むる手段は、唯々寺に參れど云ふのみなりしと。嗚呼太と優しき姑よ、實にや嗔恚の角折る外に、寺院の説教は俗世に何の益ある。去れど斯ばかり怖かりし嫂も、漸く刺さき主婦とありつゝあるなり。吾母は今母と呼ばれて此多き兒女を有てる上に、猶祖母と呼ばれて一男三女の孫をも樂しめり。其長孫女は最も慧く、長孫兒は豪放あるべき形質を示せり。以下の兩孫女は未だ形なき箕中の豆あり。斯くて吾家は母ある寡婦より當歳の孫女まで、凡て十三人の大家族にして、唯我と少兄と居らざるのみ、餘は皆家内にありて消長しつゝあり、召し仕ふる二僕一婢も、亦毎年新たまる吾家族なり。

第五 鄉黨

人一生無根蒂、瓢如陌上塵、  
分散逐風轉、此已非常身、  
落地爲兄弟、何必骨肉親、  
得歡當作樂、斗酒聚比鄰、

陶淵明雅詩

歸省後の一日、我は旅行の疲れを休むる爲に屏居しぬ。對家には老父長く病みて唯死と我を待ちたりき。其家の娘、而も少く寡婦となりて大歸せし長女は、此朝吾贈物なる素地の鼻拭を持來りて、吾手跡を染めんとを求めたり。語る寡婦の言を聞くに、昨日吾歸省を聞きて、老父は一日咽びたり。幾度か手巾を擲げ、又疊みては手に撫て頬に當て、隣家の女が其當世に流行る手巾あることを告げし時に、渠は顔色變へて其繪帛なることを斷言したりと。憐れのものよ、渠は残る日の短かく、來る死の近きを知り、前夜大に吾筆を急ぎたれば、寡婦は旅の疲れを推量して言ひ宥めしも、徹夜忘れざりしと見へ、未明に醒めて呼びたりと。母は云ふ「卿歸りて叔父の日に逢ふは何よりの幸な

り、卿の筆若し其生前の喜に入らば、謹しみて書くべきものぞ」と。

我は喜びて承ぬ、謂へらく、我は吾父の死に背きたれば、願くは叔父最後の呼吸を取り、真心を黄泉に致さば、せめては父への手向けならんと、我は病人の履歴を知る故に、吾詩囊より左の如く寫したり。

天(トーマスマーア氏原作)

一 此世は夜半のまぼろしに

寫りて消ゆる雪ぞかし。

あさむく影の笑ひ顔、

たくみの雨の其なみだ、

天より外に眞如なし。

愛どのぞみどかゝやきは、

墓より摘みし仇し花、

天より外にひかりなし。

三 われわたつみに浮しづみ、

波より波に舟ゆるぐ、

心のあかり智慧の灯の、

照らすはからき吾旅路、

天より外に休みなし。

寡婦は拜受し、讀み得ざれども、父を喜ばせんと歡喜に堪へて馳せ去れり。

今は我爲めに故郷の快樂の顯熱の日ありき。一たび二たび訪ひ來りたる郷黨も、猶ほ交るゝ訪ひ來りて祝福しつつ、頃しも鮎の時なりければ、渠等が齋す村酒と鮎とは、累々として厨房に列べり。尙有緋袍贈、應憐范寂寒、不知天下士猶做布衣看、と古人は云へり。天下の味を嘗め盡して、却て鄙料理を享くれば、時に此感なきに非らざりしも、我は知る、渠等の厚情は賓客の異ある爲めに異ならざるを。此地を過ぎて車を停むる王公貴人にも、巡視し來る縣知事郡長にも、素性知れざる飄泊子にも、渠等の好意は常に村酒と鮎あるを。况して故郷の土より食ふ爲に歸れる我をや。故に我は先づ吾嗜好を回復するに務めしなり。

然り、回復すべき他も肝要なるものは土音なりき。抑も我は故郷に誇るべき官位も亦く、稱號をも金錢をも、又功業をも有たざりき。故に若し此年月に言慣れし京語を棄てば、唯少しく變れる顔と聲の外見るべき土産はあざざりき。然れども鄙の耳に京

語の苦きは、都會に鄙語の卑しきに異ならざれば、我が故郷の我に復る爲には是も亦棄てざる可らざりしなり。去れば我は頭初より茲に務め、一日半にして全く鄙文庫を胸中に置き得たるには。渠等も殆んど舌を捲きたり。渠等は豫て都會見物の村男女等が、一日にして都音を齎らす其の輕薄を憎みし故に、我が其反對に出でしは、如何許渠等の喜びに入れるよ。諸凡の快樂各種の會話に、我近けば近くほど、渠等は天人の如く我を待ち。時の間に吾風説は一村に流布せられぬ。我は唯戰場に蒙ふる咒も、息ふ爲には脱がざるべからず、戦ふ時には復冠るといふ、當然の答を爲せしも、渠等は猶ほ格別の美德の如く稱讚したり。

我嘗て酒を禁じて大に身軀の健康を得にければ、此二三年は殆んど禁酒の様ありき、去れども渠黨の前に其好む所を同くし、渠等の満足に由りて吾歸省を快樂ならしむるは、甚だ罪なき事と思ひければ、亂に及ばざる迄は常に飲むと定めたり。然れども我が渠等の贈物を愛つるや、渠等の心、一杯には一杯の名譽を感じければ、陶然大醉に至ると數回。蓋し平生慰藉の樂園と呼做す故郷に、吾人の屢する能はざるものは、

道の遠きが爲ならず、費を惜むが爲にも非ず、只時間の乏しきのみ。首府は名譽の駈場なり、一回頭の間に幾多の變遷は去來せり。「生年不滿百、常懷千歲憂、晝短苦長夜、何不秉燭遊」<sup>一</sup>。古人も快樂の時なきを歎せしなり。多年天涯に流落して、偶還りて故郷を見る、醉ふて兒女の一笑を博するも亦何の累かある。

我は今邊りの親戚を見舞はんとて、先づ嫂の里なる酒家に到れり。店頭には村の酒徒充滿し、半は我が面識せる輩なりき。主婦は今交際場裡の女王の如く、多客の間に立ち廻りしが、我を視て微笑しつゝ、奥に誘へり。我は今渠等の敬禮の裡に入來すれば。偃息したる此家の隱居は奥座より出て迎へたり。嗚呼斯隱居よ、渠は昔し豊ありし富を以て、其妻の手に任せれば、今は洗ふが如く貧しき此の日にも、心おきなく妻の手より養はれたり。渠は吾郷の文學家にして、當地方神社佛閣の奉願に渠が讀みし發句なきはあらず。渠少かりし時、富める思想の浮ふに任せて讀みたりし、人世榮枯の無常をば、老年に呼び致す不運に遇へり。然れども若し此豫想をかりしならば、富貴一朝眼を過ぎて消ゆる時、如何許か失望の鬼に追はるべかりしも、渠は少しも世の憂と

齡の萎まろに暴まされて愉快に高臥し、樂隱居の名を以て他の老人の裡に羨うらやまれたり。渠は其長女の幸運を祝して、其良人なる吾兄の富有と慈善とに餘生を托し、其妹を他の遠村地主の子に與へて、最早浮世を終へしと思へり。其嫡子の傲慢なるを、妻が恃きたる盲愛の實として、妻が自ら嘗むるに任せ、以下の兒女をば渠等を守る神と佛と、渠等を眺むる世間の愛憎に放ちしなり。渠が残れる業としては、唯郷黨の相談に昔し大なりける其顔と語を假すこと、他の喜悲哀樂の家に其身と同情を投ぐるとの外ほかかりき。去れば吾歸省の即時にも、近處の祝意を代表したるは此隱居ありしが、今日も我に贈るべき寸志なりとて、一札の短冊を取出し、莞爾として左の如く書きたり。

つむ雪のとけて今日より梅の花。

渠が顔には愁煩しゆはんなく、胸裡には憂色なく。言語には濕氣なくして、偏に吾満足を喜びける、其愉快なる光線は、眞に吾肝肺に寫されしあり。

此樂隱居が郷黨に祝せらるゝほど、其妻は忌まれたり。渠が貧を苦むは宛さかから囚徒の鐵鎖を苦みて、之を除かんと悶ゆるほどに、益々鐵鎖に嚙かまるゝに似たり。渠は前日

の奢侈と浪費の爲に富有を失ひたるも、其富有の記憶の渠に纏へるは、宛も舊情人の幽靈の如くあり。渠が願ひは一日も早く舊時むかしに返るべきとにありて、渠が心中の妄念も亦常に惡魔を呼べり、長壽を求むる王者に不老丸練られ、死を慕ふ皇帝に返魂香焼かれし如く、新聞紙上に端なく見へし投機業の効能は、遂に渠を心底より動かさしければ、渠は即時に借金して其の嫡子を遣り、投機場に上らしめしが、一擧して敗れ、非運は家の首石おおいしを震ひたり。此時に當りて、渠若し此家の立法官たるに止まらしめば善かりき。執行官を兼ねしむるも女將軍の力能く投機場の任に堪へしならん。然れども渠は一飛して司法官となれり。其計畫と失敗とを以て其子を弾劾し、熱怒の餘りに、其子を追ひて吾家の一柱なる長弟を養子にせんと宣言して、罪もなき吾母を震慄せしめぬ。去れど親の迷ひも半分は子の爲ためあれば、彼亦如何にそ其愛子を追ふべき。然れども一家生活上の計畫に於て、渠か立法官より司法官に移るとの自在なるは、轉た前途の望みを暗くし、斯かる境遇に唯一の慰藉なるべき家族の快樂は、氷の如く冷へゆきしなり。主婦は今其店頭より最好の酒を持ち來れり、渠は宛も失樂園のサタンが地獄に於てす

ら尙ほ望を繋ける如く談ぜるも。其心中を焦せる貧の苦煩は、絶へず其舌頭より溢れたり、渠は吾兄を生命の樹の如く稱讃し、其子婦を不如意の動因とし、其の轉業の頻々なるに拘らず、之に應ずる氣轉乏しきを咎めたり。其次女の結婚に於て衣裳道具の欠けたりし事を悔み、其の第三女の甚だ學問を好めるにも拘はらず、小學科程をも了ゆるに至らざりしとを痛むを、凡て前日の榮花と思ひ合せて打ち怨したり。其爽やかなる言語と抑へ難き氣象とは、猶ほ幾百難を惹き起すべき餘勇を顯せども、其好笑に於て現在の苦厭を吹き出せるは、殆ど我をして無價飲む其美酒を苦からしめたり。此家の嫁は折々器皿を運ぶ爲に出現したるが、渠が紅顔も早や淡く、豊かなりし頬も萎み、愛たかりし眉目も痛く冥しく變はりけり。我は屢渠に物云はんとせしも、渠は故人として耻ぢたるにや、他人の如く疎々しく、唯來りては復た去れり。渠が今貧き兒を胚みてあるを認めし時に、我は竊に背面して涙を拭きたり。

時刻移りければ、他の貧民ある老父か病むる對家に往きぬ。此家の少寡婦は今機を織りける處ありき。渠は柔和の笑顔をして我を迎へ、今朝書きたる禮を叙へ、我を其

父の病床に誘ひたり。家は早や老いたるも、渠が手に奇麗に拭かれ、古き疊も一介の塵たに揚げさりき。奥室に蚊帳の釣られて病人は圓かに眠りぬ。寡婦に聞けば、今渠が言葉は唯泣はかりにありぬと、斯くて寡婦は膝を折つて蚊帳に寄り、團扇を以て外より病顔を扇ぎつゝ、「父よ父よ」と小聲に呼びたり。病人は重く起き、我を視て先づ嘘歎せり。

「ア、卿は健しく歸りぬ、我は早や此通りに病みぬ」と。

老いたる哉叔父よ、渠は吾村の巨人、尋常の力士に勝りて肥へ、歩く能はざる程満ちたりき。今其疎ある頭髮、涙に乾かぬ睫、長く窪る頬の線を見よ、渠か陰影は其儘墓をさせるなり。嗚呼老いたる哉叔父よ。

渠が六十年の生命は、唯曳延べたる苦痛なりき。其青年の遊蕩は一家を陥れ、唯零落をのみ残したり。家系の非運も亦初めに其先妻を奪ひて長子を殘し、再び後妻を奪ひて二男三女を殘したり。伯は今家を出て、俠客となり、仲なる匠は未だ一家を活すに足らず。叔の放心は轉た其父舊時の追懷を耻かしめ、長女は其良人を喪ひ、大歸して

此寡婦となり、以下の二妹は母なく生ひぬ。渠は今正覺して是等の不幸と苦争あがきしも、老おいと萎しほみは渠を力なからしめ、遂に病みて起たざる苦痛に渠を置きたり。唯渠か猶ほ泣き得る日に、吾顔を渠に見せしは、諸共に限りなき幸なりき。

今床の楣間を仰きしに、思ひきや今朝書きし天の詩の、今は美はしく表具せられて、此家の篆額とされるなり。是より外に秘藏なきほど此家の貧しきとこそ憐れなれ。去れば我は病者か額を指して天と云へる笑顔に於て、久しく其臥床を纏ひし死の蔭、陰府の羽消えて、天國の微光の上れるとを認めしなり。

ア、神よ、吾事の斯ばかり渠に功德ありしを謝す。渠貧しく一物なけれど、凡ての代りに天を得たり。確たしかに猶太の詩人は云へり、「人の富みて榮華加はる時懼るゝ勿れ、渠か死ぬ時は何をも携へ行くと能はず、其榮華は渠に従ひて下らざるなり」と。見よ人は裸に來りて裸に歸る、誇る處は裸の清きにあるのみ、老人の貧にして病める又何ぞ笑ふ可けんや。

寡婦は問へり、「我等には東京も用なけれど、せめては都人の生活なりと聞かしてよ」。

我即ち答へて曰く、「逆旅に生れ、下宿に育ち、酒肆に祝言し、假住居に迷ひ、病院に死して、他郷の土に埋まる、卿よ是れぞ都の生活ありと、病人は偃よき敢あへぬ涙を飲みて、

「さては生れし土に死ぬる我身はそも如何許の幸ぞ、……去れど吾兒等こそ今は何處に迷ふやらん、何事も此娘一人に負はしつゝ」

少寡婦は一滴の涙をうかめて、語り出るは其家の始末ありき。吾上京の頃までは、叔父は林外の人にして、寡婦は夫の家うちにありき。當時兄なる匠は時の不景氣に事もあければ遊食し、弟は旅より旅に商法を營めども、自ら活くるにさへ足らず、以下の二女は唯其父の生命を殺くのみなりければ、渠は暫時里の助に走らんと焦あせりし折、偶々良人死して、養ふべき子のなきを幸ひ、嘆きの裡にも家に歸りたるに、耕す田も織る機もなく、往々食はぬ日もありて、外出もせて菜色を包みき。辛して蠶の時節に達したれば、兩妹をは手紅に遣はし、寡婦は父と長弟を牽ひて瑣細なる養蠶をあし、漸く一基の機を借り得て晝夜に織り、始めて常食に就きしあり。

其後は養蠶の盛あるに従ひ、機の頼みも多ければ、養蠶は父と弟に任せて専ら織ある焉の

みに急きつゝ、烟筒も亦黒まりぬ。寡婦は年猶ほ壯ければ、憐んで再縁を勧むる人もあり、又父に幸なる縁談もありしが、我なければ父安からずと、情なくも皆辭はりぬ。今は其丹心の知られてや、勸むる人もあぐいと心安くなりぬ。

去れど寡婦の本望は、獨り活くるのみならず、今を昔しに、返すにありき。其家も亦吾家の舊枝、叔父も昔しは富有ありき、今貧しく終はるとも、生前六人の子を育てたれば、指笑すべき人にあらず、去れど世間の口は是非なし、親惡ければ子も無頼に、年老ひて便なく死ぬと、噂さるゝ悲しさに、寡婦は生活に餘れば時衣、新服、日月と共に調へつゝ、寺參にも宮詣にも、他の善き老人に加はらしめしが、遂に其林外より先祖の礎に手を置きしは、四年前のとなりき。

寡婦は今語を繼ぎて曰く「妾か身は貧を負ふて生れたれば、骨折りても貧は脱けず。去り乍ら汗の油の積りてや、一家の衣食も餘りあり、妹も早や嫁期なれば、縁ある儘に嫁かしめたり。残る小妹も母なし育ちと、世間の笑もあるべければ、吾手に着けて結髪、機織、裁縫など、妾が覺へし儘授けぬ。去れば妾の苦心を察して、長弟も亦道具を負

ひて遠方に出てぬ。唯手に餘るは季弟にて、父の悲嘆も近處の勸告も耳にせず、旅より旅に迷ひつゝ、他人に迷惑かくるほど身も遠ざかり。久しき以前馬關に漂着し、偶々昨夜歸り來ぬれど、一夜寝て又出てたり。去り乍ら渠も亦思慮なき輩にもあらねば、必らず悔る日もあるへし、妾は深く氣を痛めず。父も妾の意を酌みて、此頃は病重りたれど、何事も心に忍ひて、働く儘に妾を放ちぬ。親娘同身一躰の、世にあり難き喜びも、貧なればこそと思へば、今は却つて世は楽しく、零落すれば世間の愛憎も人情も、掌に取る如く見ゆるなり。去り乍ら、卿の兄は善人なりと賞めぬ人はなければ、妾等親娘ほど知るは少なるべしと、日毎に父と其話、生佛と崇めあへぬ」と。

此悲しき快樂の物語りに、病人は折々胸の時雨に咽びてありしが、茲に至りて嘘歔りたり。我之を聞きて長息默然たると久しかりき。漸くにして寡婦に云ふ。

「實に卿は生れ乍らの學者なり。隠れたる君子なり。世は皆な論語讀みの論語知らず。唯書物を讀まざる、卿の胸に論語宿れり。卿能く聞き取れ、昔孔子に子貢と云ふ高弟ありき。或日其師に問ふて曰ふ「貧して語ふとなく、富みて驕るとなき如何」。孔子答



へて宣のたまへり、「未だ貧して楽しみ、富みて禮を好むものには如かず」と。富みて禮を好む者、今の世にありやなしや。去れど貧して楽しむものは、此家にこそ見られたり。卿の胸には論語あり」。

渠は大に驚きて答へり、「妾は決して文字を知らず書をも讀まず。妾は唯貧しき賤女シブのめなり。斯る賞美を受くべからず。妾は唯苦にならざる程に貧に親しきを知るのみ」。

我は遮りて曰へり、「我は強ち卿を學者にはせじ。去れど我も亦卿の履歴を東京に履みたれば、聊か以て同情相憐まんと思ふのみ。實に我も一度世に棄られ世界の底に落ち、身の外頼むものなきに至りて、始めて自身の價值を感じぬ。他人の膳より食ふ間は、自ら思ふと塵の如く、我奮ふ時は、自ら九鼎大呂の重きを知る。今は我竊かに自立の根底を得て、之を多くの友に語りたるも、唯漫に荆棘いばらのみち路を説く勿れと答へられしのみ、偶々歸りて卿に聽く「友達方より來る、亦樂しからずや」といふも愚よ。今日の會話我は吾満足によりて卿の満足をも思ふなり」と。

渠は涙を瞬きつゝ、釋然たる顔色、暫時は無言かりけるが、漸くにして笑み且つ曰ふ、「今こそ斯く弱りてあるも、父か素志は卿等四兄弟の細君を世話するに在りて、常に曰ふ、酒家(吾家兄の婚儀)と宮野(吾少兄の聳入)には、既に吾一臂を致したれば、是よりは卿の爲に宮野の妹娘を得、卿の弟氏の爲めには甘木の季娘を得まほしと、去れど卿は都の人なれば、田舎よりは娶られまじきや」。

秘想の鍵を打ちたる突然なる此質義に、赤面動氣一時に襲ひ、眞實終臨まで吾兄弟を思ふ此老人の心底に感謝したり。去れど自ら氣を静めて何知らぬもの、如く問へり、宮野の妹はまた何方へも縁づかざるや。「然り彼家は皆卿の歸省を待たれしなり。卿一家殊更母上の素望も又然るあり」。我は唯滿眼の喜を以て答へぬ、「吾妻の爲斯ばかり親族帯の満足に入らば、唯々老人の意こころのまゝ」と。此語を聞きて病人は再び咽へり。實に我が此返事は、渠の爲には死出の土産にありしぞとよ。

此時家の小女は刻限なりとて午飯を出しぬ。我は快樂の此家に蘇生せしを感して思はず強食せり。椽の外、放朗なる空庭を隔て、緑芋青蕪遙かに竹樹に連かりつゝ、廣く涼しく眺められ、樹間に吹きける清風も、其青羽を椽側に拂ひしなり。我は此家の安

すきに安んじ、日の暮るゝまでは去らざりき。

此夜吾同年の友は、我爲に牝雞を割き好酒を置き、村の逆旅に我を歓迎しければ、我は唯其好意の故のみならず、久しく疑ひし吾荒破村を觀るは、此交際場なるべしと思ひければ、定刻に逆旅に入りぬ。渠等の員は點燈時分に満ちしが、皆手織の厚く地味なる單衣を着、甚だ低く帯を結びぬ。其頬は新なる汗の堪へて、浴湯ゆのみの晚ゆふきを示し、其顔色の黒きを以て、野外の生活をトせしめたり。博多語はつかたごばは今忘れられて、純粹なる土音滑稽は滴々頷を解き、或は其健腕を燈下に較べ、日中の勞力を誇り、到る所田舎漢の眞面目を洩したり。我は竊かに渠等の一人に、今年の桑苗如何あるやを問ひしに、渠等は顔を擧めつゝ「是は一塲過眠の夢にして、二年以來皆農事に復りぬ」と、殆ど忘れしものゝ如く答へ、我をして頓に安堵せしめたり。坐定まり宴初まり、遂に東京なる質問の繼出しければ我は左の如く答へたり。

「然り吾友、實に東京の繁華は卿等の問ふ所の如く、淺草觀音の耳は、處女の願言に眠る間なく、新富座の演劇は、食頃けうに巨万の富を擧げ、神田祭に死人あり、夜毎に火

事の花は咲き、チャリ子の曲馬は都人の金庫を震ひ、花巷には不夜城あり、銀座には暗夜なきも、我は敢て告白す、都は寥しき社會なりと。煉瓦の大厦、四壁の長家櫛比して空地なく、屋上からずは、物置場なき程あるも、其合壁は万里の長城、其敷居は絶處の關門あり、百万の都人は勿論同じ管より飲み、同じ天より呼吸するも、其交際は唯一家内の快樂なり。毎朝顔を其隣人に對するも、其隣人は日に異あれり。其家に昨日は貸家の札張られ、今日美麗の店張られ、明日は又賣家の札張らる。亦何處にか心を許すべき。是故に渠等の快樂、憂苦、戀愛、親切、皆家の奥に疊まりて戶外に溢れず。其れ然り、變化多き土地には、永久なる交際ある由なし。吾友よ卿等は知れり、鄙にありては、二里三里の他郷より情人を得るとを、然れども東京にありては、唯家内主従の戀あるのみ。大坂のお染久松、江戸のお駒才三、京都のお仲清八等の活劇は、是れ都會に於る常情のみ。蓋し都會の聲は個々亂れ弾く音樂の如く、賑かなるに似て騒がしく、村家の聲は合奏したる調子の如く、淋さびしきに似て甚だ温あたたかなれば、都會は一時の滯留に適するのみ、永久の住處は村落にこそあれ」と。

解せるも解せざるも、渠等は一同感嘆の辭を爲し、猶ほ二三の質問を爲し了へて、行酒急き放歌溢れ、初めには流行遅き都の調、次に耳新らしき田舎歌、最後に全く知るに及へる古謠歌はれ、絃聲一夜一村を傾け、相散せしは鷄鳴の頃なりき。

第四 戀人

青<sup>一</sup>年<sup>不<sup>二</sup>重<sup>一</sup>來<sup>一</sup></sup>、一<sup>一</sup>日<sup>難<sup>二</sup>再<sup>一</sup>晨<sup>一</sup></sup>、  
及<sup>レ</sup>時<sup>須<sup>二</sup>勉<sup>一</sup>強<sup>一</sup></sup>、歲<sup>一</sup>月<sup>不<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>人<sup>一</sup></sup>。

陶淵明雜詩

陌<sup>一</sup>頭<sup>楊<sup>一</sup>柳<sup>一</sup>枝<sup>一</sup></sup>、既<sup>一</sup>被<sup>二</sup>春<sup>一</sup>風<sup>吹<sup>一</sup></sup>、  
妾<sup>ガ</sup>心<sup>正<sup>二</sup>斷<sup>一</sup>絶<sup>一</sup></sup>、君<sup>ガ</sup>懷<sup>那<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>知<sup>一</sup></sup>。

郭振子夜春歌

我が故郷の快樂は、今や戀の幻影によりて高まりぬ。嚮に向家の寡婦が語りし宮野の妹ある一言は、吾情奥の琴を弾じければ、胸を環る血線は宛も美妙ある音樂の如く、満身に響き亘りぬ。今は宮野の訪音の、一日も猶豫あり難ければ、歸省の第三日の未明に出て往きたり。昨朝眺めし故郷の幻影も、今日は又今日の景色あり。昇る朝日を樹蔭に回顧し、綠蕪の間に秋風を受け、遠くの森に豊なる炊烟を認め、太古に似たる青墓をも、我は爽かに歌ひて過ぎ、猶ほ積翠を溪流に收め、尾花の露を山路に拂ひ、三叉の途の孤屋を殘し、重ねて行きて太ど冥しき此地方の幽靈場ある七曲の野に出てぬ。其第三曲の衝に當れる、古石の露佛は、依然として立ち老いたり。

抑も此の慈悲ある地藏尊は、何か故に茲處にありやは、久しく解けざる疑問ありき。迷ふ由なき一線路に路標みちしるべの必要もなく、妖怪なき日中には守護者の功能もせず、衆生濟度の大願を以て、徒らに月下の影法師と化し、雨夜の迷狸狐と顯はれ、來るものは敵となり、遁るゝものには追手となる、佛者の功德は焉くに在るや。是に於て乎、近所の古老は其の由來を想像せり、或は是處は昔怨靈幽鬼の場なれば、佛像を以て其魂燭を調伏せしかりと云ひ、或は非業の死者を埋めし處なりと傳へ、相附會して其臆を怖くせり。鄙青年等も亦、或は祈願應驗の感謝の爲め、明衣を佛の肩に纏ひ、或は草葉の衣の冷たき上に、猶ほ二三の樹木を加へて、轉た其眺望を懐くしたり。

我は嘗て半月半雨の夜に此處を過ぎたるとありき。我は第一曲の端に慄へる足を、一步一步に進めつゝ、暗光ある佛像に變化の機會を與へざる爲め、一心に凝視せし間に、忽焉佛頭より迷ひ出でたる白光を認めぬ。其恐しさに我が脚根は地に沈み、生氣は全身を棄て、眼は腦中に埋もり、呼吸は心底に潜みたりき。數分の間我は吾邊に何がなししかを知らざりしが、漸くにして耳復かみり脈開き、恐怖の流瀨を踰へたる時に、我は

猶ほ白光の人高の空に釣られて來り、其緩く翻る調子に、細こまなる響遠く聞へて地に傳はるを覺へぬ。白光は廣がりつゝ、眺むる程に天蓋となれり。是は吾目の迷ひならんと、幾回か瞬またせしも、渠は猶ほ近く我に寄りたり。我は寒つめたき身を移さんとして自ら奮ひたるも無益ありき。猶ほ凄かりしは浮べる布の端に、佛像の見へ隠れつゝ、睨むにありき。我は慄おのき佇たみつゝ、屹立點に固着せし間に、白光と地の音とは益近く、悽影凝りて一個の陰形おんざうを顯したるを、熟見れば、是は如何に傘さし來る夜行人ありき。嗚呼我も亦傘を持ちたりき。我が渠の傘を恐れし如く、渠も我が傘を恐れたりき。唯渠は慣れたる夜行の實驗に於て、幽靈場は緩く過ぐべきとを悟りたるが故に、たとひ我を恐れつゝも、徐に此方に進みしあり。渠は今我爲に守護の活佛とありて、恐怖に對する吾後楯と思はれければ、我も亦此の悽き死佛の影を、後に見て安然に過ぎたり。然れども爾後我が暗夜の旅行に於て此一場を追懷する毎に、白光の天蓋は、常に吾眼前に幻影を叙へたり。

去り乍ら今日の我は早や昔日の我に非す今は血氣の壯年あり。曾て玄界の怒濤を乗り、

遠州灘の大瀾を過ぎ、荒涼なる武藏野に寝ね、幽邃なる日光の深壑を伏仰し來り、亡魂に疎き理學を修め、文明國の信仰を銘し、新に凱歌を歌ひて歸り、故郷の快樂愛の望に充されつゝ、滿眼の視線天下を小にする意氣を以て、此の小徑を過ぐるに當り、何物か亦我を靈感すべき。地藏尊の顔は我に對して笑ひ、周圍の青草の優しく迎へて送るを見し時、我は人なき里の英雄の如く、長き七曲を短かく過ぎて、得々として宮野村の境に踏入れり。樹林の裡に奥床しく、吾往く家は見られつゝ、壁聖の光は再び思の鍵を敲けり。我は謂へり、抑も宮野の家族は、宛も深き淵の如く、如何ある喜怒哀樂の風も、一人の顔に波たつ能はざれども、此處に投げたる石は、常に底深く容らるゝを見ると、蓋し渠等は疎き形容に篤き眞情を含め、感投詞痴き割には、強く働詞を響きしなり。我は昔彼等の仰天を得んとて、無益に工夫を凝らしたりしも、吾一言一行たに渠等の記憶に失はざるを認めしなり。

去れば今突然なる吾歸省も出現も、遂に渠等を驚かし得ざるべし。然ればなり、渠等は多分冷淡にあり得べきも、其の一人——吾訪問の最初の主眼、——最後の主眼、——

吾意中の幻影、——理想の天女、情人たる褒似は、恐らく笑顔を藏す能はざるべし。渠は今吾歸省の事を夢現にたも示されたる歟。望に輝く吾顔を思ひ及ぼすともある歟。今我渠を訪ふの路にあるとを、渠に報する由はなき歟。今吹き出す吾氣息は、渠の思に斯ばかり愚痴を重ねつゝある吾情を渠の胸には音づれざるや。我嚮きに吾村に於ける多くの變化を見たり。知りたる人は老ひ、親しき友は長け、忘れし童子は成人し、知らざる兒女は多く生れたり。然れども最も華かに最も著るきものは、處女の花嫁とあり、標有梅としきとあることありき。我は其を吾兩妹の上に見たり、長妹より一春長けたる吾情人の幼なき容貌は我能く知りぬ。去れど今は我を迎ふる如何なる紅顔ぞ。日の熱きに汗は流れて喉渴きぬ。渠の家には甘き梨と寒たき井あり、イヤヤ急がむ、早や家の衡宇のきの見ゆれば。

我は今家の閨を踰へたり、吾少兄は玄關に來客と語りつゝ、我を瞥見したる儘又客の面に向きぬ。納戸に聞ゆる機織る聲は、吾入來の爲に止まざりき。我は直ちに家庭を通りて井の端に至りけるに、傍ある職事部屋に叔父は隱居職の一事として、放大なる

團扇の骨に紙を肉つけつゝありき。渠は我を見て一笑せしのみ、又も團扇に餘念なかりき。渠能く我より團扇を愛するあるか、今は接待の人なきに困りて、直ちに奥なる客室に來りしに、思ひきや吾戀人の此椽先に縫ひつゝあらんとは、實に戀人は美はしくも年長けて、轉た可憐の兒とありぬ。不意の對面に紅花を散し、忍び得ざる喜悅の笑顔に坐を起ちぬ。然り此の急遽の際にも、渠は猶ほ容止を保ち、極めて靜かに極めて優しく往き消へつゝ、間もなく見へて亦隠れ、其母は出て來れり。此時叔母は溢るばかりの満足を以て云ふ、「卿が歸省のとは其日に傳ふる人ありて、卿の來訪も昨日よ今日よと待ち居たり。此度は母上の如何許喜はれつらん、今年歸るか來年はと春、夏、秋に待たれし甲斐あり、母上の健こゝろしき裡に、卿も無事の顔見せて、満足の程察し入る。一時は黄痰を病みしと聞きしが、左したる事もあかりし乎、去るにても愛憎なき他人の中にありて、平常たに心細かるを病中左こそ不自由なりしならん。吾家も今は主人の隠居せられ、何事も聳おこ氏ひし（吾少兄を謂ふなり）に任せれば、以前よりは身も樂になり、仲妹も婚嫁して殘るは季娘一人になりぬ。渠も早や卿の妹よりも一年長せし年頃

かれば、言寄る方も多けれど、父は所存ありとて皆斷りぬ」と。

叔母の談話は娘の入來に遮られたり。渠は今手つから落せし梨子を冷水に浸して運び來り。薄紅に光る顔もて、庖丁操りて無言に皮剥き初めたり。叔母は「日頃卿が愛たりし此梨子、何時も好く實りしが、今は五年、然なり卿が上京せし後一秋も實らず、漸く今年になりて、枝の折るゝ程實りぬ」と云へば、

「宛から卿を待ちしに似たり」と母の語尾より戀人始めて物云ひしが、忽ちに心付きてや、耳熱して再び語を改めつゝ、「去るにても此間の風にて三分一も落ちつらん」と云へり。

我は心底に叫ひたり、渠か胸の音を早や聞きたれば梨子幾個落つとも遺憾なしと。今は梨子多く剥むかれぬ。我は果實の裡に、最も梨子の美食家にして、黄痰の日に煩熱のため絶食せし時にも、梨子は絶好の糧なりし。人は夏より冬を好めど、梨子、清水、冷水のある里には吾は夏日を愛せしあり。去れ共敢て告白す、此家の梨子の味の如きは、我嘗て味ひたる最も甘味のものなるを、況して今日は苦熱の後と云ひ、殊に秘密の味

あるをや。

叔父は張り了へたる大團扇を採り、緩く扇きつ出て來れり。母と乙女とは趣向の爲に厨に去れり。叔父は相變らず悠然として座を取りつゝ、我に謂へらく

「如何に如何に、都と鄙とは孰れか樂しき。東京の生活は苦しと人皆云ふ、卿も却て我止めし如く、故郷戀しくならざりし乎」。

我は答へり、「然り叔父よ、叔父の言果して當れり、此家の梨子と叔父の言をば、我事毎に思ひ出てぬ、然れども今は動き出てたる玉なれば、重ねて止みなん由もなし」。

叔父曰く、「然り、卿も今は操觚の業に就けりと聞く。生れ得たる素望達せり。去れど餘まりに故郷疎きも頼もしからぬば、今よりはせめて年毎に歸省すべし、母上も早や老てあれば」。

「然り故郷の道も漸く今年開けたれば、縦令毎年ならずとも、三年毎には歸省すべし」と、我は答へぬ。

叔父は甚だ機嫌よく、大團扇を以て吾言を扇ぎ消しつゝ、「否とよ三年に一度あらば寧

ろ回らさるこそ宜けれ、學問の時ならば兎に角、最早や一人となりたる上は、身も少しは自由なるべし」。

頓て母娘は酒肴と共に出て來り、一場の宴會は開けぬ。母曰く「近頃の肴なきとよ、折角の賓客に唯有合の酒肴を出しぬ、唯口に適ふものを食へよ」、叔父曰ふ「好食も亦口に馴れては味なし、都より偶ま歸らば、鄙の味も亦時によりての饗應ならん」。

叔母曰く「定めて東京とは、聞しに勝る都ならん、首途の折の涙も、都に着けば乾くと聞く」。

「誰も然か云はるれど、故郷の人は宛も鏡に寫る吾面の如く、古びもせず疎くもならず、何時も懐かしく思はる」。

「去れど斯ばかり永く都に住まば、知邊も多く交際も廣く、昔しを思ふ時もあるまじ」。

「然り叔母よ、晝は我東京を歩み、夜は故郷を夢みてあるなり」。

「東京は貌好きみづか女人も多かるべければ、早や相契る妻もあるべし」。

が、遂に又口を開きて「都には好き娘は宵の星ほど多けれど、好き妻は晨の星ほど少  
あきなり」と。

斯く答へつゝ、心中竊かに黙思す、叔母若し其故を問はば、我は答へん「町家の娘は童  
女の如く遊食し、學校の女子は男子の如く議論せり、當世に於て教育の第一義は、女  
性の顔色を男性の人相に變るに在り」と、若し吾妻故郷にありやと問はば、猶豫なく然  
りと云はん、然れども猶ほ何處にと問はれなば、我如何か吾思を告ぐべき乎と。

生憎にも叔母は別に問ふ事もあかりければ、今は願て我より問ひ起しぬ。

「阿嬢の眼病は今如何に」と。

此時叔父は得意に盃を揚げつゝ、「去ればあり實に面倒なる眼病なりき。最初卿の家に  
遣りて、其地の醫師に通はしめしは、卿が在郷の日にてありき。當時一度は癒へたれ  
ど、間もなく再發し、遂に福岡醫院に入療せしめしに、博士は病根を脉軀の羸弱なる  
に歸して、肉食だにせば癒ゆへき由證明しければ、農家ながらも姫君の生活、未だ半  
年も立たされど、眼も癒へて此の通りに肥へ立ちぬ」と。

我は戀人の方を向きしに、渠も面はゆげに俯きつゝ、談話暫らく途絶えたり。既にし  
て又浮世話の快樂に移り、吾少兄も來り加わりて、其頓妙なる滑稽を以て坐を新め  
ぬ。時亭午に近ければ、我は此地より三里遙けき洪水の迹を觀んと云ひしに、叔父も  
未だ其零落の全斑を見さればとて同伴したり。

我等は酷熱にも拘らず、筑後川に沿ひて上り、行々新なる沙場を経て、古川と云ふ一  
村落に至り、天より落ちたる洪水の迹、地より失せたる世界の礎を巡回迂曲し、村落  
の荒敗、桑田の移れる川流、屍の埋もる墓場、生還りて死を求むる餓孚の慘狀等、他  
の嘆息の時に發すべき一歎線を、腦裡に留めて歸りしなり。

時移り暮近くなりぬ。母と娘とは他の趣向を整へて疾くより吾等の歸るを待ちにき。  
井の軒に猶豫せし、落日の紅線も漸く銷へて、梨樹の葉末より蒼然たる夕闇は立ち迷  
へり。今宵は宛も陰曆の七月十五日なりければ、露けき瓦屋の上を満月は、黄昏より  
輝き初めぬ。裏門の方に嘶き歸る馬も聞へ、馬子が歌ふ馬子歌は軒端を繞り、人語の  
響に俄かに家族の殖へてける、争ふ方なき農家の日暮、人は急はしく戸を出入り、犬は



人の後を慕ひ、猫は厨に駈廻り、夜啼虫も暮の戸に啼き初めぬ。

露に濡れつゝ娘は梨子を落して來れり。渠は今清く濯はれ端しく髪も結はれて、露の後ある花の如く、一入わ少き乙女とあれり。其の濃化粧こまの鄙風俗を止めて、素顔の儘に出てるは、其氣質の高尙なるを證し、渠が唯ある如くあるは、轉た其品性を高めたり、宴場の會話は他語をかりき。叔父は曰く、吾家の梨子は東京にも少なからむ。叔母は曰く、今年實りて卿に遇へり。叔父は曰く一年一度は歸省すべし。叔母は曰く此娘も早や嫁期あり。戀人の無言なりしに代へて、我は甚だ能辨なりき。殊に東京の疑問に及びし時我は云へり。

「否とよ叔父、首府の生活は宛も極樂往生に似て、難易の兩道即ち他力と自力とあり。他力に縁りて車を進むるは易く、自力に由りて鞋を行るは難し。是に於て他力を頼む拜人宗と云ふもの起りぬ。拜人宗とは人より下りて人を崇ふ者、己れの汗を以て他の油を添ゆるものにして、我常に思ふ渠等は生れさるの勞苦少なきに如かずと。蓋し大臣の灯提を持ちて洋行し、長者の財囊に入りて濶歩するも、自家何の誇る處かある。

負債主に役せられて催促法學士となり、借金家に養はれて言譯代言人となる、滿腔の學問も亦何爲れぞ。叔父よ我淺學にして名號なきは、固より隨ふ所を重からしむると能はさるも、而も自から立つに餘あり。我に君なし僕なし。我唯一個自由の民、宛がら沙場の一小粒に似たり。然れども我確かに信す、たとひ吾名は一個とあるに足らざるも、吾事業は一個の事業なるとを。叔父よ、我此迂路を取るは、失脚茲に落ちしに非ず、唯々安全の道なればなり。靈界の他力の舟は、覆る事なからんも、見よ俗世の他力は、百面相、疑惑、仇に縋ひたる繩の如し、主人公の心一日の裡幾晴曇しつ、危き事の限なり、未來に於ては蓮華に坐すべし、現世に於て蓮華に坐すれば即ち落つ。故に多くが波上の花を慕ふて、不測の淵に臨む間に、我は我が起せし吾石上に座せんと欲す。是れ我が築ける九仞は、我棄てすば一仞も他の爲めに低くせられず、其處に起臥するも亦皆吾意の如くあれば。

叔父は遮る事なく我言を聞きしが、其終尾に於て「フム」と頷うなづきたる其單咽語、宛も石深淵に落つるの響ありき。

側に侍れる戀人は、父母の指揮により瓶皿の間に手を出す外、何の言語も舉止もなかりき。渠は宛然美術の肖像の如く、靜かに其處に坐れるのみ、亦た見るべき意志の活機をかりき。然れども吾信念は確かに證せり、京嬢の愛と村娘の愛とは、眞反對の活機を現するを、京嬢の愛は目より光かり、唇より傳はり、手より移り、舌より溢れ、筆より通ずるも、村嬢の頭を圍める嚴父母の目の下には、何等の通信をも容されず、渠等は唯熱くもなく冷くもなく、尋常一様の舉動の裡に、脈々たる戀の線を送らねばならぬ故に、田舎の愛は一種の宗教の如く、愛の生靈を受けざれば感ずる能はず、又た容易に他の冷眼にも發あはかれざるあり。然れども一たび機微に感ずる時は、情の潜熱、涙の伏流は、相思の幻影とありて、夜毎の夢の鏡に寫る、今や吾情人も亦何氣もあく我に献じ、我に酌みて無言なりしも、屋上の明月二人の影を壁上に寫しぬ。

短か夜は更け易く、樂む時は疾く流れて、何來の遠鐘も午夜を語りて、唯黙思の室、幻影の座、戀の夢の時間のみぞ残れる。

我は翌朝日の熱せざる間に家路に上らんとせしも、叔父は曉來新らしき結を得しとて

我を淹留し、叔母も亦偶たまに來りて歸るの速きを咎め、乙女も始終所要ありげに客室に出現しければ、さても我は花の蔭に捲かれし如く、心脆くも止まり、夕刻に及び再來を約して立ち出てぬ。

第七 山中

嬴氏亂天紀、賢者避其世、黃綺之商山、伊人亦云逝。  
 往迹浸復湮、來逕遂蕪廢、相命肆農耕、日入從所憇。  
 桑竹垂餘蔭、菽稷隨時藝、春蠶取長絲、秋熟靡王稅。  
 荒路暖交通、鷄犬互鳴吠、俎豆猶古法、衣裳無耗製。  
 童孺縱行歌、班白歡游詣、草榮識節和、木衰知風厲。  
 雖無紀曆誌、四時自成歲、怡然有餘樂、于何勞智慧……

陶淵明桃花源詩

幼時我吾母の膝下に聞けり、吾里は山家なれども、故郷の如く懐しき家はあらずと。  
 此語今も猶ほ忘るゝ能はず。誠に母の故郷は三里遠き隣郡上坐の山中佐田村、其家は與  
 家と呼ぼるゝ最舊家なり、此處には猶ほ吾母の母なる祖母存らへ、吾母の兄なる伯父  
 も尙ほ壯に、別けて其子なる吾友は、今當代の主人とされり、其古き支族も二三家あ  
 りて、皆其地に聖別されてあるなり。

昔我久しく此地に居りにき。我田家を愛するの思想は半は此處に生れし吾母の遺傳に  
 して、半は居に氣を移せしものなり。當時我は此村を桃花源と呼び、其家を五柳の居と  
 稱へたり。蓋し其山巒の秀麗なる、其泉流の清冽なる、其境界の隱逸なる、其居民の  
 淳樸にして篤實ある、既に浮世の枝に非ざるのみか、吾祖母の愛の手多くの孫の頭に  
 分たれし裡にも、我は殆ど一身之に當れる思を爲し、善人なる伯父の徳は、一年間の  
 客寓の間、一日の如く我を容れ、吾友は我に懐づき、村民は咸來の少賓として敬愛し  
 たればなり。去れば愛の夢の爲に。一時忘れし此の極樂の訪問は、今宮野より歸り  
 て吾母を見れば、一日も遅々すると能はざりき。其日若し餘れる夕陽もありしならば、  
 更に明朝を待たざりしものを、生憎にも日は暮れ居たり。

翌朝未明、我は吾母に従ひ慣れし近處の僮を伴れて啓行したり。茫々たる曉色に、晨  
 露幾處の村落を圍み、日出て烟の立つ頃に、大佛山の麓を繞る白流を認めたり。此の大  
 佛川の源甚だ遠くして五線あり、皆吾行方なる佐田より落ち、流れの美觀は隠れもな  
 し。清岩寺の鐘の響に、忽焉として朝暉開け、歩々流に近けば、浙々として瀨を往く水

の、宛然たる舊知の音を歌ふを聞きたり。

猶有仙流在、山村未鎖門、扁舟落花渡、橫棹訪桃源。

山路は高峰と回溪の間の棧道に入りぬ。時維れ秋は猶ほ淺く黃落の期まだ近からねば、綠葉は露に滴たりき。河身は霧に隠されて、溪聲は他の世界より來たるが如く、嵯峨たる絶壁面前に高ければ、山上の出口を認るとも遅かりき。自然の景象愈深くして愈奇なり、百蠻水を束ぬれば、水は其根脚を斷ちて駛せ、溪に躓く石あれば、泡は嘯み且つ圍みて下り、石巖々として流れを歇むれば、一寫千里の波も淵と爲りて少時は定まり、圓きは甕の口に似て、曲れるは弓張月の如し。或ものは蓮華の如く開き、或ものは春の栢の葉に似て伸ひ、孰れの淵も澄み湛へ、夕烟林を罩ひて黛きか如く、積翠空に憑る如く、天蓋の飾せるに似たり。縹緗紆餘せる一線路は、宛然たる木曾の棧道武夷の九曲の如く、過くる旅客は蜘蛛の網を縁るか如く、童子が亂絲を緒つる如く、坂を上り坂を下り、溪に背き溪に向き、一天地を卷きて他の天地を叙べたり。路盡くれば源流も亦窮まり、忽焉として峰旋れば路開けて潭聲聞へぬ。其間大巖巨角は、參差として

石の世界を組織し、立ち、坐り、顧みつゝ、跪きつゝ、或は其友と相呼ひ起き、或は其敵と相背きて軋り、夫婦は懷抱し、親子は接吻し、兄弟は相馴れ、主従は高底せり、其高古あるものは此世界の帝者の如く瞻回し、中者は公卿百官の如く、他の累々者は其臣民として偃せり、月日と滄沫其上を犯せば、不滅の石も亦太古の苔の衣は老いぬ。其前庭には密樹、修竹、青々として山に登り風に靡き、搖々として翠羽を曳きたり。

路に當る土橋を経て、山は緩く水は舒ひたり。群がる村女は淺水の邊に立ちて高根を擣ち、古風の擣歌は前代の遺音の如く聞へつゝ、桃源村も早や近かきを覺へたり。山稍平夷なる處に一樹の蔭の休憩場ありき。我は首府の徒行に於て、時に車夫と遲速を争ひしかば、今二里の山路に靴を馳せて、未だ疲勞を感じざりしも、今此處に休みて主人なる老嫗と語るも、故郷の快樂の一興ならんと、さては且らく留まりぬ。

「祖母よ如何に涼しき家ならずや」と云ふ我に祖母は答へり、孰れの旅客も然か宣ふ、去れど此處に明々暮す身には、今日も甚暑と存するなり」と。猶ほ孰れにも問ふ如く、何處より何處に往きませす旅なるや、何時頃に出立しませしやと我にも問ひたり。渠は吾答

を得て顔より足まで我を伺ひし後、再び曰く「貴客は奥家に往き玉ふならずや」と、我は此老匹婦が都人を相する慧眼に驚きぬ、曰く「然り祖母よ、去れど如何にして其を知れるや」。老母は曰く「貴客の下向は此處を過ぐる旅人の噂なれば、又貴客の従者は常に母堂氏の従者なれば」。

我は今渠の健康を祝し、拾ふに似たる此地多少の舊知に關して二三を問ひ、満足せし後再び歩みたり。此より北方愈上りて愈奇なる自然の裡に、廻溪を過ぎ、遠林を穿ち、險峯を攀ち、深壑を俯し、村閭なる獨木橋を過ぎて、晝猶ほ冥き洞道に入れり、五十歩を過ぐると思ふ頃、豁然として路開くれば、眼中の烟村、是れ我武陵桃源なる佐田村、吾母の故郷なりける、久しく浴ひし大佛の源流も此處に分れて、五線宛から掌を啓くが如くなり。第一の藪溪は、最も大にして拇指の如く、其次は替婦、曰く田代、鵜溪、最後には郷の浦、其大相若く流なり、東北の遙けき空に聳ゆる諸峯は、岫峰蹊蹠、追ひ重りつゝ、其裡に疊まりて一際勝れし幽谷の景色を、旅客は必ず想像に盡く。嗚呼もし遊覽の暇給りて其を窮め得ば、吾勝遊は是より初まるべし。

落々たる寒村落、黠々たる茅屋舎、依稀として人影少に、蕭條として煙火疎なり。短く長き石逕を経て、奥の家に入りしまては、我に對する行人の佇立、戸内の耳語、窓角よりの窺き、童兒の追隨、到る處に見えしなり。

吾歸省亦既に此家にも傳へられてありき。然れども祖母は吾入來の爲に其洗濯の谷より呼ばれて、我を見し時隨喜の涙をぞ浮へぬ。彼れは今曲かりし腰を打ち伸へつゝ。

「扱ても能くこそ歸りたれ、能くも故郷を忘れずして……三年も四年も一向に歸省せざれば、今頃は故郷をも忘れつらんと思ひしなり、東京に在りて……六年とよ……能くも目出度歸りたり。我も命あればこそ卿の顔をも見たるぞや、此の春の紀元節會に、御上より褒美を戴く老の身、最早や我世も長からねば、復とは逢ふこと能はざるべし、願ふは日長く滞留してよ」。

慈愛の祖母よ、涙に涙を報ゆる外我には何等の言葉もなかりし、迷流して故郷を忘るる識者生活を説き、吾上京を止めたりしは、まこと此の祖母なりしなり。あゝ有がたき吾神よ、爾は祖母を老いて益壯ならしめ、我をも其面前に遣り玉へり。

「如何許達者に在すことよ、去り乍ら最早や浮世を肩より卸して、氣樂に身を休めらるべし、猶ほ何時までか働き賜ふ。」

「何の働くと云ふとやあるべき、昔の僻の老いてもやまで、家内の邪魔を爲すばかり、ど今は午餉の時となり、伯父も歸り、従弟も亦其花嫁も、顔色依然たる此家の僕等も、一同に山より歸り來りしなり。花嫁は其素顔の都人に見られましどて頻りに隠れ潜むむ様なりしが、沐浴し更衣したる後出て來りき。里の童兒の好奇心は、何時の間にか相呼び傳へて宅前に群れ來り、其兄妹の舊友を異人の如く眺めたり、遠く吠ゆる路頭の犬、後ろに下す山風門、頭を下る湖流、我を繞りて盡く故音を發せり。語る我が言葉の端に、祖母は唯驚愕を答へつゝ、始終吾顔を打ち守りしあり。」

我は今家族の初對面を経たれば、直ちに此裡の天然を見んとて出て往きぬ。此の屋後は豐後の英彦の高峰に連る大山脈の第一峰にして、是より嵯峨幾層あるを知らず。門頭の湖流は五線の一なる鵜谿あり。我は此谿より歩き初めて、午前に經過せし天地より、一層、深黒、幽邃、蕭條なる穹谷を踏み前年にも尋ね得ざりし喬木、僵樹、密枝、

大葉の間を過ぎ、低迷、往復、隱見したる山路を繰廻し、他の四指の源線を窮めて、自然の妙、景色の美、實に此の山中に極まることを悟りしなり。到處の水、或は絶壁に懸りて立ち、或は竹樹の間に臥して流れ、或は深潭に坐して湛へ、或は低く瀨を走り、洄りて且流れ、別れては亦委流に合ひ、急きたる後には暫らく緩めり。蓋し水を移すものは石、石を變ずるものは水、誰か云ふ流水に情なく巖石に命なしと。波上の白泡は岩石の實、石頭の碧苔は流水の花、如何に水石の契久しき。山中の寂寞なる、其聲や唯禽獸草木の音、其象や唯茂林の積翠、虚空の色のみ、然して此の深き谷間にも、猶ほ我が外に來る人あり、薪を負ふて時に往還する、最と幽邃ある此峽底の風情よ、山高く水長き、天地最と悠久ある此の山中の景色よ、願くば魚に生れて此の裡の主人とならむ。

老子曰く、常に無欲にして其妙を觀、有欲にして其微を觀ると。我今水に於て此語の至理を解き得たり。蓋し水の靜かに江湖に湛へ、無動、無色、無聲の儘にあるに當りては、正に本來真如の面目、所謂ゆる無欲にして其妙を觀るの時なり。忽焉として溪門

を下り、一瀉千里、混々として晝夜に注ぎ、甍圓き處に旋り、岩石高き所に折れ、瀨を上ぼり瀨を過ぎ、淵に落ちて淵を下り、石を懷き石を棄て、變幻百態して流れ往くものは水の至動なり。其瀨を下る時に皓如として白羽より白く、麗乎として白雪よりも白く、洒然として白玉よりも白く、赫焉として直ちに白日の白きに擬し。其淵に湛ふる時には、空彩を翡翠に寫し、峰影を屏風に疊み、春花、秋葉、落日紅を流に留むるは水の色なり。甍に鳴り岩に叫び、波に咽ひ、流に嘯り、遠く管なき笛を吹き、近く絃なき琴を弾じ、宛も谷神終夜に躍りて清越の音滿溪に戰き、天女終日歌ひて波上に珠沫を散するものは、正に是れ水の聲なり。蓋し無心の水にして、活如し來れば至動、至色、至聲を發し、動けば緩急の時を得、色には濃淡の影を得、聲の高下も亦相宜しきものは、欲ありて其微を観るの時なり。妙活きて微となり、微藏まりて妙に歸し、何等の痕迹をも留めざるものは、抑も亦如何ある至理ぞ。是理因より悟り難からず、然れども試に之を人事に求めよ。孔子曰く「喜怒哀樂未だ發せざるを中と謂ひ、發して其節に當るを和と謂ふ」と。然れ共澆季今日の世、中に復る既に難し、况んや和に當

るをや。其涙は濁り其笑は苦く、其容は曇り其語も亦澀む、泣かて濟む所に泣き、笑ひ要せぬ時に笑ひ、叱るべきより聲高く叱り、喜ぶべきより意長く喜ぶ、此人間の様より轉じ、暫時來りて無心の水を觀る、我亦心を改めざるを得ず。

我日の夕に歸り來れり。其過來し方を顧れば、早や隴ろげに暮烟は曳きたり。百峰の間に疊まる里あれば、宛然盆の底の如く、縁高くして底低く、奥家の向ひは青く平たき壠畝にして、猶ほ其向ひなる村路に傍ひて、參差たる茅屋斷ち又續けり。門前の澗流は濺き去りて此等の屋後より相分れたり。此分派の衝端に最と新らしき藁家あり、而脊水流に迷ひ、樹木の裡に隱見しつゝ、如何許涼しき觀よ。曰ふ是れ奥家の舊支の分家ありと、猶ほ其左右を眺むれば、孤屋は淋しき山腰に粘し、兩簷は溪流に臨み、三四軒は獨木橋を隔て、七簷八家は長き畔路を夾みつゝ、此處彼處に散在したり。到處の溪流に飲みて、家より低き小屋の窓に、家毎に唐碓架れり。宛然たる歸去來の山中、隣家遠きが故に淋しきならで、住居稀なるが故に緩くりたるあり、村民寡きが故に静けきからで、競争あきが故に穩あるなり。光り輝く白壁なきも、足るとを知る里は、皆自ら

富める觀あり、形を勞するか爲め壽命長く、心を役せざるが爲めに日月長とこしなへなり。童子の心は質朴にして、少年の言葉は明白なり。乙女の愛情は深濃にして、老人の胸宇は故朗なり。義理、人情、道德、宗教、都會に賤み掃かれし心理は、皆來りて茲に隠れぬ。一夜の宿にも情を享くる、此村を過ぐる旅人を幸ある。

今炊烟は茅茨を蒸し、山路の樵夫は落暉を枯薪を負ひ還り、溪下の牧童は地を捲く暮色を曳き來れり。見ずや村落晚景の生物は、恰も天上の星斗の如く、眺むる程に其數殖ゆるを。何れを牛馬と分たねど、人影前に引くは馬、後より驅るは牛あり。幾世傳ふる野歌を歌ひ、百歲期すべき顔色を笑まし、遙に屋上の烟を眺めつゝ、何れの途にも農夫は歸れり。戸々の前庭、或は明日の天氣を卜する翁佇立し、或は歸る父老を待つ童遊べり。是れ此夕ぞ、陶淵明は田園に歸り。李愿は盤谷に入り、王維は綢川の幽居に退きつらん、嗚呼此夕に、我も他界の我の如く、悠々俯仰して此景色と冥合したり、頓て此の闇幕の裡に、歸るを告ぐる犬の聲、廐を窺く馬の嘶、牧草臭ふ牛の鳴音、水を吸み去る山女の足音、遠くに繰る雨戸の響の、最も床しく聞ゆる間に、我も亦夕餉に

呼はれて家に歸りぬ。坐敷の襖に昔讀みたる、「山路日暮、滿耳樵歌牧笛聲」の古文字は、今猶ほ讀まれて残りぬ、

嗚呼浮雲よ流水よ、吾行方も亦常なし。前週の日曜日には十九世紀の花の都に在り、後週の日曜日には、島の果なる山中に客たる、是れ將た如何の變化そや。洛陽の巷を飛び去り、葛天氏の民に還へる、其間一句を出てず、吾形迹の定めなき、浮萍ウヅクミと孰れ果なき。首府に於て別れを告げし友少あからねど、今我此の太古の村にあり、原始の時に遠からぬ、アダム、イブの遺風の觀るべき故老と共に、爐火、行燈の下に飲食せることを夢想するものは誰そ。聞く陶淵明が歸去來かきりく時、滿天下之を知るものは唯淵明と其家族のみと。祖母は親愛なる笑顔を點して、

「此山中に着なき事卿は能く知れば、別に調ゆる所もなし、何なりと唯吾満足を味ひてよよし」。

誇るには足らざれ共、千歳の學問を修め、一世の智識を貯へ、出て當世の名流に交はり、入りては古代の賢者に遇ひつゝ、身を智識の戰場に置き、畢生名なくば止まずと期し



たる吾意氣も、懐かしき祖母の前には、依然たる孫にてあるなり。吾心に適へんとて老を忘れて立ち働らき、吾強食に満足を感じる慈愛の祖母に對しては、我は唯其掌中の珠に返れり。

山高ければ十七夜の月の出つるも遅かりき。然れども我晩食を了へて、門頭の溪流に架したる納涼架に出てし時は、早や圓月は兩峰の間に三竿まで昇れり。眼前の青田、微茫として空翠の如し、仰て天を望めば、一輪の秋の外目に落つるものもあらで、穗末に置ける露の玉は、熒々として星を地に貫き、其間亦行人の疎影も觀へたり。既にして月天心に來り、原の霧も亦晴れ亘れば、万象は形を藏め得ず、透明躰は光を燈し、充實躰は影を落したるは、邵康節が清夜吟を歌ひしも斯の如き夜とぞ思はれぬ。

月到<sub>二</sub>天心<sub>一</sub>處、風來<sub>二</sub>水面<sub>一</sub>時、一般清涼意、料得少<sub>二</sub>人知<sub>一</sub>。

日の間は村の喘<sub>あへぎ</sub>と空の搖きに鎖されたりし唐碓の音は、今手に取る如く聞へたり。其の痴鈍なからも合奏し、粗放ながらも床しき響の、宛から疲牛の歩みに似たるは、實に此の太古の村の音樂に適ひて、長閑なる里の休眠を靜かに囃せり。聞くほどに渠に

猶ほ他の音あり、其舟に水の溜まれる太と緩き低き音なり、猶ほ他の聲あり。其の舟より落つる水の太と急き強く弾く聲なり。猶ほ他に響あり、舟下り脚の上る拍子には長く、舟上り脚下る折に鋭く響く軌<sub>キキ</sub>々是れなり。

夕暮まで四山を震ひ大木を動かしたる谷風も、今は無聲空壑に藏まりて、溪往く水のみ消々として鳴り射々<sub>せきく</sub>として濺けり。日中の熱にまた鎖ぢあへぬ遠家の戸より、男女の罪なき笑聲は傳はり、奥山に端なく響き、宛も寝後れたる獸の叫ひと思しき<sub>したま</sub>、一聲二聲月下に落ちたり。我は今寢んとして、此景色を目に捲く折に、正面なる都屋山瀑布の想像の聲、忽然耳に活きて忽然消へたり、

一頭を枕に寓せ、六身を褥に委ね、我早や我を支へず、夜靜に意藏まる其時、善をも思はず惡をも思はず、正に是れ本來の面目と云はんも善し。喜怒哀樂の發せざる中と云はんも亦善し。我は正悟す、太初に吹注かれたる吾靈魂は至聖至妙にして神と連鎖してあることを。微<sub>かす</sub>かに痴き唐碓の響に、吾躰は悠然として眠る其時、靈魂は戶外に忍ひぬ、天上の月を採らん爲に、地上の星を拾はん爲に、清き流を嘗めん爲に、圓かの

夢を捉えん爲に。

翌日我は新家の家族より呼ばれたり、抑も此裡に於て、家醸の村酒は靈液と呼ばれ、山雞、菜根の雜煮及び古素麵は山肴と稱せられ、葛粉團子と山芋汁は、其名既に山村美食家の垂涎を曳きぬ。今家族は料理の爲めに盡日勞せり、器具借る爲め奥家に來りし女中に聞けば、朝來主人は山芋を掘る爲に山圃に往き、主婦は清水汲きんと溪路に下り、阿娘は葛粉を圓め、阿童は雞羽を抜く爲に多忙に、一家混雜の裡にありしと、さては吾饗應のため、此靜かなる山村をも動きしなり。

我奥の家族と共に新家に至りし頃は、日は猶ほ山上にありしも、叔父ある吾母の弟及び其妻、此家の分家の主人等も、今日は農事を早く終へて、先づ饗應の坐に在りき。吾影の見ゆるや否、一家の歡迎諸客の祝辭等、暫時は言語の波立ちつゝ、衆賓の坐定まるまで互讓の爲に時移りぬ。吾は推されて正坐に進み、吾右には奥の伯父、叔父、此家よりの分家の主人、吾左りには吾友なる奥の少主人、祖母、伯父の妻、叔父の妻、分家の主人の妻、及び吾友の妻等、男性女性相對坐せり。此家の主人を初め、其妻娘

等は修飾美しく行儀正しく、半日の勞力を此坐に運ひぬ。

早や半時間餘立たるも、會話は唯冒頭より冒頭に移り、一個の東京疑問は他の東京疑問に打消されつゝ、諸人の心全く解けず、何となく圭角ありと覺へられたり。我謂へらく、是れ我が田家人たるの足らざる故に、渠等未だ心の戸を開かずと、去れば折々吃る村語を混せつゝ、

「都の生活は父老が羨まるゝ如く快樂ならず、父老よ、我も亦一たび各位の如く思ひたり、然れども今にして都人を知る、宛も外飾り内朽れる墓の如きを。渠等の顔は朝夕に磨かれ、渠等の衣服は春秋に更へられ、其頭は帽子に高まり、其目は眼鏡に突出て、其齡は杖によりて若くなれども、唯其外觀然るのみ、其實は苦煩を隠す爲めの笑顔、冷情を掩ふ爲めの涕涙のみ。歎息、心配、恐怖、失望、及び陰謀、殘酷等陰府の毒に、肉も銷れ骨も解けぬ。問へ何故に爾かあるかを、虚空の名譽に馳せ、不義の富貴を追へばなり。其快樂は唯旅人を欺き遊女を漁し、他の不運より我好運を作るにあるのみ。塵より出て、塵を蒙り、又塵に返らんと急きつゝ、自ら智慧ありと思へる一種の動物と云

はん外、都人とは抑も何人ぞ。我嘗て此村を田舎と思ひたるも、今は只平和の地、慈愛の里、長壽の世と稱賛するなり。

斯く語る言葉の裡に、我は一座の顔怕かおをひの漸く消へゆくを認めしが、頓て吾言の了る時に、笑の影は凡ての眉目に上ぼりぬ。主人は盃を我に献して、

「卿の如く話さるれば、誰が分らぬと云ふとなく、艸深き吾等の耳にも、仲間の話の如くに聞ゆ」と。

祖母は始終吾言を聞きてありしが、一座に向ひつゝ、「都に居りしと誇りもせず、………學問ある丈け分りてある」と、猶ほ我に向ひつゝ、「去り乍ら左程難儀の場所ならば、卿も年老いば故郷に歸られよ」と。

我は此の情餘なまけれる一言に撃たれたれど、事皆定まれる運命なるべきとを叙へて祖母に答へ、會話の連鎖を一座に與へぬ。主人は其手の勞力の好く味はるを喜ぶが如く、一座も亦酒氣に由りて心開け、數年前の本願寺參詣、及び伊勢參宮の物語を以て互に饗せり、或ものは蒸氣船を以て龍宮の浮べる如きと、世の開けて海も亦聞きし程怖おそから

ざると、或るものは大坂、京都の家屋櫛比し、人行の騷擾なると、或ものは田舎の訛音の解し兼ねて、旅館の女中履買物を違へしと等を述べ、過去の苦しき追懷を以て、各々現時の快樂を取れり。渠等は猶ほ當村に於ける祭禮、誕生、縁談等も關する諸々の珍事を語り出て、全村を繞れる話頭は、轉た座興を佑けたれば、歡を盡して散ぜし頃は、夜深く月落ち、艸樹も眠る頃にてありき。

其翌朝我は又溪の中岐ある分家の主人に呼ばれたり。渠は我に來り請ふて曰く、三年前に新に張りし屏風あり。未だ誰が墨染をも經ざりし白地は、宛から卿を待ちしに似たり、願くは一筆を揮はれよと。我は嚮に眺めし涼しき家を喜び、躊躇せずして往きたるに、酒肉先づ吾前に陳べり。其客室の額には、水哉亭の三文字を書したり。都會に於て文字は今美術の名を失ひたるも、文明の世に詩の村落に漂留するが如く、此家の主人も亦古來の實、自家讀めざる文字を以て、屏風に得んとを好みしなり、去れば我は暫時の後一絶句を得て、大文字を左の如く書きぬ。

人在溪中屋、且言脫俗寰、不知窻下水、浮夢入人間。

主人は頻りに妙と稱し、殆ど詩を解するもの、如く稱嘆し、價なく得たる寶物なりと珍稱せり。さて又我は殆ど供養の本尊の如く、此日叔父も亦我を招けり。我は既に二日間の飲食に飽きたるも、客の辭退と主人の勸酌とは、此村の舊式なりしが故に、我も亦他の辭退の如く思はれ、殆ど帯を解く迄に強ひられたり。

嗚呼吾叔父、親愛なる吾母の弟よ。我は公言す、彼は實に目に一丁字なき人なり、此山中の代表の民なり。渠は與家の一支なるにも拘らず、又其亡父の習字師なりしにも拘らず、學齡に於ける病氣の爲に今日まで假名をも讀み得ざるなり。渠は其手の無筆なるが如く、其心にも亦智識の首石おもひしなる差別の思想を有つとなし。其生涯の中、目に見耳に聞きたる此村の歴史、習慣、生活及び日毎の珍事の如き低き智識は、宛も五十音の童子に於ける如く、少しくも其思想を高むる具とならず。其れ然り、渠は實に好奇心の第一階を有たざるが故に、我は如何なる話頭を以て初むるも、渠が心を動かす能はず。渠は一颯一笑を惜しむに非ず、一喜一憂を隠せるに非ざるも、唯吾言の渠が心の鍵を打ち得さればなり。渠は恐るゝ所もなく、憂ふる所もなく、唯莞爾として初まり、莞爾

として終りしなり。渠吾言を否定せず怪疑せず、亦質問をもせず、柔順なる耳、唯々より初まり唯々に了れり。怡々たる渠の容貌は、宛も胎内より彫られし者の如く、凡ての聲の其村と其身に懸らざる間は、我思ふ其平易なる心底と、快樂なる眉目を變ふる能はざるべし。親愛なる吾叔父よ、我は吾生涯の裡に、目に一丁字なき人の安心と快樂を吾叔父の顔に見しあり。

然れ共渠は唯識らざるのみ愚者には非ず。所謂ゆる學はされは忘るゝとなく、浮世の塵に汚れざる、天の成せる麗質を有てるか故に、事の曲直、人の善惡を判つに於て、掌を指すか如くなり。其の農業に於ては、嘗て前人未發の實利を開き。大に村民の稱讚を博し、最も有名なる悍馬を馴して、近處の壯丁の驚愕を牽きたり。其の行爲に於ては、秘密に信心するものあるか如く、恐懼、忌避、深慮、勇憤、各々其時に應せるあり。渠か前年よりの願ひは、天の恩賜として良妻を得るとにありしか、今や昔し位地ありし武家の遺孤の中より、美にして慧ある、而も貞淑なる良妻を得て相樂しめり。是に於て三千世界の寶と云ふ文字なきか爲に、渠には他の不自由もなく、簡易なる此土

の生活に、若し文字の必要もあらば、渠は忠實なる其妻の學問に頼り、妻の學問の及ばざるとは、果して渠に關係なき事なり。其道德に於ても經濟に於ても、夫婦の所思密に一致し、同心一脈の家族を爲せる此快樂なる夫婦は、唯久しく望みて未だ得ざる、繼嗣の出産を待ち居るなり。

我嘗て謂へり、エデンの生活は迦南の生活より平和に、無何有郷の民は神農虞夏の民より安穩に、無爲の世界は文明の世界より快樂なりと。今や吾叔父の境遇を観るに及びて、亦竊に無識者の生活の智識者の生活よりも幸福あることを觀したり。孔子曰く「疏食を食ひ水を飲み、脰を曲げて之に枕するも樂亦其中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と。蘇東坡も亦曰く、「人生字を知るは憂を知るの始め」と。蓋し世は字を學びて智識に入り、智識より空望に入り、空望より失望に入り、失望より不平憂愁の門戸に迷ふ。吾人若し字を知らずは學者たるの望なく、字を解かざれば知者たるの慾なかるべし。吾人誤りて智慧を以て幸福の權衡とし、智識を以て快樂の標準とせり。然れども我觀る處を以てすれば、智慧智識の探究も、亦是れ金錢の穿鑿の

如く、一個の俗情に過ぎざるあり。

神の智者ソロモン曰はずや、智慧多き處に憤激多く、智識益す時に憂怨益す。又曰く神は富、財、位を以て人に與へ、其心の慕ふ所一個も其人に欲く無からしむるも、神また其人に之を食ふを得せしめずして、他人の之を食ふ事あり。是れ空なり惡き病ありと。是れ智者と富者と異類にして同歸あるを示すものに非ずや。黄金を掘るもの巨万を得て足らず、巨万に巨万を重ねて猶ほ足らず、遂に地球を洞鑿し、他の世界に到りて満足するとも、其幸福は何處にあるや。ソロモン亦曰はずや「神を恐るゝは智慧の始あり」と、此の智慧を離れて他の智慧に走り出て、却て其智慧の爲に捉はれて迷疑の荆棘に潜るに非ずや。智慧を探るの古代に通して止まず、前代より後代に通して猶ほ止まず、太古原始より世界終季の日に亘るとも、ソロモンの榮華と智慧を以て、半百歳の經驗を以て悟る所何事ぞ。「汝往きて喜悅を以て汝の食を食ひ、快樂を以て汝の酒を飲め」。「日の下に汝が賜はれる汝の生命の空なる間、汝其愛する妻と常に喜ひて世を渡れ」と、唯此一事こそ智者も無智者も、富者も貧者も賢者も愚者も、共に享くべき

分ならずや、智者若し神を恐るゝを知らば、無智者は固より神を恐れん、智者の信仰も天の花園に生れ得ば、況して無智の渴仰をや。嗚呼世は生活し得るより餘分に得ん事を望み、滔々として迷疑に往けり。眞實「神は人を正直者に造りしに、人は衆多の計畧を案出せり」。渠等の智慧を辱かしむるものは、豈に吾叔父の無智に非すや。

看よ此の立て籠れる高峰たかねの外に、何處の天地は移り、幾處の王國は變り、好運の翼、非命の羽、建焉壞焉如何に消長循環するとも、此の夫婦は星を負ひ山に上り、星を負ひて山を下り、相笑つて飲食すると、一年宛も一日の如く、同じ時、同じ處に常に同じく見らるゝあり。日は出て日は入るも渠等の業は勞働にして、夜は暮れ夜は明けも渠等の事は休息あり、夕暖かに焼く爐火いろりびは、迷ふ旅人に路標みちしるべを與へ、朝に蒸す家の烟は、竈の乏しからざるを證しつゝ、渠等は無智者の白顔を以て、貴とき與家の支派たる尊敬を牽ゆるなり。

斯くて我は三日の時間を茲に費して後歸宅の念生じければ、翌日早朝此村と與家と其家族、別けても猶ほ二三日の滯留を切望する祖母に別れたり。渠は暇を乞ふ我を門外に送り出で、最終の離別を叙ぶる爲め、今少時しばしと我を留めぬ。

「最早や此世に相見事も今日限りあらん。去れど卿も猶ほ屢々歸省すべし、母も早や老い近ければ、後悔せぬ様孝行せよ。我には是れぞ今生の別れ、未來にて相逢ふまで、随分達者に出世せられよ。卿の父と諸共に、艸葉の影より喜びてん。去り乍ら如何に功名富貴なればとて、必ず故郷を忘れず、久々に相見ても束ぬ間に別るゝ、ホント浮世の墓かぶつさよ」。

絶離の詞寸鏃腸を斷らしなり。武士の奮剛健の質ある、吾祖母も今は老いぬ。然れども強ひて吾意を強めつゝ、答へり。「祖母よ心安く在せ、祖母の世に在す間、必ず今一度歸るへし。願くば唯勞働と心配を棄て、心長閑に亘らせよ」。

祖母は涙を拭きつゝ、「ヲ、卿か言ひ置く事とならば、何事も止むべければ、頼み少なき他人の中に必らず病氣と時候を厭へ。然らば此世の暇乞ひ、……………早や日も出づるに嚙今日もや熱からん。……………ア、危あやあし田家路あやの危あやさ、能く心して躓あやかぬ様……………」  
我は情に泣きつゝ、祖母の言を負ひて出てたり。遠くなるまで我れを見送る石堤の面影

は、暫時屋頭の鳥の如く佇立したり。宛から芒曳く流星の如く、我も亦村門の橋見ゆるまで、幾度か顧眄せしあり。橋上より最後の眺を回頭すれば、山の底に山は落ち、家の後に家は隠れて、都屋山より出づる朝日の影に、此美妙なる自然の畫圖は織り籠められぬ。

白日青山裡、落花流水村、留連三日夢、追<sub>レ</sub>浪下<sub>二</sub>桃源。

## 第八 追懷

誤<sub>テ</sub>背<sub>ニ</sub>先<sub>一</sub>君<sub>ノ</sub>喪<sub>一</sub>、<sub>二</sub>百年<sub>一</sub>唯<sub>レ</sub>泣<sub>レ</sub>天<sub>ニ</sub>。

鳥<sub>ノ</sub>啼<sub>一</sub>慈<sub>一</sub>夜<sub>ノ</sub>涙、<sub>二</sub>爲<sub>ニ</sub>落<sub>テ</sub>入<sub>レ</sub>黃<sub>一</sub>泉<sub>ニ</sub>。

斯くて故郷の快樂、戀愛の希望、自然の景色、漸く畫卷の捲き盡され、幻影の醒めゆく如く移る裡に、我は父の死後、吾家の境遇のいと轉變せるを認めたり。渠は其の嚴格なる家制に由りて、室内の清淨、書冊の保存、庭園の掃除等、一一其規則を把りたりしも。今は兄の代とありて、諸々の床の間に手巾の及ばぬ隈あり。古道具は往々毀れ、四五の冊子書庫を洩れて盃魚と雨風に暴露せられ、年母に剝られし松葉も蘇鉄の莖も、囚人の髪の如く伸ひて、落葉拂ひし迹も久しく銷へぬ。是等不取締の觀は、痛く我情を曇らしたるが、吾母は我を慰めて、父は家内の經濟を旨とし、兄は戶外の慈善を専らとす。且つ前代の家より後代の家になるまでは、必ず沈落の日あることを語りぬ。吾意猶ほ釋然たらざりき、何となれば吾陰氣は家内の沈落の爲ならずして、吾父の追懷にあればあり。吾父は去年にそ逝きぬ。死者もし生者の追念より消ゆるともあらば、

此世は如何許憂なからめ。生憎にも寂寞たる吾母の顔、端なく祖父を尋ねる孫女の口、昔を忍ぶ父老の語に、吾父の面影活如し來り、生前に愛てられたる器具、養はれたる園樹、散歩の道なりし青柳茂る河塘、夏日禾田を巡視したる涼しき樹陰に於て、渠は猶ほ生けるか如く、其慈愛なる音容、到る處に追隨せしなり。

或日我吾少弟を伴つて郊外に散歩せしが、時は早や薄暮に近く、遠山に落暉を餘し、樵夫は遙かに歸路を急ぎ、野流の裳は遠く闇み、前に連なる稻の青畑は、此晴夕を陰氣からしめたり。此淋しき景色の裡に、我は唯無言に歩けり。吾幼弟も吾愁色の爲に黙しつ、唯落日のみ轉た春きぬ。抑も兒童に逢ふ毎に、唱歌を聽きて其童心を察るは、吾習慣なりければ、今日も務めて吾意を強め、唱歌を誦せんとを幼弟に求めたり。彼は平生の怯避にも似ず、吾首唱の下に「君が代」と「來子供」とを歌へり。猶ほ一曲を強ひければ、渠は歌ひぬ左の如く。

父こそは、歸りましたれ營の、暇あき身も朝あけに、  
我を愛ます畏こくも、慈しみます其朝あけに、

其父如何にと我問へば。さなきだに歌の尾に涙もちたる歌者は、今は溢れて叫び出でたり。其慰藉なき絶望の悲歎は、嘗て父の臨終の夕に哭せし聲と思へば、泣くまじと忍びし我も、天を仰ぎて落涙しぬ。弟は兄に身を投げ、兄は弟の頭を抱きつゝ、此世界に唯兄一個弟一個の如くに覺へしあり。

頓て八月十六日の夜となりぬ。我は前川の納涼に身を冷し、更闌けて退きぬ。是は我が舊時の讀書室にして、吾父は此室に於て、去年の今夜正午より二時間過ぎて眠りしと云へり。臙ろに白き圓行燈は遠く此室の四隅を闇めぬ。我は廣き蚊帳の中に、一身徒然に寝んと更衣すれば、眠けなる影法師は蚊帳の向ふの方に動けり。戸の外は懐きほど静にして、唯天井に殖へたる鼠の族の、物に驚きて通ゆく聲のみ、恐ろしくも礎に響きつゝ、異象を誘ふ心に事ありけなる此夜半に、不思議にも去年の今夜夢みし夢の後段を夢みぬ。

郭北の門より百武を歩みし青邸は、吾村落の菩提所なり。今日は八月十七日、吾歸省の目的の日、吾父一年後の命日なりければ、吾母諸共此處に詣てぬ。百畝の平地を圍



む林樹は、奥妙として凄陰を布き、此處に窺しこむ日影は、春日も秋日の如く、朝日も夕日の如く、况て悲しき秋の夕は、昨夜の行燈の闇光よりも、微白くして陰氣なりき。邱頃より樹梢を亘る風は地に下りさるも、太古より墓場を纏へる空氣は、冬の日よりも静けく冷へたり。今日は猶ほ孟蘭盆會の生靈送る夕に近ければ、孰れの墓場も幾分清淨の觀はありしも、墓前に捧けし女郎花、盆花、桔梗等、嘗て此死蔭の國を裝ひし花も萎みつ仆れて、一際陰懷の氣を加へたり。累々として立ち列びたる古墓は、誰や先誰や後なる。月日の久邇は異なるも、同じく一杯の土に歸しては、唯人世の無常をぞ告ぐある。

吾父は今此門頭に當れる新墓とありぬ。紅字に彫られし「釋善邦」なる三文字の、活如として我を眺めし有様、抑も如何許善き名なるかも。我は吾文字の斯許生きて彫られんとは想はざりき。渠は此世に其迷兒を見残したるも、今は其手跡の下に晏然として眠れり。さるにても眺むる間に、無明、無動、無聲の觀は、林中より暗羽を擴げて吾父の墓をも掩たり。吾母は携へたる蓮華を我に授けて曰く、「卿親しく此花を捧げよ、

父は終りまで卿を呼びたれば」と。我無言の涙を以て享け、懇懇に墓前に奉じて、爲に前溪の流を汲みたり。

- 一 あらたにむすぶ小柴垣、  
是ぞ世になき父があと。  
後にしげるはこやなぎ、  
常世にまもる夜見の宿。
- 二 さひしくしほむ花かむり、  
環に暮るゝ日ぞのこる。  
今朝焼きそめし香の烟、  
夕しつかに立ちのぼる。
- 三 父が植へたる小川より  
採りてさゝぐる蓮華、  
愛たき色どその馨、  
永く留むべき水もかな。
- 四 旅に六年をすきこして  
歸れば、父の聲も名も、  
昔語ど早やなりて、  
石を此世のしるしかも。

父子相逢はざるの怨の爲に、母も悲しく袖しぼりぬ。冥目して墓頭に座すれば、見慣れたる寫眞の顔は記憶の鏡に浮びつゝ。慈愛より慈愛に高まり、宛も過ぎゆく影移らふ花の如く。留めあへぬ間に捲かれたんぬ。斯くて宇宙の我より消しか、我宇宙より

没せしか自ら知らざる如くなり、天は烟の如く散り、地は落葉の如く飛びゆき、夕日は終り木枯風は遙かに過ぎ。吾心は蠟燭の如く融け、身は焼かれし線香の如く灰立し、手邊の墓の如く枯着しつゝ、茫然として眠りに落ちにき。「日も暮るればイザ玉へ」と呼ぶ、母の聲に覺されて、遅々たる心牽かるゝ牛の如く、歸る力もあらざりき。

我謂へらく父は吾家中興の祖、宜しく記念碑を受くべき人なり。吾兄の富亦一石碑を立つるに難からずと、之を以て母に問ひしに母は答へて、兄も亦然か計畫せしも、古來石碑なき此墓場に俑を作るは宜しからず。且つ此無益のものゝ爲に、生前友あり敵ある父をして、徒に敵の怨を益し、友の嫉すら惹しむべからざるを説きて止みぬる旨を告げ、且つ曰く、「父の墓の奢らざる代りに、兄は他の祭主久しく絶へし荒塋を、親ら費して叢墓よせばかとなせり。即ち此の大石碑は其なり。子の慈悲善行こそ親の爲め。無上の記念碑」。

母の先見、兄の慈善、未だ今日の如く我を安堵せしとはなかりき。吾家は今貧しき親戚に繋りあるも、吾菩提所の容易く他の慈悲の叢墓よせばかとならざる所以、今に到りて満つべき歎。遽に響く鐘の聲、邱上邱下に打ち傳へ、鳥は隠れし時より一二鳴を相唱へつゝ、讀經の音は清風の如く、此夕暮に穢土よせばかを掃きつゝ、頓て蒼然たる暮色は路頭に立ち迷ひたり。

吾等が家に歸りし頃は早や點燈の後にして、一週忌の弔客、父の友、近處の父老、親戚等は、數の如く集りぬ。渠等は皆式の如く飲み食ひ、去るものは去り、残るものゝみ相残り、他の會話場を開きたり。孰れの話頭も此日に應じて沈到に、孰れの心底も亦此夜の如く鬱陶なりき。嚮に好く燈されし釣燈フックも一個に減されて、此の小さき世界の夕暮は來れり。朧ろに曳かれし人影は、壁遠きほど聞く大きく薄らきゆきたり。客は折々盃より飲みしも、間には涙を拭くものありき。吾父の晩生涯は、二年以前家兄よりの手紙にて略ほ知りぬ。曰く隠居たる父の快濶なるは、主人たりし父の嚴急かりしに似す。曰く其嗜める酒量は減したるも、下物常に一種にして足らざりし。曰く放快斯の如くにして年老いし甲斐もありと、近處の敬愛加はりぬと。然して其他の細目別けて其逝前の生活に於て知る事少かりしか、今や一坐の應答に由りて、隈なく我に告げ

られたり。

蓋し我父は一生の全力を少年の時に盡して、半世に一家を起したるか故に、十年老いて見えしも是非あかりき。且つ其嫡子なる家兄の己に肖さりしとを、痛く心配せし故に其退隱即日陶然として衰へしも、亦必然の理ありき。是より後父は俗界の人ならて一心宛から清風朗月の如く、唯快樂に飲み喜悅に食ひつゝ、其口よりの言葉は皆笑焉のみなりしとよ。嘗て園碁の友の訃音に接せし時の如き、大に絶倒して悲哀の使者を一驚せしめたりき。門前に魚賣聲を聞し時は、籃諸共に買ひ盡し、家人の驚愕を見て亦啞然として大笑を發し、唯云ふ、「渠買ふべく願へば」と。故に魚商等は吾家を以て生活の樹とし、相呼び傳へて日毎に來れり。家兄は竊に渠等に許すに、其不在の時は分量を定めて來るを以てせり。兄は亦父の短かるべき餘生を遺憾なからしめん爲に。門前を過くる村人にして、父の齡に近きものを請して、父が當坐の客たらしめたり。蓋し父の友は父の爲に來り、兄の孝道知るものは兄の爲に來りしあり。其の友の家を訪ふ時は、招かるゝにも招かれざるにも、或は一日にして還り、或は半日にして還り、

又往きて直ちに歸る時もあり。謂ゆる興に乗じて往き、興盡きて還れるとにありき。近處の父老、爲に稱して童化仙者と稱へしとぞ。

斯かる是非なき遊夢の裡にも、漸く掩ひ來る死の蔭見へければ、兄は其前一年に於て、佐田、宮野を初め、親戚知己の許に父を負ひ、暗に遺憾なき訣別を了へしめ、且つ其の最も好める演劇に別るゝ爲め、家兄と宮野の少兄と、十里遙かある博多にまで父を負ひ往き、其次に寫眞師に詣り、今日吾掌に存せる肖像をすら採りしなり。嗚呼父の生前、我は唯吾二兄の孝道に頼りしのみ、遙けき土地に何をも知らず日を過ぎしなり。遂に其翌年の夏、父は暑氣に中りて病みたり。是より先き父が隱居の室は定まり居りしも、童化したる心には、餘りに徒然なりしが爲めに、渠は猶ほ主人の坐に起居したり。或る太ど熱き日の夕、父は常の如く酒杯を取りて口に接けしが、美からしとて他の旨酒を求めれば、兄は其盃を取りて嘗、少しも異味あるを覺へさりしも、言はるゝ如く最高の酒を求めたり。父は再び嘗めたるも、盃を手より棄てつゝ、「是も亦美からず、今夕は酒欲しからず」と低語せし時、一坐初めて大事の來るに驚きしなり。斯て家兄は「然

らば父よ奥室に於て改め飲まん」と、母に請て父を奥室に扶け入れ、撒水管を取りて庭に下り、樹木に灌ぐと童見の如くし、自ら絶笑して曰く、「父よ如何許面白からずや」。父は其を見又他を視、徐ろに答て曰く、「毫も面白きとあし、吾子よ休め、往きて卿の食事を取れ、努ゆめむ家業を怠りそ」と、此世に在りしは五十七年、其子を愛でしは三十二年、日は落つる時に正脈を顯はし、火は消ゆる時に燈心を現し、人の死なんとする其言や善し。今此世と其子を棄る時に、笑に狂する父とても、如何で一度本心に還らざらんや。是れより後父は一變して涙の人となり、今日の對家むかひの老父の如く、言語みな泣くばかりなりき。別て我を聞き、吾音信を得るときに咽なみひしと。我下總に在るの秋、家兄は我に書きて父の病を告げ、且つ輕症なれば憂ふるに足らずと言ひ贈りぬ。其書中に云へり、若し暑氣引ともならば歸省すへしと。讀過して謂へらく、父若し暑氣の退くと共に逝く事もあらばと。再讀して轉た心動きたれば、是を以て此地の友に示したるに、我か爲に説きて云ふ、避暑の日來らば、他行せずして歸省すへしと是のみ、別に疑義あるとなしと。實に然り、我如何かれは斯る迷疑を生せしやとて相共に一笑せし

とかりき。然して當年我に暑引かかりし故に、歸省し得ざる旨を家兄に返事せしなり。嗚呼此間故郷に於て、父は一たび臥して復起たす、吾名を呼ひて臨終に至り、坐客は事の哀れなるに面を背け、母は父子相違ふの不幸を歎き、兄は唯爲す所を知らざりしとよ。去れど此世の念去り、天國の光見へし時、父は安然に、満足に、宛から無心の童子の如く、豊かに眠りに入りしとよ。

父の生涯は斯くして終へぬ、一座悲しく黙しつゝ、此の涙の室に於て涙あき人はなかりき。暫時して兄は曰へり、「父の怨卿の哀、是れ皆吾落度にして今更申譯もなし。去り乍ら我徒らに卿に怠りしに非ざりき。我は當郷の甚六父子に起りし、不思議の例を確信したり。卿も亦知る如く、夫の西南の役に、甚六は輜重に徴されて戰場に往きし後、其子已太も跡追ひ往きぬ。田原坂落城の夕、已太忽然として歸思を生じ、暇を乞ひて徹夜に急ぎ、歸り來りて其家に父の訃音に遇ひしは亦卿の知る所。故に骨肉相別れて死する時は、死者の不思議必ず存者の身に顯はるゝを信じたり。今は吾意到らずして、家庭の憂を貽せしと遺憾至極」と。我曰く「吾兄、固より定まれる運のみ、今更何ぞ心を痛め

ん。聞き給へ我も不思議を語るべし」と。今や一座の自我に向ひて怪しみ待てり。我曰く「當時我は何故なりしや知らざれども、自ら訝るほど涙脆くありし。天の色、地の聲、日中の喘き、夜間の休みも、皆我が爲に默思すべき一大問題となり來りぬ。別けて夜の夢は晝猶ほ幻影を浮へ。鳥啼の一聲すらも世界の變故を告る如くに聞へしあり。去年の昨夜は、吾寓居も太と淋しき夜にて、我は何事にも慵もどて宵より寝ねたり。然れども夜間の殘熱、默思の頭腦、煩悶の爲に、睡りもせず覺もせず只管轉輾反側したり。我は殆ど自ら茫じ、起ちて窓押して夜の空を怨じたるに。今入る月の僅かに残れる景色、宛然たる舊時の看に、客地にあるを忘れつゝ、轉た暗愁の淵に沈み。」故郷も今頃月は落つる哉」と口吟しつゝ、何となく落膽の思に嘆息せしなり、漸くに眠に就き、匪賊夜忍ひて父の掌上より吾長妹を奪ひ去りしと見れば、此は是れ一場の夢なりしかども、覺め來りて實事の如く、心動きて止まず、翌朝我を愛したる其家の老母に語りければ、老母も亦事變の豫言なるべしとて、故郷に書くべく勧め、遂に公然夢物語を端書と爲して、耻じざる次第となりしあり」。

兄は我を遮りて曰く、「さて其書狀よ、父は早や柩に在り、親戚相圍みて歎きし時に、其の書狀の着きければ、さてこそ「卿歸れり」と、讀みもせて柩の前に捧げつゝ、涙に巾を濕したり」。

今は當時の悲哀の復活せし如く、一坐の客或は咽ひ或は面を背け、或ものは黙して死せるが如くなりき。我は繼ぎぬ。

「十七日の夜は一際隱氣勝りき。家の老母は徒然に堪へずとて我を其坐に請じ、少母も亦相集ひしあり。夜は早くも九時とあり、老主人は眠り少主人も寝ね、多くの女中も亦各其夜綯の室にて假睡し初め、唯吾等三人の聲音のみ此深夜に響きぬ。浮世話終へたる後の話頭は、唯我が過去の履歴、現在の地位、未來の軌道、別けても事業の去就、細君の撰擇等の問答ありき。追懷すれば當時失笑すへき愚痴と、絶倒すへき妄念を語りたりしも、吾陰沈なる口調と熱心なる言語の爲に、能く聽者の耳を動かせしなり。夜は既に前夜の夢の頃とありしも休まず。偶々老母に故郷の母を問はれし時、我は端なくも涙の滴を浮ふる其時、全身に粟を生し、悲哀心中より溢れたり。老母は我が涙

を認め少母も亦俯うつむきて涙を出だせり。老母は吾哀情の鍵を打ちしことを悔ひ、悲哀の極度に到らぬ前に夜話を了へたり。我は吾室に退きて熟思したるも、故郷の母なる語の、何故に斯ばかり悲しきかを解せざりき。既に臥床に就きたるも、數日前より熱しつゝありし腦の、今や夢を容れざる程に焦れ、休み少なかりし目も疲れ過ぎて睡眠を絶つに至り、影暗き燈すら冥目せる睫を徹りて、瞳子に寫ること白日の如く、眼の暈かまは目を開く壁に現じぬ。起きては落ちたる月の餘芒を眺め、坐しては隣家の鶏鳴を聞き、復た臥して時計の音を數へ、眠らんとしては遠寺の鐘聲に呼はるゝ、其は猶ほ忍ふべかりしも、我は理由を知らざる愁歎の爲に、其夜も徹宵眠らざりし。果せる哉其後の手紙によりて、我も亦旅ながら父の喪に通夜せしなり」。

坐の人々は我に言はんとして言ひ得ず、折々顔を揚げては又俯きたり。我亦續きぬ。「此頃の天氣は日毎に晴れて雲なかりき。然して腦病者の腦は宛も晴雨計の如くなるに、十八日の晴天にも拘らず、我は殆ど囚人の如く鬱よさぎたれば。自ら強めん爲に快樂の場ある野外に出でたり。其は夏去ると遠からざれば、森の景色も猶ほ青く、秋にはあ

れど野邊の水は猶ほ歌ひて流れぬ。鳥の聲は楽しく誘ひ、相識る農夫は敬禮しつゝ過ぎゆきしも、何處にも吾顔を拭く色もなく、痛める心を拂ふ聲もあかりき。遂には秋日の熱に腦を焼かれ、我は其の光線に目を眩まされて、近くの丘の古社に避けたるも、樂しかるべき風の音も、涼しく寄する樹の蔭も、我には魔力を失ひたり。近頃の憐れの素振に、慈愛深き老母は轉た憐みを加へて、或は我爲に眞紅の西果を截ち、或は寶庫に古書畫を取り、或は葡萄の美酒を酌みしも無益にして、我は宛も蟬蛸の如く日暮に近きほど暗恨に沈み、食事は咽を下らざれば、此夕も未だ宵ながら臥戸に入れり。老母は我に睡眠薬を與へたるも眠らず、按摩を呼びしも眠らず、遂には醫師を迎へんとまでしければ、我は泣つゝ其厚情の身に餘るを謝し強て辭せしも老母は聽かず。我を起して共に語らしめしが、我は只泣くばかりありき。猶ほ記す老母の言に曰く、卿の我家に來りしより我は實に卿を吾子の如く思ふなり。曰く卿の兩親の日夜卿を懐ひますを察しつゝ、吾子に勝りて卿を思へば、欲するまゝに言ひ告げよ。曰く近頃聞けば父病みますと、卿の憂の程も知られぬ、去れど苟且かろうめの事あらば、さのみな心傷め玉ひ

そ、あゝ卿の如き優しき人を如何で子とする縁はなきや。儘ならぬ浮世と云ふとも斯ばかり心やさしくは、あどか出世の途なからむ、我は卿の出世と果報の爲め、疾くより神佛に祈念したり」と。一語は一語より深く、思愛肝に徹する程、我には答ふる語に難く、唯悲しき涙のみ答へぬ。老母は殆んど慰め兼て聲を作て、熟々我に告げて曰く、三百里とは耳に聞きたに遠きものを、斯ばかり弱き心を以て、如何かれは故郷を出られし。卿もし他郷に病まは、父母は其病を憂ふとは申さずや」と。兄よ母よ、我は此一語の爲に蘇生して、其夜より安く寐ぬしか、是の夜は葬式の夕なりしとよ。

此時一人の父老は曰へり、「抑も不思議とは吾等無學のもの、事どのみ思ひたるに、久しく都に學問せし身に、不思議あるこそ不思議なれ、實に親子の縁の深きは、さても學問の外ならん」。

我曰く「猶ほ此に止らす、昨夜の夢に、去年盜賊の爲に奪はれつる、長妹の門前に歸り來るは何の祥そや」。

一坐皆黙せり。夜の月は既に落ち、唯時々青線を曳く流星のみ空を飛へり。地は漸く冷へて残る螢の淋しく過ぎ、唯虫の鳴音のみ遠く聞えぬ。老母の一人曰く、「失はるゝは死の日にして、歸るは一年後の死の日、抑もや如何なる祥なるべきか」。

是の秘密なる疑問に於て、一坐の心は一變し、或ものは長妹の父の生命なりしとを云ひ。或ものは長妹未來の浮沈を兆するを信し、或は其歸るは死してか生きてなるかを問ひ、各其思ふ儘に判断せんとせり。吾母は涙を拭きて口を開きたり。

「世に仇なきを今ぞ知る、卿か旅に出てしより、卿と云へば皆涙なりし、聞けば卿は悲しき日に、母より優しき情に慰められしとは、亦有難き幸なりき。再ひ其方に逢もせば、吳々も卿か母の感謝を傳へよ」。

既にして又曰く

「袖ふり合ふも多少の縁と、况して親子は三世の縁と聞けば、今相去りて千里なるも、生死の際如何にそ不思議なからずやは。手紙の誤解、をたつつき落月、まぼろし幻影、端書、及び通夜の涙、皆是れ不思議ならぬはあらず。去れども其の一端の不思議なるか故に、全端に事實を求めば、迷を重ねるものに非ずや。娘は今厨にありて働かずや、世は過去を

尋ねんより、未來を待つこそ宜けれ。」

第九 離別

青山横<sup>ニ</sup>北<sup>ノ</sup>郭<sup>ナ</sup>、白水遶<sup>ル</sup>東<sup>ノ</sup>城<sup>ヲ</sup>。

此地<sup>ニ</sup>爲<sup>シ</sup>別<sup>レ</sup>、孤蓬万里征<sup>ル</sup>。

浮雲遊<sup>リ</sup>子<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>、落日故人情<sup>ヲ</sup>。

揮<sup>テ</sup>手<sup>ヲ</sup>自<sup>リ</sup>是<sup>レ</sup>去<sup>リ</sup>、蕭々<sup>ト</sup>斑鳥鳴<sup>ク</sup>。……………李白送友人

已ぬる哉浦島太郎の龍宮の三百歳も三日に覺め、リップバンウ<sup>ン</sup>クルの山中の一百年も一夜に過ぎたる如く、我も亦二週間の故郷の幻影を、一吸呼の如く暮したれば、今は唯上京の用意として四日五日の餘りしのみ。親切なる吾友は、此時間をさへ長からしめんと、酒瓶及び村落不時の用意にとて、學び置ける樂器を携へつゝ、交るゝ訪ひ來りぬ。三味線の音は陽氣にして揚り、横笛の聲は清越にして朗かに、尺八の響は陰氣にして籠りつゝ、各其人と其嗜好の儘に奏せられて、皆我が爲に名殘の曲とはなりぬ。

然れども吾心底に思はず忘れず繋ける約束は、吾戀人との再會にありければ、今猶ほ



日子のある間に、一時も永く留別し、一時も遅く訣別せんと急ぎ出てぬ。家族は平生の静着なるにも似ず、今日は我歓迎の爲に動き、叔父は親ら座を起ちて、禮儀の座なる客室ならで、親愛の場なる其臺所に我を容しぬ。曾て獨孤なりし大團扇も、今は子孫大に殖へて、我も亦其一個を把りにき。叔母は酒を温むる爲に立ち、娘は織女星の如く織れる二階を降りて梨子の下に走れり。數日の間に梨子の味の勝りしとよ、未だ熟するに至らざるも、熟せざる他のものよりは甘美なりし。

叔母は問へり、「何時上京する」と。我答へり、「多分三四日の後ならん」、曰く「去らば又何時歸省すへきか」と。吾前途の運命若し我に毎年の歸省を許すを豫言せば、我は好んで明年を約して、屢請はるゝ一年一回の望を満たすへきも、さもなくは我は苟且の言を以て、當坐を濟す能はさりき。渠等か屢一年一回と云ふに由りて、我は知る、此兩親の心に明年若くは明後年に於て、成就さるへき秘密の目的あるとを。然れども此の望多き明年と吾歸省と、果して一線上に落ち合ふへきや否。是は我知る所にあらざる故に、我は真情を以て答へたり、「成るへくんは明年も亦必ず」と、父母は熟々我首

府の事に多忙なるを察し、又我か故郷の愛と此家の快樂に疎からざるとを觀てければ、今は強て再度の歸期を以て我を責めさりき。去り乍ら此日は何となく淋しく、前日の宴に溢れし笑顔、好言、光れる眼、今欠くる所はなきも、悲しきものは離別なり。詞の谷なる情より言葉の泡の浮き盡せば、底は即ち涙の谷、波たつものは暇乞の名殘にて、一坐は漸く無言となりぬ。

日も熱し初めければ、叔父は我に假睡せよと、先づ坐を起ちて眠りに往き、叔母は用事ありて隣家に立ち出で、後には處子と處女のみ残りぬ。戀人は器皿を藏する爲に、我は黙思を取る爲に。我若し渠に問ふ事あらば、但しは渠より請ふ事あれば、語るは今そ其時なりき。然れども我は渠を知り、渠も亦我を知る故に、今更に相問ふともかく、唯々無量の愛の裡に、此無言の時をぞ過しぬ。

日は未だ亭午ならざるも少兄は野より歸れり。渠は此吉夢の中ある我等を窺きつゝ、足濯ひ、然る後我を客室に呼ひ、吾上京の日と再歸の期とを問ひ、併せて日子の許す限り滞留すへきを求め、然る後我に曰へり。

「我は古き端なき約束を、守るべきものとし記憶せる、卿の信實と節義に感ず。當時我卿を博多に送りて歸りしより、一層の注意を以て吾妹を看護し、唯卿か歸省の日を快樂ならしむるの念より外おかりき、今渠は年立ちて卿に見ゆる所の如し。然れ共卿は唯其一週間の妹を見て、未だ一年間の妹を知らず。渠は今健かに見ゆるも、其眼は未だ全く癒へず、其身も亦脆く寒暑に堪へず。斯く云へば吾意甚だ無情にして、大に卿の信實と妹の貞操を傷むるに似たれど、二人の幸福より云ふ時は、我は卿の胸より妹を放たん事を望む、唯此のみに非ず。卿と妹と遂に好配偶にあらず。妹は固より村落の智識、吾郷の有筆たるも、要するに農家の妻にして、決して首府に筆執る人の内助にあらず。今日に於て渠は唯卿か弟の妻にして、卿も亦首府より娶るべきを宜しく思ふあり。

今や天上に上らんとして疾くも梯子を外されつゝ、我は唯胸裂くばかりに震ひたり。今日まで我は唯今年の夢の、明年の實となるべきことを期し、吾戀人の隠れし光の陽はに照らす時來ぬべきを待ちしあり。吾心情の他なきが如く、渠の心情も亦一圖に我にありとのみ思ひき。今聞けば其容貌は紅葉の如く冬に枯れ、其美目は露の如く風に消へゆき、其心さへ亦我より外にも向くへしと。嗚呼是れ何等の語ぞや、焔ゆるばかりの熱心に、斯かる言葉を聞くなれば、誰が腸か斷たざらん、唯が琴か裂けざらん。忠告を謝する涕は出て、身を絞る血こそ流るれ、叔父の歡迎は何ぞ、叔母の心配も將た何ぞ、戀人の無言の情波は、果して何の光ぞや。皆是れ當坐の挨拶、吾情を釣りて喜ぶ都人の輕薄か。其れ然る乎其れ將た然らざる乎。斯くて我は迷疑より迷疑に下り、殆ど暗鬼を呼ばんとする時、漸くにして我に歸り、少兄に問ふて曰く、

「親愛なる吾兄よ、卿の注意の至れると忠告の辱なきを謝す。我は益卿の頼るべき骨肉の情斜からざるを知る。然れども今直ちに卿の忠告に従ふ能はず。吾決心を爲す前に、願くば二三の疑點を明めんと欲す。」兄は曰く「固より腹藏なく問はるへし」。是に於て我は問ひぬ。

「叔父は其娘を愛し賜ふや。」曰く「問はるゝまでもあし、今に残るは渠のみなれば、父母は一粒玉の如く愛てたり。然れはこそ其眼病の爲に憂ふるをれ」。曰く「叔父は亦

我を愛し賜ふや。曰く「然り父か卿を見る他と異なるは、前日に於ても知りぬ。渠は既に飽まで洪水の跡を觀たり、然れども猶ほ夫の熱き日に卿に従へり。古風ある吾父か故なく費さぬ時も汗も、皆卿の故に流せるなり」。曰く「叔父既に其娘を愛せば、必ず其を健かなる花嫁とも眺めらるゝこそ尋常なれ、如何に之を墨染の尼とせらることあらん。其愛にして、又我にあらは、固より我に病人を負はせんとは思はれざるへし、卿は然か思はずや」。

兄は未だ服せざるの顔色を以て言へり「然か言へば然るへくも思はるゝなり。然れ共首府に娶らば才學ある美人もあるへく、且つ里近ければ、往來にも便利多きを思へばこそ」。我答へぬ、「卿は渠を才なき色あきものゝ如くに語るも、我は決して爾か思はず。唯渠に欠くる處は學問なるのみ、然れども我を以て渠が心を見るに、宛も穿たざる井の如し。唯少しく金錢を懸けなば、無量の水は湧き出へし。我嘗て學問を思ふ、「妻たるに太と小き事なり、才と色とも亦甚た誇るに足らずと」。

「蓋し妻を撰むには其妻の人巧を擇むより、寧ろ天賜を擇はざるへからず。何とされは人巧は買ふへきも天賜は變ふへからざればなり。世人は多く金錢、門閥、地位より妻を求むるを非り、乞食婚姻と名けて賤しみ、學問に娶るを以て賢しきと思へるも、我見る處ろを以てすれば、學問を娶るは金錢を娶るに異ならず、學問は形變はれる金錢にして、之を娶るは他の門閥、地位に於けるに均しく、人巧を娶るものなればなり。色を求むるは世の笑ふ處あるも、色は天賜なるは賤しむへき金錢の比にあらず、才を擇む亦人巧の學問を採るよりも勝れるあり。然れども天賜の最も美なるものは、才と色とにあらず、唯愛即ち是なり」。

「兄よ我が竊かに喜ぶ處は、吾妻に求むる處は愛にして。吾妻に與ふる所も愛なるにあらず。愛は天賜の極美にして、才と色を求むるよりも遙かに罪なく、遙に幸あるとなればなり。吾戀人の學問なき、我に於て何んかあらん。若し世間隔たる他人の裡に、故郷の快樂、家族の快樂、朋友、親戚の快樂を棄て、親しく我に従はんとすれば、是れ其性命を我に懸けたるものにして、唯我は其愛に居るべし。我も亦學位、位地、富有其一あるに非ず、未だ家を成すにも至らず、吾手未だ物あらざるも、吾費は常に在り、

即ち我身と魂と是なり」。

「吾兄よ身と魂とを輕しと謂ふ勿れ、世は黄金の贄を有つ、此の贄を以て此の妻を買ひ、他の贄を以て他の妻を買ひ、贄盡るまでは妻を易ふるにあらざや。我吾生命を以て吾妻を買ふ、吾生命に二なければ、我も亦妻を易ふる能はざるべし」。

「我等の世若し波上の旅あらば、我は吾妻の船とならん、但しは沙漠の道ならば、我は房草とも香花とも清水ともなるべく、若し鳥羽玉の闇ならば、我は杖とも柱ともあるべし。若し天我等を祝せば、我は吾園の樹とありて、吾戀人を花冠に飾すべきなり。縱令ひ事吾口と違はんも、吾真心は然るなり、愛は汝を玉にする其愛をたに吾衣にせば、學ばざるとも何の疵ぞ。吾生命さへ渠にあらば、渠が學びの費は、生命の裡に含ますや。我等不幸にして貧あるとも、人間の生命は神の國の言葉、其は價なしに受くべきものと讀みしものを」。

「吾兄よ仰ひて楳間の額を看よ、太ども便なき破船の書ならずや。我は常に人世の行路難を嘆するも。兄よ許せ、未だ此家の如く廻瀾怒濤に夾まるものを聞かす。嘗て富有

かりし親戚の秋月なるは仆れ、堤あるは衰へ、咸宜あるは絶へさること縷の如く、入地なるは朽ちたる繩に似たり、唯此家のみ今岩の上に立てるも、而も叔父は秋月に嫁ける長女、咸來に往適ける三女の非運の爲に痛めり。唯々卿の妻の無難なると、吾戀人の未だ運命の書なき白紙なることの爲に、幾分か其心慰めらるへきも、渠をしも遠く音容の外に取りおは、叔父の徒然果して如何。若し吾非運の爲に此の鳥をさへ傷むるとあらは。其悲哀も亦將た如何。兄よ吾は能く過去に、現在に於ける、叔父の嘆息と其心配を知る。然り過去、現在の痛苦の爲には、叔父か笑ふ時に叔母は鑿み、叔父か言なき時に叔母は怨し、父母黙する時に、我は破船の下なる二女の涕を認むるなり。二女既に運命に棄てられ、今父母の悲みとなる。我も亦之を知りつゝ、僅に残る此の家之光、最後の望ある其の愛娘を捉らんとす、我豈に其心せずして可ならんや」。

此の時兄は微笑して答へり、卿の思慮の周到あるを謝す。斯ばかり深く心を寄する吾妹を、卿が手より誰か奪はん。然れ共注意せよ、是等の言多くは少年血氣の焰にして、他日自から消ゆる時あらん。唯々今より心して責任の帯を緊めよ」。

二人相黙すれば一家静まり、少女は其機にあり、叔父は正に眠りに沈み、叔母は未だ他より歸らず、唯兄嫁が晩食を支度する厨の音のみ響きぬ。頓て日は暮れ、戀人は復た機より下り、叔父は醒め叔母は歸り、其の夜の酒宴は前夜の酒宴の如く。尋常の話頭より起りしも、亦今日の酒宴の如く、再ひ涙に了りしなり。

翌朝我夢より醒めし時、惘然として初めて思ひ當るとありき。竊かに謂へり、我在郷の日は少なくとも十五日以上、燭を乗りて遊ふ古人の如く時を愛せは、確かに一ヶ月の事業を爲すべくありしなり。若し我今少しく我と戀人の境遇を思ひ及ぼさしめば、此十五日間は實に畢生の大時期、記憶すべきの時となるべかりき。嗚呼我何故に吾戀人を携ふる心を生せざりしや。何故に其父母を病まし、戀人の心を焦し、自からも思ひ悩みつゝ、渠等に申し出つることをせざりしや。若し優々として日を過ぎつゝ、猶ほ自から其人を愛すと云ふも、却て是れ戀の仇あらざや。嗚呼今は何事も後れたり。今は早や其日なく、事既に過ぎしありと。我は此の残念の爲めに宛かも好夢の醒めたる如く、茫然として途方に暮れ、戀人の顔も今は却て我が意氣なきを耻かしむる如く聞へ

ぬ。

既にして又思ひ廻せり、吾此の行は尋常一様の故郷の訪問にして、若し特殊の目的ありとせば、是れ唯亡父の墓參の外なきなり。此目的を以て歸省せるが故に、嫁娶の事に心なく過ぎたればとて、何人の前にか愧つへき。我は未だ嘗て誇言を爲さず虚飾もせざれば、今日遽かに人を欺き、自から欺くべきにあらず、事には皆時あり、人其時を作りもせん、去れど平素の所思あらで、由なき機會を待みて畢生の大事期を作るは、何人の手か之を能くせん。回顧すれば今日まで、吾事業に於ける主義は、自から巧遅の一線を曳き初めたるに、如何にか斯る大時期を、今拙速に沒了すべき。然らば則ち今暫時別かれて時を待つこそ當然なれ。去れど又考ふれば我は今謂ゆる寶の谷にあるにあらずや。然り我は今寶の谷を眺め過ぎて、空手に門戸に來れるあり。梨子は今年に實り、戀人は我を待ち、兩親は我に諷する時に於て、如何にか工夫あるべかりしに、無心に過ぎしとの愚さ。今は絶へず活如に響きたりし琴線も、忽にして音なく緩み、此家に於ける過去の言行は我を責め、嘗て端なく溢れし秋波、笑顔、好言等は、巧能

ありしほど耻辱とありて、吾顔を色なくおしたり。嗽口、朝餉の折に叙ふる、叔父叔母の追従も、亦我を慰藉するの力あかりき。

幽懷不可寫、去行三潯江曲とは。斯る折の所感ならんと、家の後門を出て、洪水の餘波に壞れし河塘を歩し、僵樹の下に東山の日を迎へ、露けき草路、綠蕪、青藍の野を經過しつゝ、仰て屏風山の朝暉を眺め、古村の墓場の眠を吊ひ、歸り來りて納戸を窺がひ、叔母か親しく其娘の髪を結ふを見て、始めて豁然迷ひより醒めたり。吾戀人の髪は其手自ら結び得るなるに、今日は吾離別なればとて、叔母自から手を下せるなり。嗚呼我戀人は如何許、此家の秘藏の娘なるよ。然り其二人の姉の、回し難き非運に奪はれたるか故に、斯くも残りて寶玉とされる其娘に、我如何なれば一朝夕に主たらんとするや。未だ首府に於て都人たる基礎立たず、故郷には飾る錦の輝かざる吾今日の運命は、未だ戀人を求むるに足らず。我か情事に迂濶ありしは、其花に手の及ふまで長せざりし故あり。花を見つゝも花折る心のなかりしは、是れ其遂に我花たるの念固く、又今こそ花に及ばされ、一年立たば吾手は確かに伸ふへしと信したればなり。嗚

呼是れ愛によりて愚に歸りし思慮あるも、吾笑顔を生かせしは、此の一點火なりしなり。此の眼を以て觀し來れば、戀人の愛我を勵まし、我を耐へしめ、兩親の望みは我を興起せしめ、晴々たる秋立ち初むる朝暉に、我も亦希望の人なるを覺へしなり。

我は起ちて歸京の第一歩を此家に初め、懇懇家族に別れを告げ、確かあらねど遠かるましき再度の歸郷を約しつゝ、「去らば」を興へて「去らば」を取り、門外に家族を残して出て立ちぬ。我を見送る戀人か窺かに浮める涙の珠に、我面影は宿りてあらん。其の清き露には、吾生命をも浮びなん、君よ歎きそ、遠からず又會ふへければ。

一 唯一年に一度を、

逢ふは別れ初めぞと、

星の逢瀬と墓なまは、

人には言へど、我ながら

六どせをこえて來つる身を、

悲しきものは名ごりなり。

あわれと君も思へかし。

三 人目の關にへだてられ、

二 別るは易く遇ひ難く、

たのしく語る由もなし。

言なく君に逢ひぬれば、  
言なく君に別るかも。

床わたし、かき夜半の夢。

四 黙すは愛のあまりぞ、と

六 去らば戀人顔見せよ、

昔しも云へば、もろともにも

悲しきとこなうつむきそ。

云はぬは云ふにいやまごら、

君が面影今一度、

真心かはす外ぞなき。

胸の鏡に寫りてよ。

七 路にこぼる、我なみだ、

五 わだし女のたはれける、

枯艸そめて、來ん春に

都すまひのわびしさに、

花つむ君が手の裏の

君が姿と寝る時は、

かほる嫁菜に生へよかし。

我は其日の亭午に吾家に歸り、速に出立の用意を治め、猶ほ旅中の讀料にもやと舊書庫中を點檢し、必要と思ふ者を採りし後、少弟を呼びて渠に其鍵と目錄とを譲り、猶ほ此

書庫の甚だ貴き時、遠からず來るべきを言ひ聽かせ、渠を助けて曝書を爲さしめたり。』  
既にして吾滞留の此半日に縮まるを聞傳へて、忠實ある郷黨は幾交替して吾家を訪ひぬ。裡に一人の老衲ありき。渠は吾兄の園藝、置酒、郊遊の友にして、其愛する獨子は、首府に於て我に侍りければ、渠は常に「父子隔りて君家の恩となると、宿世の厚き縁ならぬ」とて、常に吾家に謝したりき。渠は吾家の珍客を祝し、其子の消息を得る爲に吾歸省の即時に來る魁なりき。吾滞在の間渠は殆ど毎日の如く訪ひ來つゝ。家貧しけれども屢鮮肉と美酒を携へ、常に吾家に對する赤心を寄せ持ち來りぬ。渠は實に近處に隠れなき琵琶法師なるも今は老いたり。時には興に乗じて彈ずるとあるも、琵琶のみ彈じて親ら歌はず、其琵琶は益々古く、益々好音を發するも、漸く近處の少年の玩具となり了らんとせり。今日渠も亦離別として、雞を割き酒を携へ、前後の會者と共に一大團樂を成したり。渠が家より琵琶を携へ來りし者ありて、宴酣なる時之を渠が前に置き、「一曲所望」と先づ喝采せり。事の不意なるに法師は暫時呆然たりしが、其獨子の主人の祖道なればとて、衆客の所望の拒み兼ね、例の如く一二曲の短歌

を聲なく奏して喝采を取れり。宴止みて後、猶ほ他の二三曲を強ふるものあり。法師も辭せず、醉聲もて數曲を弾きたり。最後に我は今一曲を奏すべく請ひたるに、興盡きたりと辭したり。我其飽過ぎて慵げなるへきを想ひつゝ、親ら曹達の一服と冷水の一盃を取りて再び請ひたり。渠も今は拒み難く、琵琶執りて調子を新ため初めぬ。此日は夕立の雲空を掩ひて蒸し、且つ酒後にして人衆かりければ、我は親ら法師の爲に團扇を取り、正面に屹坐し扇きつ渠の顔を諦視したり。渠は吾熱心の爲めに生氣を蘇し、坐を直し、面を改めて、眉目明かに、胸宇より一撥下して、果然たる大音聲に彈じ初めしは、源家の兩遺臣、亡君義朝の菩提所に期せずして相會し、初には源家の不運を嘆じ、次には源家の再興を圖り、最後に二人天日を指して誓ひつゝ、宛も一人は死し一人は孤を立つるの約を確め、各手を分ちて其責任に赴く一段、痛快、豪宕、沈鬱、悲惋、忠臣の腸、義士の魂、亡國亡君の怨、四絃一聲の裡に裂け了りぬ。坐に曲中の人の如く、我も亦心の鍵胸の戸碎け、頭を擧げて落涙し、唯悵然として言葉もなく、或は前日の詣參を思ひ、或は野間幼弟との痛嘆を追懷し、孤憤半は沈愁の裡に流れたり。少弟も亦悄然として唯吾顔のみ護りてありき。

默然たる満堂未だ賞讃の聲を揚げざる間に、今迄凝滞せられし玄雲、空を捲きて晝暗く、颯々然として風地を撃ては、白雨落ち來りて地を走り、椽を打ち軒端を敲き、近樹騒ぎ遠林搖き、須臾にして倒盆の驟雨を鼓舞しければ、坐客皆驚きて四散し去りぬ。我も亦幼弟を提へて曝書を藏めんと急ぎ、又もや渠が心の澹然無欲あるを憐み、所持をかくして凡てを所持せる如くなるを愛し、大卷小冊未だ一時も彼が嗜好を引くに足らざるを嘆したり。我曰く「我は明日又都の方に往くべし、又何時逢ふべきか知らざるも勉めて學問に進み、又遇ふ時は是等の書冊を讀得る程、上達して居さるべからず。其時には我は必ず卿を東京に迎ふべし、我は愈明日より都の人となるべければ、常に我か幸運を祈るべきぞ」。彼は始に悲み、中には喜び、終には例の如く背面したり。如何なれば渠は斯はかり我を泣かしめ、如何に久しく童子に似たるや。去れど尙幼なれば是非もなかりき。

琵琶法師は醉と疲の爲に眠りぬ。吾は其醒むるを待ちて禮辭を述べしに、彼は此日我



か聴者たりしとの、千万人の聴者に勝りしとて我に感謝し、是を渠が最後の弾曲なるへきを語りて、思はず一滴の涙を浮めぬ。明朝の首途に外客の急きと家内の喘きの爲に、日は早く暮れ、夕は早く夜となりぬ。今宵と云ふ今宵こそ、我に一刻千金の時なれども、別に著しき夢もなくして鶏鳴きぬ。此未明より、母は弟妹を起して、首途の用意の今朝迄延ばされしことを調へしめしが、全く整頓せし頃は、日既に三竿の頃なりき。母は晴れたる空を眺めて、今日も亦甚暑なるべきを嘆じたり。此時我を送るべき人々は、男姓には亡父の友、家兄の友、我弟の友、女性には母、兄嫁、兩妹の友、家に満ちたり。戸外には一村の兒童、幼弟以下兩孫兒の友、遊戯の友は相呼び來り、流れを隔て、立ち並び、今出て來る我を待てり。

我は兩妹の助けに由りて奥室に衣を更へたり。装ひ終りて長妹に言へり。

「潔く其身を持て。願くは雪よりも白かれ。卿の衣を汚さしむる勿れ」。

渠は唯其頭を垂れて無言なりき。我小妹に曰へり。

「卿の言を寡くし、卿の舉動を靜かにせよ。之れ母兄の愛卿に高まる道なれば」。

圖らずも幼弟は我前に來りて、言なく我を窺きたり。

「弟よ今別るべし、勉強して都に登る時を待つべし」。

我は今渠の手を取りて玄關に出でぬ。兄は我を迎へて曰ふ。

「我嘗て父の紀念碑立てんとして止みにき。願くは父の寫眞を油繪に移して、永久我家に保存せしめよ。卿既に獨立の身となれり。願くは他郷に父の名を汚がすと勿れ。窮通は命なり、願くは窮する爲め他人の憫みを請ふ勿れ。願くは在京の郷人の爲に盡力せよ。首府若し卿を容れずんば、復た歸りて吾家に食へ」。

我は語々記憶に疊みつゝ、今は最後なる母の面前に至れり。彼は涕の笑顔を以て目迎へて曰へり。

「用意はよきや。最早忘れしものもなきや。久しぶりの歸省なれば、今四五日をと思へど是非もあし。故郷には兄弟多し、我爲に憂ふる勿れ。唯卿は愛相もなく生活難き都に於て、一家の先祖とこそおれば、今後受くべき困難の程も思ひやられぬ。去れど卿か父も勞して中興の祖となりたれば、卿も亦勤めて勞せよ」。

母は黙し、暫時して亦曰へり。

「漸く肥へたる其顔の、復た見る影もなく瘠すべき乎。去れど進め、母も卿の出世を禱れば」。

我は顔を隠して涕を拭き、祖道の客に心を強めて吾門を出でたり。時維れ八月廿五日、故郷に來りし第十八日なりけり。門前に出で、仰げば、最と高き秋の空は吾行方に向へども、天は我と相去るとあし。立ち列ぶ軒端は我を迎へて過ぎ、窓の人は後より後に隠れぬ。行々郷人に別れを告げつゝ、早くも村の門に來りぬ。回顧すれば是迄送り來りし兄弟は、此より去りて空しく眼中の幻影とありぬ。尙ほ往くほどに、郷黨も亦去りて幻影とあり、我同年の友は我を送り來ると二里、亦去りて幻影とありぬ。今は我家を出づると三里、車を停めて願望すれば。吾故郷も亦幻影とあり、暫らく見えて亦消へぬ。

一 暮れゆく月日又明けず、

追懐にぞ残りける。

今日も昔となるめれど、

たのしき時は故郷の、

二 別れては又逢ふことの、

ありや、いづぞと知らねども、

三 雲の通路波の音の、

戀しき人は故郷の、

及ばぬ旅に我ゆけど、

追懐にぞ残りける。

愛でたき景色は故郷の、

追懐にぞ残りける。

歸省 終

明治廿三年六月廿四日印刷  
明治廿三年六月廿七日出版  
明治廿三年七月廿六日再版

著述者

發行者

印刷者

印刷所

發賣所



定價金拾五錢

宮崎八百吉

東京牛込區市ヶ谷砂土原  
町二丁目四番地

垣田純朗

東京京橋區日吉町四番地

宮地久彦

東京京橋區西紺屋町二十  
六番地

秀英舍

東京京橋區西紺屋町廿六  
七番地

民友社

東京京橋區日吉町四番地

②  
ア  
ハニ

2802

